
アルニカ交響曲

結千 るり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルニカ交響曲

【Nコード】

N8769Q

【作者名】

結千 るり

【あらすじ】

世界は現在より何十年か先の日本。

世界最高のネットワーク管理都市に姿を変えた首都、東京は“花柳”に。

ネットの世界での三次元接続が可能となった“電腦世界”との二重世界都市で起こる数々の事件。

解決するのは謎の少女アイコン“アルニカ”。

桜色の少女が電腦世界を駆け抜ける。

世界はちよつと電子的。

でも内容は非電子的？ななんちゃってストーリー！。

初めてなので時間はかかるかもしれませんが、何卒よろしくお願
い
します

喧嘩買いの少女（前書き）

世界には、たくさんの音が絶えず響いている。
人々の話し声。

様々なリズムの足音。
道を行き交う車の音。
空を裂く飛行機の音。
捨て猫の弱い鳴き声。
全ての波が交差して、町は都市になる。

一人の少女がその騒めきの中で、目を閉じた。
耳を澄まし、ひたすらに音を聴いていた。

彼女の前では、全てが白と黒の鍵盤の上を滑る音符になる。
楽しそうに鼻を鳴らす少女の手を、優しい母の手が包み込んだ。
少女は丸い瞳を大きく開き、可愛らしく微笑んだ。

私は音の国のお姫様。

私の夢は、正義のヒロインになること。

まるで、お母さんのような、さくら色のお姫様に！

喧嘩買いの少女

突然ではあるが、緊急事態だ。
学園内で喧嘩だ。

現場は確か高等部のグラウンド。

午前10時26分。

私は急いで階段を降りて、黒の革靴に履き替えた。

校舎から飛び出して、グラウンドに入った。

爆音がまだ響いているなかで私は勢い余った両足を止めた。

黄土色の砂が軽く宙を舞った。

金のエンブレムがついたパスケースを見せ付けるように前に突き出す。

「椿乃峰学園生徒会です！校内での能力を使用した喧嘩は禁止ですよ！？それに男子生徒は……………」

私は次の台詞に進もうとする口を止めた。

グラウンドには地を這うように倒れる男子生徒が複数。

その真ん中に一人だけ女子生徒が無傷で立っていた。

黒に近くも深い桃色のふわっとしたショートヘアを両横で少しずつ

結んだ女子生徒はこちらを向いた。

「……………何？」

*

*

五感ネットワークシステムがほぼ日本全体に張り巡らされた。

その中心都市東京都を丸々ネットワーク管理都市《花柳》とした。

花柳は研究所と男女別学園と一通り必要な施設、店舗が揃っている。

一般人の居住区と隔離対象者の居住区に分かれ、それぞれ半分づつ。

隔離対象者は異常な能力を持った者、特定の能力に長けた者。店舗の者達も能力者が多い。

ネットワークシステムも最先端を行き、電腦世界をネット内に形成している。

花柳内の人間は、全て規則に基づいたアイコンを使ってネットワークに接続ロケインしている。

この犯罪の多発性を大きく秘めた二重世界都市は、研究所にある電子頭脳コンピュータと各学園の生徒会によって管理されている。

ウィルス駆除にも力を入れるため、電腦世界には最大級のファイアウォールが設置されている。

五感を持つてネットワークに接続できるのはまだ不完全で、時間に制限がある。

また、ウィルスなどによる被害も食い止めきれないのが事実である。その中で今話題となっているのは《アルニカ》という少女アイコンである。

桜色の髪、桃色の服に青いリボン、主に夜、ウィルスが出現する時しか現れないという謎のアイコンである。

電腦世界でシステムを蝕むウィルスを圧倒的な速さで駆除するらしい。

花柳の七不思議として伝わっている。

教科書を読み返すように回想した芦屋千代は生徒会室にいた。

10時55分。

生徒会室のパイプ椅子に桃色ショートヘアの女子生徒は手足を組んで座った。

長い灰色のテーブルを挟んで生徒会所属の女子生徒芦屋千代がきちんと足を揃えて座っていた。

窓の外には桜が咲き乱れる姿が見える。

「私学園を救った正義のヒロインですよ。遅刻とかカッコ悪いよ」

「あなたがどうやってあの男子生徒達を倒したか言ったら遅刻しないわよ？」

「だから」

グラウンドで次の授業の腕ならしをしていたら男子らに「お嬢ちゃん遊ぼう」って誘われたからよろこんで喧嘩を買ってやった。

「喧嘩なんて売ってなかったんじゃない!!」

「だって邪魔だもん」

何故かシヨートヘアの女子生徒は小声で喋っていた。

彼女はため息をこぼしていた。

11時から授業が始まる。

シヨートヘアの女子生徒の上履きは青、一年生である。

ちなみに二年生は緑、三年生は赤である。

確か一年生は次の授業………能力別測定か。

と思いつながら芦屋はため息をついた。

「女子校に侵入した男子をぶっ倒したのって罪じゃないですよねー？」

「生徒全員を病院送りにするのはやり過ぎだとは思わないの?!」

「思いませんねー」

「即答しない!」

女子生徒のふわふわした口調に芦屋はキレかった。

男子生徒は全員病院に送られた。

生徒の全員が耳から血を流して倒れていたからである。

耳鼻科へ急行した。

ついに芦屋はテーブルに両手をついて立ち上がった。

しかしシヨートヘアは首をかしげて芦屋を見上げた。

「そんな怒ることですか」

「さっきの生徒が全員病院に行ったのよ?!」

「そうですね」

「ケンカなら普通耳鼻科なんて行かないでしょ?!」

「そうですね」

「いいとも、か!!」

芦屋は頭を掻いた。

「あゝ、もうっ!!」

「あまり喋りたくないんでここらで帰ります」

シヨートヘアが席を立ち、廊下へのドアに向かって歩き始めた。

もちろん芦屋は止めに入った。

「待ちなさい!」

「鼓膜やらないとダメなわけ?」

「え?」

芦屋に振り向いたシヨートヘアは鼻で息をついた。

「喧嘩なら買いますよ?」

シヨートヘアは初めて並の音量で喋った。

その声は芦屋の耳が少しおかしくなるほど大きく聞こえた。

一気に緊張感を漂わせた生徒会室。

この緊張感をドアのがらりと開く音が帳消しにした。

セミロングの女子生徒が二人に視線を向けて言った。

「芦屋さん、美咲歩海さんを音楽室に連れてきてください」

「生徒会長?!美咲歩海って……」

芦屋はシヨートヘアの女子生徒美咲歩海と生徒会長を交互に見た。

美咲が頭を抱えてため息をついた。

生徒会長が芦屋にわかるように説明した。

「その子は椿乃峰一年のトップレベル、《音箱》（オルゴール）の

美咲歩海さんですよ。」

芦屋は自分の口を塞いだ。

「ええ?!」

美咲は生徒会長に軽く一礼して生徒会室を出ていった。

芦屋は廊下に出て美咲の背を見ていた。

生徒会長が芦屋を覗いた。

「花岡先輩、本当にあの子が噂のオルゴールなんですか?」

「気になるなら見てみますか?能力値測定」

* * *

音楽室。

11時09分。

音楽の歴史に名を残した者の肖像画が壁にいくつも掛けられていた。紫のカーペットに超防音の白い壁。

いつも黒板の前にあったグランドピアノは撤去されていた。

黒板の前には美咲歩海が立っていた。

その反対側の端には計測機が置いてあった。

計測担当の先生が耳栓を付けはじめた。

「能力値測定を行います。美咲歩海、始めなさい」

中に入った生徒会長花岡と芦屋千代は渡された耳栓をしっかりとめた。

美咲は先生に向かってメモを渡した。

「何でもいい？」

先生はうなずいた。

美咲は定位置に戻り、大きく息を吸い込んだ。

室内の全ての酸素を味方につけて、美咲歩海は精一杯の大声を張り上げた。

「この、バカヤロオオオツツ!!!」

爆風が巻き起こり、壁の肖像画が次々に音を立てて床に落ちた。

強化ガラスのはずの窓も繊細なガラスのフィギュアを落としたように割れてしまった。

芦屋と花岡は耳栓を懸命に押さえた。

美咲の髪は激しくなびいて、大声は室内で波をつくっていた。

美咲の声が止まると、ゆっくりと風が止んだ。

先生が耳栓を外して計測機に表示された数値を記録ノートに記入し

た。

「美咲歩海、321dB。速度343km/秒。」

美咲は先生に一礼して音楽室を出た。

芦屋はそれをすぐさま追って廊下に出た。

「待ちなさい！」

美咲は廊下の真ん中で足を止めた。

振り向いて首をかしげる。

「何？」

「……あんなに大声出せるなら最初から喋りなさいよ！まったく…

…」

美咲がため息をついて芦屋の前に立った。

ポケットから黒い耳栓を出してめんどくさそうに芦屋に手渡した。

「話してて気分悪くなったら付けてください」

美咲はさつさと教室に向かってUターンした。

その時、爆発音とともに大きな震動が美咲らを襲った。

美咲は耳を塞いで辺りを見回した。

芦屋と花岡、計測担当の先生はまだかがんで耳を塞いでいた。

美咲は音楽室へと走った。

制服のスカートにぶら下がるカラビナポーチから小さな銀の音叉を取り出した。

音楽室の壁に軽く叩きつけられた音叉は、美咲の手元で震えだした。

音の波は壁を跳ね返り、音楽室中を響かせた。

「ロゲイン！」

美咲はあっという間に姿を消し、揺れが止まって他の三人が見渡す頃には美咲歩海の姿はなかった。

どうやら爆発は科学室のウィルス脱走によるものだったらしい。

電脳世界にロゲインした美咲歩海は桃色のふわっとしたスカートに青いリボン、桜色の髪、桜色の瞳の少女アイコンに変身していた。

「その喧嘩、買ってやるよ！」

計測担当の先生が無線電話の連絡に驚愕した。

「花岡！ 電脳に繋いでくれ！」

花岡が黒いノートパソコンを開き、電脳世界に接続した。

「これは……………！」

芦屋は美咲の姿を探しながらも画面をちらと見て驚愕した。

桃色のふわっとしたスカート、服に青いリボン、桜色の髪、桜色の瞳の少女が銀の音叉のようなものを震わせてウィルスを除去していた。

その震動は触れずにウィルスを切り裂いた。

水色の電脳空間に映える桃色の少女、彼女は……………

「……………アルニカ！！！」

アルニカは音叉を横に滑らせ、ウィルスに向けて言い放った。

「ピアノツール！」

アルニカの前にずらりと鍵盤が現れ、ピアノ曲《春の歌》が流れ始めた。

音は音符として立体化し、ウィルスを包み込んで消え去っていった。アルニカが両手を鍵盤の前にかざすだけで鍵盤は美しい旋律をひたすら奏で、ウィルスが全て音符に包まれるまで曲は続いた。

演奏を終えると、鍵盤は光の粒となって消え去った。

アルニカも目を閉じてログアウトした。

11時24分。

芦屋は圧倒されながらもハッとして科学室へ走った。

その後、芦屋千代は一度も美咲歩海を見なかった。

喧嘩買いの少女（後書き）

音は、いつも人の心を動かします。

その音が心にノックをすると、無性に体が動きます。

口の端っこが少し上がったたり。

真っ黒な目が輝きを取り戻したり。

音に合わせて手足を鳴らしたくなったり。

その歌を口ずさみたくなったり。

不意に、涙で頬を濡らしたり。

音は、言葉がなくても世界中の心にノックする事ができます。

……………というのがこの物語のテーマです。

分かりにくい場面もあるかもしれませんが、伝えたいのは音は世界の壁を越えるということです。

アルニカは“音”そのものだと思いつつ書きました。

この物語に気付いて下さった読者様、心より感謝申し上げます。

ありがとうございます！

第一楽章 1：アルニカの正体（前書き）

後書きに本当の後書きを載せた馬鹿者を、どうかお許し下さいませ。

第一章 1：アルニカの正体

午後二時ちようど。

椿乃峰学園女子の生徒らは下校時間になっていた。

一年生の教室はいつものように《音姫》の噂で持ちきりだった。

一年生の間では《オルゴール》の美咲歩海をそう呼んでいた。

理由は単純だった。

「美咲さん、全ての楽器を演奏できるんですって」「同じ年でも尊敬するわ。だって能力値が十段階の十なんだもの！」

「椿乃峰のエースも夢じゃありませんわ！」

美咲歩海はあらゆる楽器を奏でる事ができる。

楽譜がなくてもあらゆる楽曲を奏でる事ができる。

美咲はそんな噂を素通りして学園を出た。

本日は快晴。

雲なんてどこにも見当たらない。

少し出かけてもいいが、美咲には少し厄介な用事があった。

それは朝8時03分にさかのぼる。

一年B組の美咲歩海の机がバシン、とたたかれた。

「今日から寮生活スタートだよね？案内してあげる！！」

生徒会書記、芦屋千代が一年B組に乗り込んでいた。

もちろん一年B組の生徒はみんな不思議、かつ興味深い芦屋と美咲

の会話をひっそりと聞いていた。

美咲は可愛い桜色のメモ帳で全面否定した。

「全力で拒否します」

「大丈夫！私も寮生徒よ、あなた寮は初めてらしいし一緒に行つてあげるって！」

美咲は話半分に聞いているので、めんどくさそうに返答。

「いなくても部屋わかります」

「とにかく放課後正門で待ってなさい！」

美咲は呆れてページを変えて書いた。

「それ、何かかこつけて私に喧嘩売ってるみたいですよ？」

……。
また書いた。

「あ、もしかして誤認逮捕の謝罪に来たんですか？」

「やかましい！」

芦屋はさらに机をたたいた。

「とにかく来なさいよ？」

芦屋は少しご機嫌ナナメで帰っていった。

隣の席からポニーテールの女子生徒が話しかけてきた。

「あの方、生徒会の芦屋様でしょう？お知り合いなの？美咲ちゃん」

美咲はメモ帳にまた書いた。

「一度喧嘩売られた」

女子生徒はメモを見て苦笑いした。

「浜風は寮？」

女子生徒浜風莉子は手をひらひらと小さく振った。

「私は帰宅生徒よ」

「そ」

というわけだ。

そんなわけで美咲歩海は正門に来ているのだ。

美咲の前には制服を一点の乱れもなく着こなした芦屋が立っていた。

帰る生徒らの人混みの中で芦屋が喋った。

「来ないと思つたわ」

美咲はメモにボールペンで書いた。

「耳栓」

芦屋は額に手を当ててため息をついた。

「……しないと会話できないわけ？」

美咲はカバンから木工ボンドを取り出した。

「……瞬間接着剤で付けてあげようか？」

「何で持つてんの?!しかもそれ瞬間でくっつかないし!!」

「じゃ」

美咲は勝手に正門を出て女子寮に向かった。

「あ、ちよつと！」

芦屋がその後を追いつき、結局二人で女子寮に向かった。

寮の前には草花がきちんと管理された芝生の広場があった。

ちよつとそよ風が満開の桜を揺らし、花びらを舞わせた。

わざわざレンガで道まで作られていたが美咲は平気で芝生をぐしゃぐしゃと踏んでいた。

「荷物は届いてるはずよ、さっさと終わらせましょう？」

「引越し屋？」

美咲は小声で強気を忘れずに返答した。

「給料は無いからね」

「手伝つてあげるって言うてるの！」

二人は女子寮に入ってしまった。

オートロックの扉を抜け、まるで城のような玄関ホールを前に美咲は目を輝かせた。

白いタイル床にアンティークな照明、美しい弧を描く二つの階段、その先の壁には日の光を彩るステンドグラス、芦屋は美咲のために止まってくれた。

「すてきでしょ？」

「……とても」

芦屋がニヤニヤしているのに気付いた美咲は少し恥ずかしそうに美しい部屋から目を反らした。

「へ、部屋は202。案内だけでいい」

「見られたくないものがあるの？」

美咲は呆れるように弧を描く階段を上った。

芦屋は階段を駆け上がり、美咲をすぐに追い越した。

二階に上がり、左側の廊下に案内した。

赤に金の縁どりのカーペット、所々に置かれた小机に置かれた花瓶にはよく映えたホワイトレースフラワーが生けてあった。

一輪でもきれいだが十数本生けてある。

「202よ」

「わざわざどうも」

「さあて！ちやっっちゃとやっっちゃいませよー！」

「え、ちよつと……」

芦屋は肩を回し、202の扉を開けた。

「失礼しまーす」

美咲が止める間もなく芦屋は部屋の中へ入っていった。

赤に金縁のじゅうたん、白い壁に大きな窓、白いベッド、ドレッサー、段ボールの山はあれど、文句無しの美しい一人部屋！

部屋を入居者より早く物色した芦屋は手を組み、ぐるりと回って目を輝かせた。

「新鮮！最高！」

「見たかっただけね」

「だって私は二人部屋なのよ?!」

美咲は石化した。

まるで魔法でもかけられたように。

「まさか」

芦屋は可愛らしくウインクした。

「私も寮生徒よ」

「却下」

「教室で言ったよね?!それに私は先輩よ?少し礼儀をわきまえたらどうかしら?」

芦屋が腕を組んで上から視線を美咲に送った。

その視線に美咲は強気な態度を返した。

「また喧嘩売ってるんですか?」

二人はじつとにらみ合い、20秒後、芦屋は深呼吸して気持ちを切り替えた。

「引っ越し済ませてからじっくり反省しましょうか」

「逃げるわけ」

美咲にはそうとしか見えなかった。

売られた喧嘩、買った喧嘩、それを売った本人が『引越した方が先ね』と後回しにしたのだから。

口を尖らせる美咲に見向きもせず、芦屋は辺りを見回した。

「血の気が多いのは女性としてどうかしら」

美咲は低めの音をぐわんぐわんと響かせた。

焰地色のカーテンを静かに開け、芦屋はふと息をついた。

ふわふわの黄色のカラビナポーチから銀の音叉を取り出し、震わせた。

「やっぱり一人で来るんだった！」

音叉を芦屋に向かって振り上げた瞬間、芦屋が振り返った。

一瞬。

芦屋は美咲の右手の音叉を叩き落とし、手首をそのままつかみ上げて美咲の腹を支えた。

美咲の身体はふわりと浮き、床に叩きつけられた。

思うに、背負い投げに近かった。

美咲は、何が起こったのかにわからず理解しかねた。

ただ受け身を知らない美咲はまともに頭を床に叩きつけ、脳内で鐘のような低い音が響いた。

掴まれていない手で頭を撫でた。

「痛ア……………」

「少し頭冷えたかしら？」

美咲は芦屋を見上げて睨み付けた。

芦屋は美咲の腕を引き上げ、立たせた。

「やっぱり手伝いられない。一人でやる」

「まあ、そんなに一人がいいなら仕方ないか。私は反対側の棟の305にいるから、何かあったら来なさいね」

「うん、絶対行かない。」「社交辞令って言葉が脳内に無いのかしら」

「じゃあ……………」

美咲は満面の笑みで部屋を出る芦屋に言った。
「片付けが終わったら必ずお伺いしますわ」
「やかましい！社交辞令丸見えじゃない！！」
芦屋はまたご機嫌ナナメで扉を閉めていった。

*

*

10時18分。

美咲歩海は片付けを終え、ベッドに一人座っていた。
部屋は真っ暗でよく見渡せず、芦屋が日のあるうちに開けた窓から
部屋を覗く月の光のみが美咲を照らしていた。

「は……………るの……………うら……………ら……………の……………すみだがわ……………」

美咲は小さく、口元に耳を近付けなければ聞こえないくらいの声で、
《花》を口ずさんだ。

作曲家、滝廉太郎が好きなわけでもない。

この曲も小学校の音楽の授業でみんなで歌うような思い出しかない。
しかし美咲には、そんな思い出さえない。

会話する人に耳栓を渡すくらい自分の《膨大な音波》を知る美咲が、
音楽の授業で歌うわけがない。

みんながピアノを囲えば、美咲はドアの隅っこで口を堅く閉ざす。
リコーダーも、みんなが楽しそうに楽譜を見ながら吹けば、美咲は
下唇を開けて空気を逃がし、吹き真似して楽譜を閉じる。

美咲歩海は絶対に精一杯の楽しい歌声を響かせない。
今口ずさんだ歌も微かな音波を部屋に響かせ、美咲の目蓋をゆっく
り上げさせた。

「ログイン」

そう言った瞬間、美咲はベッドから姿を消して電脳空間へ接続した。
桃色のスカートの服、青いリボン、桜色の髪と瞳、群青の電脳の夜

空を音速で軽やかに駆けた。

美咲歩海は《アルニカ》になって夜空を走り抜けた。七不思議の一つ、主に夜しか現れず、ウィルスを圧倒的な速さで駆除する謎の少女アイコン《アルニカ》は、美咲歩海のことなのだ。でも誰もそれを知らない。

美咲は自ら決して《アルニカ》の存在を語らない。

この秘密が自分から一語一句洩れないために、美咲は《アルニカ》の存在を、正体を決して明かさない。

「夜の電脳は静かだからね。のびのび散歩できるもん」

ウィルス駆除ツールを備えたアイコン《アルニカ》は、花柳で駆除仕切れないウィルスを駆除し、管理する。

しかし美咲歩海はそれを二の次として、音速電脳散歩を楽しんでいる。

時間帯として学生の消灯時刻を過ぎている今、《アルニカ》は誰の目にも映らずに散歩ができるのだ。

群青の空を仰ぎ、音速で空間を駆け抜けた。

風が髪をなびかせて、アルニカはその時間、一日の中で唯一の自由を手にしていた。

その時、少し遠くでよからぬ音波を察知した。

アルニカは直ぐ様音波をたどって走りだした。

隔離区域の共学高校、紫陽花学園の近くのようなようだ。

すぐに到着し、ウィルスも確認した。

学園のメインフロアで赤く炎をまとった犬のようなウィルスが三個、うろついていた。

メインフロア、つまりホームページのトップである。

全てが立体化したこの電脳世界ではホームページも立体的な校舎となり、公的ファイルも校内を浮いている。

アルニカは施錠された正門を音速で飛び越え、ウィルスの前に立った。

辺りには誰もいない。

あまり人前で駆除するのは気が引ける。
何故なら

「恥ずかしいもん」

アルニカは瞬時に大きめの銀の音叉を両手で持ち、震わせてウィルスの前に走った。

音叉が触れると、ウィルスはたちまち光の粒子となって消えた。

何秒も経たずにウィルスは消え、粒子が地に溶け込んでいくのをアルニカは見ていた。

「お見事じゃん」

「?!」

アルニカは今までにないくらい驚いた。

確かに辺りには誰もいなかったはず、ならばこの声は………隠れていたのか？

メインフロア正門の柱、アルニカが振り返った先は電腦の月の光を遮る建物の影のせいで真っ暗だった。

アルニカの脳内でたくさん言葉がぐるぐると駆け巡った。

もし有人アイコンだったら？

もし自分が《アルニカ》であるとバレてしまったら？

その恐怖心の奥底で、好奇心が光った。

そこにいるのは何だろう？

まるでお化け屋敷の中で不自然に鳴った黒電話の受話器をそっと取っってみたくなるような。

危険なのは承知の上でも、そこにある何かを確かめたくなる、そんな好奇心にかられて、アルニカは口を開いた。

「……………誰か、いるの？」

真っ暗な柱から何かが静かに降りる音。

少しずつ近づくとペタペタという不自然な足音。

影を抜け、月の光を浴びたその姿にアルニカは一瞬口を動かすことを忘れた。

一点の交じりもない黒のしなやかな体、黒に映える黄金色の瞳、ア

ルニカと少し距離を置いてそいつは座った。

「黒猫……………」

群青の春の夜。

10時24分。

アルニカの音叉の振動も止まり、二つのアイコンは電腦の月に照らされて、沈黙した。

第一楽章 2：黒猫

闇に溶けるような黒くしなやかな姿、どこか鋭い金色の瞳、黒猫のアイコンは校舎の柱から降り、アルニカに近づいた。

10時24分。

アルニカはその容姿に呼吸さえ忘れた。

しかしすぐに我に帰り、黒猫アイコンをまじまじと見た。
絶対的な疑問があったからである。

「……………黒猫は不正アイコンのはずよ？あんだ逮捕されるんじゃ……………」

その通り。

花柳の電腦世界においては、国際的にもネットワークを広げているため、世界で不吉とされるものをアイコンにすることは法律で禁止されているのだ。

黒猫は不吉の予兆と伝えられる国があるため禁止アイコンと認定されている。

黒猫は髭を揺らしてアルニカと少し距離を縮めてまた座った。

「……………」

「……………」

沈黙。

果てしない沈黙。

アルニカはこの音のない世界に3秒と耐えられなかった。

「……………何か喋んなさいよ」

「んー、じゃあ……………何でこんな所いるの？」

「何そのテキトーな質問。何でって……………」

「名前は？」

「答え聞いてから次の質問しなさいよ！私は散歩に……………」

「ふーん」

「最後まで聞きなさいよ！！」

「長いんだもん」

「長くないわよ!」

黒猫は少し考えて、頭上にある豆電球がピカツと光ったような表情で喋り始めた。

「俺クロ。よろしく」

「今思いついたでしょ?! テキトーに言ったよな? ! てゆうかさっきの質問はもういいわけ?」

黒猫のクロは足で毛繕いして首をかしげた。

「お前の名前は?」

「私は……」

アルニカは少しためらった。

何故なら、自分が“アルニカ”であることがバレてはならないからだ。

これはアルニカの法則であり、約束だ。

しかし、黒猫のクロは自己紹介に戸惑うアルニカを覗き込むように聞いた。

「別に名乗らなくてもいいよ。お前、アルニカだろ?」

アルニカは驚愕した。

バレた。

アルニカの脳内はぐるぐると高速回転した。

頭がぐらぐらし、アルニカは子どもがはっ倒したマネキンのように後ろにまっすぐ倒れた。

さすがに心配したクロは倒れたアルニカの顔に寄った。

「大丈夫か?」

「……駄目だわ、駄目だ……」

そう言った瞬間、空中で爆発音が響いた。

空中で真っ赤な火と煙が巻き起こった。

緊急事態

緊急事態

ファイアウォールにダメージ

ウィルス侵入の恐れあり、直ちに避難

アルニカは素早く起き上がり、大きめの銀の音叉を両手でしっかりと持った。

クロが爆発による煙の粒子を見上げていた。

「ウィルス落ちてくるんじゃない」

「猫は下がってなさい？」

アルニカは立ち上がり、空中に飛び上がろうとした。

「?!」

その時、アルニカの身体は宙に浮いたまま止まり、何故か息ができなくなった。

海で溺れているわけでも無いのにアルニカはその場で呼吸に苦しんだ。

酸素をいっぱい吸っていたわけも無かったため、アルニカの口はすぐに開いて咳き込んだ。

視界が霞んだ。

アルニカが目を瞑った時、その苦しい空間から解放されたように身体が自由になり、勢い良く地上にしりもちをついた。

アルニカは咳き込み、クロが彼女に寄った。

「猫！今のはあんたがやったの?!」

「あれはマズいって!!」

アルニカは煙の粒子が散らばる空中を見た。

その瞬間、爆発のあった方へ強い風が吹いた。

クロが少し浮きそうになったのをアルニカが抱き抱え、音叉を地面に突き刺した。

必死に目を瞑りながらアルニカは細目で爆発した方を見上げた。

視界は薄く、はっきりとは見えなかったが煙はもう消えていて、電

脳の壁にぱっくりとはさみで切り掛けたような切り込みが風を吸い込んでいた。

10時32分。

風が止み、アルニカは目をしっかりと開けた。

「今のは……」

「ちよつと幸せかも」

「はい？……あ……」

アルニカは胸に抱きしめたクロを一瞬で突き離れた。

「何いつまでもくっついてんの……」

「抱っこしてたのお前じゃん」

アルニカは少し頬を赤らめて音叉を構えた。

「この変態が！直ぐ様その首刈つてやる……」

「貧乳のくせに」

「な……」

アルニカは音叉を握りしめた。

クロはケラケラと笑った。

音叉が震え出した。

「貧乳？……ふざけんなよコラ……その発言が自分は変態ですって暴……」

誰か来た……！

……

その校舎を前に、女は立ち尽くした。

藤色の長い髪をなびかせ、牡丹色の着物を胸のすぐ下の長いスカートの帯にいれた特殊な着物を着た女は辺りのファイルに少し触れ、耳に手を当てた。

「こちらウイステリア、柊乃森のファイルに損傷はありません。本

当に爆発なんてあったんでしょっか？」

「通報は何件もあるわ。明日また調査しましょう」

ウイステリアは額に手を当てて疲れたようにため息をついた。

「了解」

ウイステリアの足音が遠退く。

.....

「はあ〜」

正門の柱の陰に身を隠していたアルニカとクロはホッと一息ついた。

「生徒会か、見つかったらオワリだったな」

「あんただけほっぽって生徒会に解剖でもさせればよかった」

「解剖はしないだろ」

アルニカは立ち上がり、スカートを直した。

クロは毛繕いをしてアルニカを見上げた。

「帰るの？」

「ええ、明日の授業に眠気が響くわ。あんたは帰らないの？」

クロは少し沈黙し、

「うん」

「あなたの職業は知らないけど、現実世界に支障の出るほどじゃない
でるのは危ないんじゃないの？」

クロは首をかしげた。

まるでぬいぐるみのように。

アルニカはその仕草に複雑な感情を憶えた。

何故なら、クロは声からして男性であるのが明らかであるにも関わらず、今の仕草にアルニカはぎゅっと抱きしめたくなるような気持ちになってしまったからである。

アルニカが精神的に少し困ったところにクロはさらりと言った。

「きゅつと抱きしめたくなくなっちゃった？」

アルニカは顔を真っ赤にして必死に否定した。
凶星なんだ、と誰でもわかるような表情で。

「そ、そんなわけないじゃない！私帰るから！あんたもさっさと帰んなさいよ！」

アルニカは口を尖らせてクロを背にログアウトした。

アルニカの姿は粒子となって消えた。

クロはその粒子を眺めて呟いた。

「支障……………ねえ」

強風が電脳の雲を吸い込んだにも関わらず月はクロを明るく照らした。

何もなかったかのように、月は群青の夜に頬笑みかけていた。

* * *

翌朝、アルニカこと美咲歩海はベッドから出れずにいた。
目覚まし時計がうるさく鳴り響く。

「眠い……………」

昨夜、ログアウトした後に美咲はあの爆発と黒猫について考えすぎて一、二時間しか睡眠できていないのだった。

テキトーにクロと名乗った不正アイコン。

会った直後に起きた爆発。

全てを吸い込みそうだったあの強風。
ぱっくりと切ったようなあの切れ目。

そしてクロが生徒会と認識した藤色のウイステリアの声。

あの聞き覚えのある声は……………。

でも美咲は爆発に疑問を抱いていた。

「あの爆発音、何か変だった」

その間近で聞いた爆発音による疑問が頭を離れずベッドの上で何十回と寝返りをうった。

結局寝たのは朝日が昇る頃だった。

目覚まし時計を手探りで見つけたし、美咲は勢い良く音速でそれを投げた。

目覚まし時計は壁に勢い良くぶつけられ、ネジや歯車などが飛び出るほどに壊れて地に落ちた。

静かになった202号室、美咲はむくりと起き上がった。

「今何時よ」

.....
美咲は壊れて時を刻まない目覚まし時計に走り寄った。

現在時刻8時25分。

登校本令は8時30分00秒。

.....
美咲は超高速で制服に着替え、昨日用意しておいた準備万端のカバンを持った。

8時27分。

美咲は女子寮を出た。

第一楽章 3：芦屋千代の大作戦（前書き）

今更、紹介。

みさきあるみ
美咲歩海

私立椿乃峰学園女子高等部1年。（長ッ）

学園内能力者ランキングに入ってくるくらいの実績優秀者。（勉強

はちよっ……………ゴフッ！）

通り名としては音姫、喧嘩買いの少女。（マツチ売りの）

扱うのは音波、楽器を奏することも長けている。

つまり、音楽のスペシャリスト（の卵）

歩海という名前に少しコンプレックス。（アルミホイ……………ゴフッ！）

とにかく強気、そして強い？

第一楽章 3：芦屋千代の大作戦

誤認逮捕の夜。

8時42分。

生徒会芦屋千代はベッドに座っていた。

風呂上がりで少し頬を赤くしていた。

隣のベッドで金髪の女子生徒が足の爪を切っていた。

芦屋の言葉で手を止めたところだった。

「あのオルゴールを誤認逮捕？」

女子生徒は最後の小指の爪を切って爪切りを閉まった。

芦屋は何度も首を縦に振った。

「で次に合わせる顔が無いと？」

芦屋は大きくうなずいた。

「なんとかして仲直りできないかと？」

芦屋はまた大きくうなずいた。

女子生徒はため息。

「まず謝ることから始めたら？」

その一言で“お手伝い作戦”が実行された。

しかし、

「全力で拒否します」

強引にも寮まで案内したものの、

「手伝いられない。一人でやる」

と突っぱねられた。

まるでグングニルでも刺さったかのようなショックだった。

「で謝るタイミングを逃してさらに距離が遠退いたと？」

芦屋はまた金髪の女子生徒のルームメイトことクラスメイトの神宮

愛里沙に泣き付いた。

「このままじゃ私前に進めないよお！生徒会初仕事で張り切ったのに誤認逮捕だなんてそのままにしとけないでしょ！？そう思うでし

よ?!」

神宮は苦笑いしながら自分の膝に顔を置く芦屋の頭を軽く叩いた。

「どうせ憧れの一人部屋に感動しすぎてオルゴールを怒らせたんでしょ。で背負い投げでもしたんでしょ」

芦屋はまるで磁石のように自分のベッドに戻った。

図星。

冷や汗だらだらで硬直していた。

「それまずいでしょ。オルゴールの噂知らないの?」

「噂?」

知らないの、と思いつつ神宮は語り始めた。

「中学校でどこからか転校してきて、中でも外でも売られたケンカは全て買い、全戦全勝を誇る鋼鉄の音姫通称“喧嘩買いの少女”!」

「ほお。結局は血の気が多いのね」

神宮は芦屋の両肩をがしつとつかみ、ガタガタと揺らした。

芦屋は首をぐらぐらさせた。

「理解しよ?! 空気読も?!」

神宮が手を止め、二人は向き合った。

「あんたは、全戦全勝という鋼鉄の音姫の汚れなき戦歴に、“一敗”を加えちゃったのよ?」

.....?

「あらま」

「あーっ!! ダメだ! もうダメだ! 一生仲直りできないよ?! 前進できないよ生徒会!!」

ちんぷんかんぷんでぼーっとしている芦屋に神宮は次の作戦を打ち出した。

「よし! 千代! やっぱあんたは遠回しな作戦は無理だと今日証明された! つまり残るは.....」

「残るは.....」

芦屋は緊張して唾を飲み込んだ。

「……ストレートに謝罪しなさい」

「え………」

そんなこんなで朝を迎え、芦屋は初めての登校より増した緊張感で登校していた。

会ったら何て言えば。

またあの全力否定が大きなベルリンの壁を作ってしまったのだろうか。

またケンカ（？）になって背負い投げを……。

芦屋は首を振った。

両手を握りしめてガッツポーズ、大丈夫！

もう背負い投げなんてしない！

勢いで鳩尾狙ったりしないし、謝るだけ。

ごめんなさい、て言ったら今日のミッションは終了、つまり勝ち。

「私なら言えるわ、大丈夫よ芦屋千代！」

と意気込んだはず。

が。

8時31分。

いや、正確には8時30分42秒。

「何で遅刻してんのよ?!」

芦屋は絶望した。

遅刻者の取り締まりで立っていた。

それだけ。

だったのに!

美咲歩海が下駄箱に音速で入ってきた。

謝るにも謝れない、むしろ叱らなければならないこの状況。

美咲は上履きを履いて芦屋の前に立った。

「寝坊」

「反省は?」

「してまーす」

「してないよね」

「してる」

「じゃなんか一言あるでしょ」

美咲はむすつとして頭を（嫌々）下げた。

「ごめんなさい」

「……………」

芦屋は少し複雑な気持ちだった。

謝りたいのは自分なんだという気持ちを必死に押さえた。

何も言えずにいる芦屋に美咲が首をかしげた。

「何かありました？」

「へ？！何も？！何もないわよ！ただ……………」

「ただ？」

芦屋はあわてて話を誤魔化した。

「とにかく授業始まるからクラスに行きなさい！！」

「？……………はい」

美咲は一礼してスキップで芦屋の残る下駄箱を後にした。

美咲の軽快な足音が遠退くと、芦屋はその場に座り込んだ。

前についた両手の片方を拳にして床を軽く叩いた。

「くっ……………またタイミング逃した……………」

「学校だからじゃないかしら？」

！！

椿乃峰生徒会長、花岡紗夜が芦屋を覗き込んでいた。

「会長？！……………どういうことでしょう？」

芦屋は立ち上がった。

花岡はピンと人差し指を立てた。

「お外に誘うのよ。最近美咲さんに謝ろうと頑張ってるみたいだし、今度生徒会の腕章をつけて市街パトロールにでもいってらっしゃい」

芦屋は目をキラキラと輝かせた。

憧れの市街パトロール……………。

芦屋の返事は一つだった。

「はい！ありがとうございます！！」

午後3時42分。

秒単位遅刻した美咲歩海はクラスの女子からお願いを受けていた。

「美咲さん！お願いします！」

「どうしても近寄り難くて……………」

学園祭実行委員の子がちらと見る方向には、教室の隅にいわゆるヤンキーな雰囲気をかもしだす女子生徒が数名。

だらりと乱れたスカートと襟、触ってくださいと言わんばかりのミニスカート（美咲より相当短い）。

その格好にも関わらず足を机にかけたりと、女性としていかがわしい姿だった。

美咲は女子生徒の二人に黒い耳栓を渡して、軽く息をついてその反乱集団に寄っていった。

二人は耳栓を一応つけた。

リーダーと思われる金髪の女子生徒が美咲に気付いた。

「あ？何だよ」

美咲は小さめの声で言った。

「学園祭やる気ないの？」

その質問に集団一同が大笑いした。

「あるわけないじゃん！」

「めんどいし」

金髪は学園祭実行委員に向かって軽く言い放った。

「おいお前ら！従ってほしいからって有名人持ってきたって無駄だぜ？！あたしらには関係ないもん」

「たかが能力成績優秀者に従うとも思ってたの？！バカじゃん！」
そういった瞬間、机がちゃぶ台を返したようにガタンとひっくり返された。

中に入っていた教科書などが床に散らばった。

さすがに全員が立ち上がった。

「何だよ！」

「喧嘩売ってんの？」

「あ？」

金髪が美咲の制服のスカートの結び目をぐつと引つ張った。

「てめえこそ喧嘩売ってんのかコラ!？」

「やっぱ売ってんだ……………」

美咲は軽く大声で言い放った。

「そんなチヨロ甘でワル語ってんじゃねえ！で私を“たかが”だと？ふざけんなよコラ！」

大きな音波が教室内に響き渡った。

窓ガラスがガタガタと鳴り、集団一同が固く耳を塞いで目を瞑った。教室内全員の髪が軽くなびいた。

音波が収まると美咲はじつと金髪を下から上へ睨み付け、また下に視線をそらして自分の席に置いてあるカバンを持った。

金髪が美咲の背に向かって指さした。

「覚えてろ！」

「やだ」

「昭島さんに言い付けるぞ！」

実行委員の二人はゾツとした。

何故なら、この“昭島”という名は椿乃峰全体に広がる不良の名だからである。

彼女に歯向かった者はタダでは帰ってこれない、とも言われている。しかし、

「言えば？」

美咲はちらと金髪を睨んだ。

金髪が少しビビった。

「自分が弱いつて証明してんだよな？」

実行委員が美咲をなだめようと寄ってきた。

「美咲さんまずいよ」

「昭島先輩って」

「“たかが”不良でしょ？こいつらがそいつにたすき渡すならそいつの喧嘩買ってやる」

美咲は桜色のメモにボールペンで書いて二人に見せた。

「大丈夫だから気にしないで。一週間後には片付くから」

美咲はメモをしまつて教室を後にした。

学校から出て、正門の前で大きいため息をついた。

灰色がかつた大きな雲が学校を襲うようにゆっくり動いていた。

「雨が……」

そしてぱらぱらと小粒の雨が降ってきた。

美咲はカバンの中を覗き、折り畳み傘がないのを確認し、同時に覚悟した。

「濡れて帰る」

「そうでもないわよ」

美咲の頭上に茜色の和柄傘がかぶさった。

傘の柄は藤の花と川を模していて、雨に映える傘であった。

美咲の隣には芦屋千代が傘の柄を持って立っていた。

「お茶でもどう？」

「今日気分悪いので遠慮します」

美咲はため息、芦屋の作戦はまた失敗に終わろうとしていた。

しかし芦屋は絶対にあきらめるわけにはいかなかった。

やっと叱らなくていい場面に出会えたというのに、これを逃したらまたズルズル引きずってしまう！

芦屋がそう考えていると、

「先輩」

芦屋はぎよつとした。

それは雨音にかき消されそうな小声だった。

芦屋はその声を僅かに聞き取った。

「あの、聞きたいことがあつ……………」

「ごめんなさい！」

美咲の頭上にあつた傘が一瞬で地に叩きつけられた。バシヤツという音が雨音に重なつた。

芦屋は両手を膝について頭を下げた。

しまつた、と我に帰つたがもう遅かつた。

二人は全身びしょ濡れになつた。

美咲は一体何故謝られたのかが理解できなかつた。

芦屋はあわてて頭を上げた。

傘は二人の間に逆さまに放つてあつた。

傘の意味がまるでなかつた。

雨はさつきより強くなつていた。

「あ、えと……………実は……………」

「傘」

「え？」

美咲は茜色の傘の柄を拾い、芦屋を傘下に入れた。

美咲もその中に素早く入つた。

「私、私服パジャマしかないから貸して」

芦屋はぽかんと口を開け、ひそかに思つた。

この子のクローゼットはどれだけすかすかなんだろうか。

私服がパジャマしかないということは、それと制服とワイシャツ何

枚かしかないということになるのだ。

はつきり言つて、お粗末である。

芦屋は傘の柄を持って美咲と寮に向かつて歩き始めた。

「前回お部屋招待されたし、今度は招待してあげる！」

「勝手に入つただけだろうが」

美咲の迷惑そうな小声を芦屋は聞き逃さなかつた。

「何？」

「……………何でもない」

芦屋は心の奥底で緊張しながら歩いた。

傘に当たる絶えることない雨音、二人の呼吸、足音、全てがこだま

していた。
ぽっぽっ、ぽっぽっ、春の桜も濡れ化粧。

第一楽章 4：謎の爆発（前書き）

アルニカ

美咲歩海が使う電腦世界専用アイコン。

楽器はツールとして扱い、曲は主にログインする時に使ったオルゴールなど。

もとは自分のものではなく、誰かから譲り受けたい。

由来（？）

アルニカは少しマイナーなハーブの一種。

化粧品関係で時より出てきたりする。

黄色い花を咲かせ、日本ではウサギギクと呼ばれる。

花言葉は「愛嬌」

第一章 4：謎の爆発

春だというのに、今日は雨によりとても寒かった。

午後4時17分。

びしょ濡れになった美咲と芦屋は女子寮の青の棟305にいた。ルームメイトの神宮が美咲の突然の来室に目を輝かせていた。

「いらっしやい！びしょ濡れじゃない、何か着替えなきゃ！」
大きな窓から雨模様の空が見える。

青のじゅうたんに白い壁、クローゼットにドレッサー、色とベッドが二つということ以外は美咲の部屋と何ら変わりはない。

ただ、ベッドが一つ入るだけでこんなに広さが違うのか、と美咲は実感した。

芦屋は白いバスタオルを用意した。

神宮がクローゼットの中まで入って服を探している。

「美咲さん、風呂で体あつためてらっしやい」

美咲は白いバスタオルを受け取り、小さめの声で質問した。

「先輩は？」

「いや、普通お客さん先でしょ。さつさと入ってらっしやい」

美咲は少しためらいを交えながらこくりとうなづいた。

「お借りします」

美咲のバスルームへ歩く背を見送った芦屋に神宮が何やら服を二枚もって寄ってきた。

「どっち着せようかなあ」

芦屋はちらと二枚の服を見てぎょっとした。

「何だそれ?!」

神宮が持ってきた服はとても美咲には着せられないものだった。

右手には黒に赤いリボン、黒のフリルのついた全体的にブラックなメイド服（チョーカーには鎖つき）。

左手には白にピンクの縁取り、胸のあたりにリボンのついた超ミニ

スカート（しかもこれまたフリル）。

芦屋は両方とも美咲が着る姿を想像するのが恐ろしかったため、腰に両手を当てて言い切った。

「却下！！」

「え、マジで？じゃあ……………着物とか？」

「シャワー浴びた後そんなもん着る奴どこにいるの！！」

それ以前にそんな服をどこから持ち出したかもわからない芦屋はため息をついて自分のクローゼットをガラリと開けた。

「これでしょ」

一枚の服を手に深くうなづいた。

*

*

バスルーム。

美咲歩海は絶望の窮地に立たされていた。

青と白のタイルできらびやかなバスルームでシャワーを浴びているが、美咲にとっては大問題が発生していた。

美咲がアルニカになる時、髪は下ろして結んでいた部分だけ少し長めに垂れる。

つまり、

「このまま出たらアルニカだよね……………」

まずいよ！

まずいって！

しかし、濡れた髪をまた結んでいたらおかしいだろうし、疑われてしまう。

シャワーを止め、白いバスタオルを胸の少し上で巻いた。

太ももが半分くらい隠れるくらいの長さで、美咲は巻きおわるとドキドキしながらドアノブに手をかけた。

このドアの向こうは更衣室、その向こうが生徒会プラス一般人に正体を知られてしまう運命の部屋。

更衣室でどうにかしてこのアルニカヘアをどうにかしなくてはならない。

そう思いながらドアを開けた。すると、

「美咲さん！服はこれ着てね！」

笑顔満開の芦屋千代が桃色のワンピースを両手で広げて見せびらかすように、そこにいた。

美咲は硬直するしかなかった。

まだアルニカヘアなのに……見られてしまった。

ワンピースは二部の半袖で、胸のあたりに紐リボンがつき、膝上3センチくらいのミニスカートだった。

しかし美咲にそんなことを気にする余裕はなかった。

芦屋が美咲のアルニカヘアを見つめたのがわかってさらに緊張感が高まった。

呼吸がこれほど難しいものとは思わなかった。

あのクロとかいう謎い有人アイコンの謎い能力とはまた違う呼吸と緊張感だった。

芦屋は黙っている。

美咲の緊張感は一層に高まり、頂点に達した。

「…な、何でしょう」

すると芦屋はにつこりしてすぐ下にあるプラスチックの籠に入ったびしょ濡れの制服とワンピースを交換した。

「これ干しとくから、今日はそれ着てなさいね！反応見ようと思ったのにまさかノーリアクションだなんて、まだまだ甘いわね」

芦屋はくるりと美咲に背を向けて、更衣室から出ていった。

美咲はその場に立ち尽くした。

ばれなかったのか？

まさか、濡れていたからわからなかったのか？

まだ緊張感は止まらなかった。

一応バスルームから更衣室に一步、二歩と足を踏み入れてバスルームのドアを閉めた。

深く、大きなため息。

少しホツとして先ほど置いていったワンピースを広げた。

硬直した。

上から金ダライが落ちてきて、いい音で頭に叩きつけられたような感覚だった。

4時36分。

仕方なく美咲歩海はピンクのワンピースを着て更衣室を出た。

芦屋と神宮がその姿に目を輝かせたのが美咲にはよくわかった。

胸のあたりにリボンがあり、スカートの両端は少し紐で絞めていてくしゃつとしている。

美咲は軽く顔を赤らめていた。

「ほら、似合うって言ったじゃん」

「めっちゃかわいい！美咲さん、それあげる」

「私だよ！」

芦屋は神宮の頭をはたき、背伸びした。

「美咲さんは私のベッドに座ってなよ。風呂入ってくるから」

そう言いながら芦屋は更衣室の扉を閉めた。

わりとすぐにシャワーの音がした。

美咲は叩かれた頭を撫でる神宮の前、芦屋のベッドに座った。

メモに書いて見せた。

「大丈夫ですか？」

神宮はそれを見ると、歯を見せて笑った。

「大丈夫！もう中学から一緒じゃ慣れるって」

「そんなに一緒なんですか？」

「まあね。あと小声なら喋れるんだよね？喋ってよ」

美咲はメモを閉じ、ベッドの上に置いた。

「では小声で」

「よしよし！ちーは多分風呂浸かるからそれまでお話しよ？」

美咲は微笑んでうなづいた。

ちーとはおそらく芦屋のことだ、と予想した。

「で、ちーが君に喧嘩売ったんだって？」

「二度」

美咲は眉をつりあげて睨むような顔で答えた。

「まあ、ちーはどこまでもまっすぐだから喧嘩売ってるように見えただのかもね」

美咲は首を傾げた。

いつもはセーラー服で見る無愛想な美咲も、少し可愛らしく見えた。

「背負い投げはまっすぐな行動なんですか？」

「そりゃちよつとやりすぎだけどね」

神宮はあぐらをかいて笑った。

「でも君もちよつとちーに興味わいてきたでしょ？どうして音波の振動が効かずに背負い投げされた、とかね」

美咲はズバリと当てられ冷や汗を垂らした。

確かにそうである。

あの部屋で美咲は音叉で部屋中を響かせ、手首にさえ触れられなかったはずだった。

何故なら、音波の振動で傷を負わせられるからである。

しかし芦屋千代はそれを平気で触り、背負い投げまでした。

美咲の中ではあり得なかった。

音波振動を無視できるような能力を芦屋はもっているのだろうか、と考えたりしたがそんなわけもなかった。

何故なら、そんな能力を持っているなら美咲の能力値測定で懸命に耳を塞がなくても良いはずだからである。

この矛盾が不思議でならなかった。

「ちーはそんな能力なんて無いよ？」

「?！」

「さてこれはどーゆーことでしょう」

神宮が足をばたつかせてまた笑いだした。

まるで馬鹿にされているようだった。

しかし美咲はあまり動くのをやめた。

何故なら、アルニカヘアーがばれてしまうからである。

「じゃあ何で……？」

神宮がふと視線を上に向けた。

美咲が上を向くと風呂上がりでバスローブ姿の芦屋が立っていた。

ドアの開く音さえ聞こえなかった。

気付いたらそこにいました、のようなシチュエーション。

まだ少し湿った紫色の髪を一まとめに結び上げてあった。

芦屋はにっこりと（どこか黒い）笑顔で二人に告げた。

「私の能力は“根性”よ」

「ははは……」

芦屋は美咲の隣に座り、手足を組んだ。

バスローブから見えるすらりとして少し濡れた足が女の色気を代弁していた。

「で？どんな話をしたのかしら？」

神宮は両手を前に突き出し、芦屋の言葉の攻撃をガードするようにひらひらさせた。

美咲はもう苦笑いで黙っているしかなかった。

「いや、これは美咲さんとちーを仲良くしてみようかな計画で……

……

「そんな話してないじゃない」

「でも誤解を解くあたりから始めようかな、なんて思うじゃない？」

「何の誤解よ。あんたのただの無駄話になってるだけじゃない！」

「先輩」

美咲の小さな声に芦屋だけ気付いた。

神宮はまだわけの分からない言い訳を繰り返している。

美咲は芦屋の目をじっと見た。

「単刀直入ですけど、最近よくある爆発ってやっぱり事件ですかね」

神宮はさすがに聞こえたのか、美咲に笑顔で返答。

芦屋は神宮の首をつかむ手をどけた。

「あ、今ちーが調べてるやつじゃん」

「でも部外者には教えられないわ」

「昨日爆発見ました」

芦屋は少し沈黙し、ベッドに座りなおした。

美咲の隣で話しはじめた。

最初の事件は先週。

『コンピューター世界の通報で『空が割れて何もかも吸い込まれた』と男性が動揺しながら言ってきた。』

嘘だと思っただけ現場に向かうと、そこにはあつたはずの建物や通報してくれた人までいなかった。

目撃者も遠目ではおらず、みんな口を揃えたように言う。

『空に何もかも吸い込まれていた』

建物も人も、ファイルデータさえなくなる。

それが今週にかけて四件……昨日ので五件起きている。

現場も特に共通点はなく、全てがなくなってしまふのが唯一の共通点だった。

しかし昨日の現場では何一つ吸い込まれてはいなかった。

まだ原因は不明。

全てを無差別に跡形なく吸い込むコンピューター世界の空にできた穴。

私たちは極秘ながらもこの事件をこう呼んでいる。

「時空領域事件、と」

芦屋はもう生徒会芦屋千代の顔だった。

美咲は少し昨日の現象を理解できた。

「ブラックホール……………でもあれ…」

その瞬間だった。

外で大きな爆発音がした。

三人とも窓に釘づけになった。

外は雨が降り続くそのままの街並みだった。

芦屋はノートパソコンを開いた。

美咲と神宮も画面を覗くと、そこには花柳全体の電脳世界のマップが表示されていた。

その中で一点、赤く点滅していた。

「公園だわ！私行つて来る！」

そういつて芦屋は更衣室に駆け込み、わずか五秒でジーンズとTシャツ姿に着替えてきた。

颯爽と部屋を出ていった芦屋に神宮が手を振った。

美咲もこうしてはいられなかった。

「先輩、私は念のため部屋に戻ります」

すると案外簡単に、

「そっか、じゃまた来なよ？」

「はい、お世話になりました」

美咲はお辞儀をして305号室を出た。

扉を閉めた瞬間、美咲は音叉を手に震わせた。

鞆から群青のオルゴールを取り出した。

「導いて、アルニカ」

美咲はオルゴールに吸い込まれ、その瞬間、電脳世界に咲いた。

第二章 1：公園（前書き）

あしやちよ
芦屋千代

椿乃峰学園女子高等部二年。

花柳をネット犯罪から守る先頭とも言われる生徒会に憧れて目指したところ、見事受かる。

少し大人びた雰囲気、何事も真っ直ぐ。

柔道や合気道、剣道まで嗜む。（すごいでしょ）

彼女曰く「能力“根性”については不明。」

第二楽章 1：公園

午後5時07分。

美咲歩海ことアルニカは、青い電腦世界を音速で駆け抜けていた。公園と思われる所の上空にはブラックホールと思われる亀裂が走っていた。

公園が見えた時、アルニカは絶句した。

「何これ……………」

前回とは全く比べものにならないくらいの風が公園のありとあらゆるものを吸い込んでいた。

遊具にしがみつくと子ども们的アイコンも遊具ごと吸い込まれた。どうにかしなければ。

アルニカは大きな音叉を構え、まだ吸い込まれていない子ども達のところへ走った。

「アルニカ!!」

アルニカはその声に足を止めた。

咄嗟に振り向くとそこには藤色のウイステリアが立っていた。

夜に見るより今のほうが色鮮やかできれいだった。

「あなたは下がってなさい! 部外者でしょう?!」

確かに部外者だった。

アルニカは生徒会でも電腦警察でもない。

電腦世界を駆け巡る謎の少女アイコンだった。

しかしアルニカはそんなことで足を止めてはいられなかった。

「だったらつつ立つてないで子どもを救けるよ。あんた私に文句たれにきたの?」

アルニカは子ども達の所へ走りだした。

震わせた音叉が音速をさらに加速させた。

アルニカは音叉を地面に突き刺し、子ども達二人を庇うように片手いっぱい抱き締めた。

ブラックホールの勢いは止まらず、音叉が地面から抜けてしまっても時間の問題だった。

アルニカは咄嗟に戸惑うウイステリアに向かって叫んだ。

「救急システム呼んで！」

ウイステリアはハツとした。

アルニカの目にはこの二人を無事に公園から帰す自信が見えていた。ウイステリアは頷いて公園を離れた。

ウイステリアが見えなくなったところでアルニカは子ども達を見下ろした。

手の震えがすぐに感じ取れた。

「もうちょい我慢しな。絶対あん中には入らないから」

「うん……」

子ども達はアルニカの服にしがみついた。

アルニカは音叉に力を込めた。

「今日は群青だったから“ノクターン”だね」

すると音叉から“ノクターン”を奏でるオルゴールの音色が聞こえてきた。

子ども達の震えが少しづつ消えていく。

ブラックホールが吸い込む風の音がこんなにもうるさいというのに、オルゴールの音色は風に乗って公園中に響いた。

少し鳴らしていると、何故かブラックホールの穴がふさがっていき、風が止んだ。

音色とともに音叉も止まり、アルニカは二人の子どもを立たせて服を払ってやった。

「ありがとうアルニカ！」

「ここで待ってれば生徒会が来てくれるから、いい子で待ってなさいね？」

「はい！」

アルニカは音叉を消し、髪と首のリボンを整え、子ども達に手を振って颯爽と走り去った。

生徒会がくる前に帰らないと捕まってしまっからだ。

素早く女子寮202号室に戻り、アルニカは美咲歩海に戻った。さすがに疲れたのか、美咲はさっさとベッドに入った。

午後5時24分。

美咲は芦屋にもらった（？）ピンクのワンピースのまま就寝。

*

*

午後5時28分。

ウイステリアは驚きながらも後悔していた。

公園はすっからかんだが、救急システムが到着した時アルニカが抱えていた二人の子どもが時空領域に飲まれていなかったのだ。

アルニカは二人を救い、もうそこにはいなかったのだ。

あの時ブラックホールを前に立ち向かったアルニカに対し、立ちすくんだ自分が許せなかったのだ。

「アルニカ……」

まっさらな公園に立ち尽くすウイステリアは地面に転がるオルゴールを見つけた。

群青に金の装飾、透明な宝石が表面に輝く小さな小箱のオルゴールだった。

ウイステリアはオルゴールを拾い上げ、子ども達に聞いた。

「落とし物かな？」

すると二人とも首を振った。

「違うよ、アルニカが鳴らしてくれたんだ」

「すぐくきれいで風も怖くなかったよ！」

ウイステリアはありがとう、と微笑みオルゴールを鳴らしてみた。心を落ち着かせる小さくも美しい音色が響きはじめた。

一応音楽の授業でクラシックも鑑賞する彼女は曲目がたまたまわか

った。

「ノクターン第一番、変ホ短調、シヨパンの曲ね」

「お姉ちゃん詳しいー！」

ウイステリアはにっこり笑ってみせた。

その日、時空領域による被害者は五名、うち行方不明者は三名だった。

*

*

夜10時01分。

美咲はうつすらと目を開けた。

真っ暗な部屋で、唯一窓から注す月の光が美咲を照らしていた。

手を軽く当ててあくびをし、ソファから立ち退いた。

「さて、行きますか」

あの公園へ。

と心の中で言葉を浮かべながら桜色のオルゴールに手を伸ばした。

美咲の発する音波が部屋中を駆け回った。

オルゴールは美咲を吸い込み、部屋はまた静かな、ただ誰もいない空間になった。

その瞬間、美咲は群青の夜を駆けた。

“アルニカ”として。

公園はすぐ近くにあり、アルニカの音速なら5秒とかならなかつた。公園に着地すると“KEEP OUT”と書かれた電子テープが侵入者の行く手を阻むように入り口に張られていた。

「んー、人が入れる隙間は無いわね」

確かに電子テープは、一定間隔で縦に並ぶように隙間などほとんどなくただ現場を守っている。

向こう側の公園サイトには何かヒントがあるかもしれないのに。

「俺が開けてきてやるうか？」

アルニカは声のするほうを見下ろした。

真っ黒に金色の瞳の猫がアルニカの足下にちょこんと座っていた。

「あ、猫！」

「ただの猫じゃないんだからクロちゃんって呼ぼうよ」

アルニカは思わず黒猫の隣にあつた自分の足を退けた。

「こんなところで何してんの！」

「いや、事件あつただろ？来ると思って。で、開けてほしい？」

「……………」

アルニカが入れずに立ち往生していたのを影から見ていたのか、クロはさりと大問題の突破口を言つてのけた。

アルニカは少し迷いながらも、クロに公園の中に入ってきてもらうことにした。

「じゃあ……………開けてきてちょうだい」

「最初から素直に“開けてきてください”って頼めばいいのに」

「さつさと行け猫が！！」

アルニカが癩癩を起こすのと対称的にクロは軽やかに電子テープの方へ向かった。

人では確実に入れないその隙間を、クロはしなやかで華奢な体ですんなりと公園サイトに侵入した。

電子テープの裏側には解除するスイッチがついていた。

クロは自分の手足が届く程度のテープを解除した。

侵入不可だつ入り口も、屈めば入れる隙間はできた。

アルニカは電子テープに触れないように公園サイトに侵入した。

中は昼と同じようにまっさらな公園だった。

ただ遊具が無いだけでこんなにも更地に見えるのか、と思いつつ、アルニカは少しでも手がかりになるものを探した。

「お前今日ガキ救けたらしいじゃん、忙しいね。で何か情報は入ったの？」

「何でそんな事聞くの？」

気になるから、と普通の返答をされたアルニカはため息をついて“生徒会から聞いた”という事実をふせて簡単に時空領域について説明した。

「何のためかは知らないけどブラックホールは何でも吸い込む。吸い込まれたものの行方はわからない。止める方法もまだわからないわ」

クロは目を点にして静止していた。

「ふーん」

「それだけ?!」

「いや、別に」

アルニカは素っ気ない態度に「話すんじゃないかなかった」と後悔しながら一つだけ残されたファイルに目を向けた。

生徒会が捜査したにも関わらず時空領域に吸い込まれなかったファイルを持ち帰り忘れるわけがない。

ではあのファイルは……………

「あれは……………」

「…多分先客がいたんだな」

アルニカとクロは顔を見合せ、ファイルに駆け寄った。

もしかしたらこのファイルはその先客の忘れ物かもしれない!

もしそれが、

「犯人だったら」

「残念なことに早く解決するな」

アルニカはクロの狭い額を叩いた。

クロは額を前足（人間では手）で撫でる。

「早く解決した方が良くに決まってるでしょ」

「アルニカの活躍増えるよ」

「増えてどーすんの!!!」

全く、と吐き捨ててアルニカは緑色に光るファイルに手を触れた。

ファイルにはあらゆる新聞社の電子新聞の切り抜きが沢山入っていた。

どれもまだ“空に現れた謎の亀裂”など、“時空領域”とは書かれていない。

生徒会も電脳警察も確証がない限り伏せざるをえないのだろう。

「吸い込まれたものとかつてどこ行っちゃうんだろいな」

「知らないわよ。入ればわかるわよ？」

「やだよ、吸われそうだったらまたぎゅってして守ってくれば…

……ぎゃあ!!」

アルニカは記事を読みながらクロを片足で踏んだ。

「あらごめんなさい、小さすぎて見えなかったわ」

「見てもいないじゃん!」

その間にアルニカは記事をすべて読みおわり（途中で飽き）、ファイルを自分のポケットに入れた。

「それ以外は何も無さそうね」

「まあ、お前とガキ以外は全部なくなっただけだからな」

アルニカは返答しなかった。

時空領域の亀裂があった群青の空を無言で眺めていた。

クロがアルニカの足下で一鳴き、アルニカを見上げた。

「悩み事？」

「音が少し違ったの」

「音？」

アルニカはあくびをし、話はまた今度ね、と公園を出た。

クロはアルニカが出た後“KEEP OUT”の電子テープを張り直してから外へ出た。

第二楽章 2：寮長襲来？（前書き）

クロ

今のところほぼ全てにおいて謎い黒猫の不正アイコン。

アルニカの行動を大変面白がっている。（だって面白いんだもん）
少し自信過剰（悪かったな）少しスケベな所も。（それ言っちゃ俺の好感度……ウオウツ！！）

ただし、頭は良いようだ。（良いの！何疎の取り柄これだけです、的な）

はい、この通り自信過剰、自画自賛もいいとこだ、という感じのクロちゃんです。

第二楽章 2：寮長襲来？

午前4時29分。

芦屋千代はうつすらと目を開けた。

女子寮青の棟305、まだ隣でルームメイトがいびきをかいて眠っている。

外は日がもう少しで昇る茜色に染まっていた。

「……そろそろ帰ってくるかも……」

寝起きであるせいか、芦屋はゆっくりと制服に着替えた。

最後にスカートのベルトに金色に輝く生徒会エンブレムを引っ掛けた。

こうして生徒会芦屋千代の朝は始まる。

*

*

午前7時ジャスト。

灰色のショートカットの人間が女子寮の前に仁王立ちした。

革靴によって踏まれた緑の芝生と桜の花びらを見下ろす。

拳を握りしめる。

そこへ、今日は遅刻しまいと寮から駆け出す美咲歩海。

見たことのない不思議な人を前に、人は一瞬だけ止まってしまってものである。

例えば街中できらびやかな着物を着た人とすれ違ったら、少しその人の姿を目で追ってしまったりする。

心のどこかでひっかかって少し思考がその人に集中してしまう。

美咲の場合、一瞬足を止めてしまった。

灰色のショートカット、古びたジージャン、ダメージジーンズ、翠

の瞳。

日本にこんな人がいていいのか、と見惚れるような感覚が美咲の脳内をよぎった。

しかし、

「……………お前か」

「へ？」

灰色ショートカットはぶちギレていた。

眉間にしわを寄せて手に持っていた旅行に使いそうな黒いカバンを両手で振り上げた。

「オレの庭を踏んだのはテメエかアアツ!!!」

カバンは振り下ろされた。

美咲歩海、遅刻、そして間もなく意識昇天。

*

*

午前8時29分。

美咲のクラスで一人の女生徒は椅子の上げられた美咲の机をぼーっと見つめていた。

浜風莉子。

その机に向かつて癪癪を起こす女生徒、芦屋千代を見た。

「この子実は…いえ、本当に問題児なのね!」

大急ぎで教室を出ていく芦屋には浜風の声など聞こえなかった。

それを最後に美咲の机は本日誰も触れることはなかった。

芦屋も生徒会長花岡に止められ、授業を平和に受けた。

*

*

午前9時何分か。

美咲は目を覚ました。

天井は茶色、辺りを見回すと寮の一室によく似ていた。

しかし青くも赤くもなかったため、美咲は寮だとは思わず飛び起きた。

殴られた部分がズキズキしたのを咄嗟に片手で押さえる。

包帯が巻いてあった。

「2時間21分」

その声に美咲はあわててベッドから降り立ち、壁に背を張りつけた。美咲が寝ていたベッドの近くのソファで灰色シヨートカットが腕時計を見ながら言った。

目の前のテーブルには湯飲みが2つ置かれていた。

灰色は向かいのソファに「どうぞ」のジェスチャーをした。

「欠席の連絡はしておいた。強く殴って悪かったな」

本当だよ、と思いつつ美咲は恐る恐る向かいのソファに座った。

メモ帳を取り出そうとしたがやめた。

灰色シヨートカットのまじまじと見る視線が即座にわかったからだ。

「お前誰よ」

「おお、言い忘れたな。オレは篠原ことは、長旅でよくいないがよろしくな」

美咲は目を点にした。

思い出した。

あの広場の芝生がどうので……

そういえば……

「庭を踏んだのはテメエかアアツ!!」

なんて言われて……

あ。

「お前が踏んだかもわからないのに疑ってすまなかったな」
篠原が笑顔で笑い話のように謝罪を流す。

しかし美咲は少し焦っていた。

(踏んだの私じゃん!!)

しかし今真実を言えば、きっと篠原は……

鬼と化すだろう。

美咲は引きつる苦笑顔で返答した。

「いえ、大事にしてるんですね？あの庭」

よし、理解力のある生徒だ、と感心する篠原に美咲はホッと胸を撫で下ろした。

「銀河が滅びても守らねばならない大事な庭だからな」

銀河きえたら庭も何も無いじゃん、と涙ながらの心の声。

「ところで……」

篠原が切り出した。

「この花柳の最近のことを話してくれないか？長く旅をしてたからわからなくてな」

「最近というと……」

美咲はちょうど今調べている時空領域事件について簡単に説明を試してみた。

もしかしたら何か良い情報が聞けるかもしれない。すると、

「ブラックホールか……そうか、オレの胃袋はやはりブラックホールなのか……」

「……」

駄目だ、この人。

美咲は情報入手を完全にあきらめた。

「そういえばお前の名前を聞いてなかったな、美咲君？」

「知ってんじゃない！」

そんな事に構わず篠原は茶をすすする。

「無視か!!」

「で名前は？」

美咲は軽く息をついて自己紹介をした。

「美咲歩海、椿乃峰学園高一。能力は特に音波です、以上」
美咲自身では簡単すぎて「それだけ?!」など言われると思っていた。

しかし、

「音波かぁー、じゃあ歌うまいのか?」

「それだけ?!」

思わず美咲はテーブルを叩いて立ち上がった。

その後すぐに何故かはわからないがしまった、と思った。

篠原が啞然して美咲を見つめていた。

「あ、いや……」

「他にも何か紹介したかったのか?」

「違う!」

篠原は頬を軽くふくらませて腕を組んだ。

その一秒後、何かを思い出したように、

「そっぴやアルニカはまだ正義のヒロインか?!」

「へ?」

篠原はその時だけ目を輝かせていた。

美咲は感付いた。

そして返した。

「ええ、まだ世間を騒がせる正義のヒロインです」

すると、勢い良く茶色の扉が開けられた。

芦屋千代が息切れしながらそこにいた。

「寮長!!むやみに生徒を誘拐しないでください!」

「おー、すまんすまん!久しぶりだな、芦屋」

美咲は目を丸くした。

寮長?

「寮長!!!?」

芦屋はちんぷんかんぷんにこんがらがっている美咲に説明してくれ
た。

「美咲さん、この方は花柳女子寮の寮長、篠原ことはさんよ」

あ、だから庭なんて作れるわけだ。

そう絶句する美咲の腕を芦屋がつかんだ。

「さて、行くわよ」

「どこへ」

芦屋は雲一つない空を映す窓を指差した。

「今日は快晴！パトロールに行くのよ！あなたも一緒に来てちょうだい！」

「あ、もしかして謝罪の………」

「うるさい！」

そして美咲は、篠原の軽い“いつてらっしやい”に見送られ、芦屋とともにパトロールにでた。

*

*

10時02分。

明るい陽射しのもと、美咲と芦屋は最大の大通り“桜通り”から松広場に出ていた。

芦屋は左腕に黒に銀の刺しゅうつきの腕章をつけて誇らしげに手を組んだ。

「今日は記念すべき初市街パトロールデビューよ！」

「一人でやれよ」

美咲は隣でぼそり。

「何？」

芦屋の地獄耳発動。

「何も？」

完全に逃げる。

しかしここまで出てきてしまっただけでは美咲も帰れなかった。松広場には彫刻を中心に置いた大きな噴水がある。

その端に座って話す人が多いためここはいつも人でいっぱいだった。一般居住区との境目でもある門とも近いため、初めて花柳に来た人はまずこの豪華な広場を見る始まりの場所でもある。

今日は特別時間で授業が早く終わった生徒らも座っており、いつもの午前の広場よりは騒がしくなっていた。

「さて、ここを見回ったら次は葵通りに……」

芦屋は美咲がメモをこちらに見せているのに気が付いた。

「何かおごつて」

「は？」

お腹が減ったのか、疲れたのか、美咲はコンビニを指差している。

「朝ごはん食べたんじゃないの？」

「篠原つて奴のせいで朝飯スルーで気絶した」

朝食は寮の食堂で済ませてから学校へ向かう。

美咲は寮の外で気絶した。

「結局あなたが悪いじゃない」

「……………いや？」

美咲は首をひねって完全否定した。

財布は？と聞くと美咲は白ウサギのがま口財布を逆さまに振った。すっからかんだった。

こんな高校生がいるのか、と芦屋はため息。

「……………わかった！ただし105円よ？それ以上はナシよ?!」

「わーい」

美咲の棒読み発動。

「もうちよつと喜びなさいよ!!」

そう言いつつも二人は近くのコンビニへと足を運んだ。

美咲は一直線にホットスナックのショーケースの前に仁王立ちした。そしてシヨツクな表情をした。

欲しいものがなかったのだろうか。

するとすぐさまメモに何か書き始め、レジの店員に見せた。

芦屋はメモを覗いた。

「唐揚げ棒ください」

店員は少し戸惑いながらも少々お待ちください、と唐揚げ棒を揚げ始めた。

4分ほど待つらしく、二人は店内でおしゃべりを始めた。
雑誌コーナーにて。

「あ、新しいふろく！このポーチかわいい！」

芦屋はちょうど高校生が読みそうな雑誌を手に嬉しそうにいった。
しかし、

「わあ、最新号だ」

芦屋は美咲をちらと見て石化した。

美咲が手に持っていたのは小学生がお小遣いをためて買うような女の子雑誌だった。

新学期ということでもふろくも電動消しゴムとスペシャル(?)だった。

「美咲さ……」

「?!……あ、いや、これは別に……欲しいわけじゃなくて、その……」

そうごまかしていると、外で大きく、何かが破壊される音がした。
そして悲鳴。

芦屋と美咲は急いでコンビニを出た。

そこには噴水の上に来れるはずのない大破した軽自動車に乗っかって
いた。

まるで空から落ちてきたかのように。

第二楽章 3：吹き飛ばしの法則（前書き）

篠原ことは

椿乃峰学園寮の管理人で、なぜか入口の広場を私物化して庭をつくっている。

宇宙がなくなっても守るらしい。

あまり知られていないようだが、能力は時間旅行。

年月日と場所、全てを明確に言うことでその位置に移動できるという能力である。

毎日歴史を歩くも、何かに巻き込まれてしばらく戻れないことも。

（本当に。この前だってルソーが…）

アルニカの活躍を見るのが好きなようだ。（だってカッコいいじゃん）

というわけで、何より庭が大事な篠原さんでした。

第二楽章 3：吹き飛ばしの法則

野次馬という人混みをかきわけ、美咲と芦屋は噴水の上に乗った軽自動車の惨劇を目にした。

午前10時11分。

軽自動車は屋根もへこみ、タイヤもパンクして正常に稼働できる状態ではなかった。

芦屋はすぐさま仕事を始めた。

「皆さん離れてください！生徒会です！」

その一文で野次馬はざわつきながらも水溜まりに落ちた水滴が作り出す轍のように噴水から退いた。

芦屋はすぐに学校へ連絡し、噴水に近寄った。

美咲は何故かわからなかったが視線を感じて人混みに振り返った。一瞬だった。

ちょうど影になる細い路地から、誰かがこの惨劇を笑っていた。

美咲は影の路地へ走った。

芦屋が呼び止めるのも聞かず、美咲は路地へ入っていった。

* * *

10時15分。

美咲は音速で太陽を遮る影の路地をひたすらに走っていた。

「どこにいんだよ、さっさと出てこい！！」

美咲の怒鳴り声はその路地にこだまして、周りの建物さえ振動したかに思えた。

そんな音波に耐えられるわけもなく、そいつは叫び声を上げた。

美咲はすぐに声のする方へ走った。

そして見た。

「……………」

ごく普通の男子生徒がそこに座っていた。ただ、拳動不審で何かしら病んでいそうな容姿で、目が血走っていた。

「……………何の用だ……………」

少し恐怖を感じながらも美咲は一步づつ近づいた。

「あの車はお前の仕業か？」

その間に、男子生徒は不気味に引き笑いした。

少し長めの髪の間隙から、血走った目がぎらりと光った。

「俺の能力は……………吹き飛ばすこと……………」

「?!」

その瞬間、男子生徒の少し後ろに取り付けてあった消火器が美咲に向かつてまっすぐに飛んできた。

避ける間もなく美咲の目の前に来たため、腕で顔を庇うように消火器を受けとめた。

「ひゃハハハ！血がでたぞ！血だ！」

美咲は舌打ちをして、男子生徒を睨み付けた。

セーラー服の清潔な白い袖が血で染まる。

男子生徒がゆらりと立ち上がり、両手を前に出した。

「ひゃハハハ！！」

他の建物にもたくさん消火器やゴミ箱などがある。

あらゆるものが放られるように美咲に向けて飛んできた。

「……………避ける！」

美咲が飛んでくるポリバケツを避けようと足を横に跳ねるように蹴りあげた。

しかし、跳んだ瞬間もう目の前にあるポリバケツの前に跳ね返された。

美咲はポリバケツを頬にまともに受けた。

何が起こったのかわからなかった。

男子生徒がまた引き笑いした。

「そう！俺は人だつて吹き飛ばせる！」

吹き飛ばされた美咲はアスファルトに叩きつけられた。

苦し紛れに咳き込みながら起き上がった。

この類絶対あざできる、と思いながら血の流れる頬を拭く。

美咲は勢い良く飛んでくる障害物を避けながら、男子生徒のもとへ走りだした。

「お前……いい加減にしろオー！」

「無駄だ！また吹き飛ばして……?!」

美咲はすでに男子生徒の前にいた。

「吹き飛ばすには計算が必要なんじゃない？」

その通りだった。

吹き飛ばす対象と角度、強弱を綿密に計算して扱うのが男子生徒の能力だった。

つまり吹き飛ばすまでにはどんな電卓のような人間でも何秒かは時間がかかる。

その計算を、音速は余裕で上回ったのだ。

美咲は右手拳をぐつと握りしめ、男子生徒を精一杯に殴った。

音波で男子生徒は少し遠くへ吹き飛ばされた。

「女の顔を何だと思つてやが……?!」

その瞬間、美咲は嫌な予感に上を見上げた。

自転車が空から放られるように落ちてくるではないか！

「いや、あれはちよつと……?!」

ガシツ、と誰かが美咲の腹に手をかけて自転車を避けた。

美咲らの少し横で自転車は軽自動車と同じように壊れて路地に不時着した。

美咲は何も言えなかった。

美咲の前にいたのは芦屋千代だった。

よほど走ったのか、息を荒げて美咲を怒鳴りつけた。

「何勝手に犯人と戦つてんのー!!」

つい癖で。

なんて言えるわけがないアルニカこと美咲歩海だった。

「……危ないでしょう……!!」

影で美咲にはよく見えなかったが、芦屋は頬に一筋涙を流していた。芦屋はそんな時においしい揚げ物の匂いに顔を上げた。

美咲が……

「何やってんの?!」

美咲は唐揚げ棒を食べながらもう一本を芦屋に差し出していた。

「いつもらったのよ!!」

「追っかける前」

そして芦屋は最大の疑問をぶつけた。

「金どうしたの!」

「……」

美咲の嫌な微笑み。

芦屋は嫌な予感から、自分のカバンを探った。

「無い!」

美咲が芦屋の黒い革財布を手にぶらぶらと持っていた。

「スリか!!」

芦屋は即座に美咲から財布を取り返した。

その時だった。

美咲から財布を奪い取る右手。

その手のひらに美咲の表情が凍った。

「……………何それ」

財布を取り返した芦屋が首を傾げた。

「何が?」

美咲は芦屋の右手を無理矢理に広げた。

そして見た。

手のひらに集中した無数の切り傷を。

わからないわけがなかった。

これは、音波振動によるものだ。

『ちーは能力なんて無いよ?』
『これはどーゆーことでしょう?』

美咲は気付いた。

芦屋は、

『私の能力は“根性”よ』

本当に、相殺したわけでもなく、何の変哲もない手のひらで、音波という刃に触れたのだ。

「……すみませんでした」

芦屋は誤魔化すように笑って返した。

「何よいきなり！別にこんな何でもないじゃない」

「私にとっては……」

美咲の震える声に芦屋は思わずぴたりと笑いを止める。

「何でもなくないの!!」

美咲は手に持っていた唐揚げ棒を芦屋に無理矢理渡して立ち上がった。

「失礼します!」

美咲は芦屋を背に暗闇の路地を走り抜けた。

芦屋は無理矢理渡された唐揚げ棒を一口かじり、ため息をついた。

「なんて勘の良い子なの……」

さて、と芦屋は立ち上がった。

ざらりとした目付きが美咲に殴られ、倒れた男子生徒のに向かい、ワイシャツの襟を掴み上げる。

あまり運動は好きではないのか、その華奢な体は簡単に浮いた。

「私はあの子追わなきゃならないの、手っ取り早く答えなさい。何故あんな事したの」

男子生徒は咳き込みながら笑っていた。

「……時空領域は……完成する」

「は？」

すると後ろから芦屋を呼ぶ声がした。

生徒会の他の人が来たのだ。

芦屋はその人らに男子生徒をまかせ、怪我人が逃げたと言って美咲を追い始めた。

*

*

正午。

美咲は女子寮の近くまで戻ってきていた。

篠原に殴られないように、石の道をしっかりと歩こうと決心していた。

とともに、芦屋にはもう二度と触れない、言葉を発さないと決心していた。

美咲は知っていた。

自分の音波がどれだけ小さなことで他人を傷つけるか。

振動数が多ければ多いほど他人に迷惑がかかるのだ。

あの傷は美咲を背負い投げをした時のものだろう。

確かあの時自分は怒っていたと思いつ返し、反省する。

「やっちまったな……」

「本当ね」

美咲はその声に硬直した。

古いブリキのおもちやのようにカタカタと振り返った。

そこには小さめの白いレジ袋を持った芦屋が立っていた。

いかにも走ってきたような汗と呼吸する肩を見て美咲は少し嫌な雰囲気を読み取りながら平常心を保つことにした。

「……あなた、自分の唐揚げ棒まで置いてったでしょ！」

喋らないと決心した美咲は無言、そして表情で「はあ？」と返した。芦屋はづかづかと美咲に近づき、セーラー服の袖を掴んだ。

それを美咲が黙っているわけもなく芦屋の手を振りほどこうとしたが彼女は決して離すことはなかった。

さすがに美咲が小声で言葉を発した。

「……先輩がどんな能力かなんて知らないけど私には触らないほうが」

芦屋は遮った。

「冷める前にどつか座るわよ」

美咲の血の着いた袖を引いて芦屋は午後の賑わう町を歩き始めた。

*

*

山吹病院。

そこは並の人間では成し得ない特別な能力を持った隔離対象者専用の病院である。

患者の身体検査と称して患者を実験に使うという例もあり、能力者たちは“能力者の監獄”とも呼ぶようだ。

そんなことも気にせず、一人の女子生徒が待合室のソファーに背筋を伸ばして座っていた。

ツインテールを微香性ワックスでふわっと仕上げ、今にも寝そうなたれ目をした生徒、しかしその左腕には生徒会の腕章がついていた。その隣には、同じく生徒会の腕章をつけた斬新に切られたショートカットの女子生徒がいた。

「水無瀬ー、患者が出てこない！」

ツインテールの水無瀬が静かに応える。

「黙っていれはすぐにでも来ます」

「でもこーないー！！」

いくら能力者専用と云えど、他にも患者はたくさんいる。待合室にいる他の人々はその二人に「うるさいな」と目だけを向ける。

「羽賀さん、他の方の迷惑を考えて」

ショートカット羽賀が頬を膨らませた。

「わかったよう」

羽賀は懲りずに水無瀬に話しかける。

「水無瀬はどう思う？今回の犯人」

「特に意見はありませんが、羽賀さんは？」

「いや、椿乃峰の天才と謳われる水無瀬しづる様はこの事件をどのように見ているのかなあ、とな？」

水無瀬は女性らしく小さなため息をこぼした。

「まだわからないわ。ただし、時空領域については聞かないと。何か知っているといいんだけど」

* * *

12時26分。

清潔な白に包まれた病室には、容疑者高畑政一が点滴を受けていた。音波により身体中が傷つき、安静を余儀なくされたのだ。

仕切りのベージュのカーテンが静かに開く。

「高畑さん、点滴の交換です」

目を覚ました高畑はその声に疑問を抱く。

「?……まだ点滴は……あんた!!」

高畑は看護師の女の顔を見て思わず飛び起きようとした。

しかし容疑者であるためにケガをしていない右手首には手錠がされていた。

そして頼みの綱であるナースコールもその看護師に取り上げられた。

「看護師ならここにいるわ」

「……………や、やめろ……………やめ……………」

看護師は高畑の腕に、空の注射を射った。

高畑の目に光は消え、抵抗する手もゆっくりと投げ出された。

そして、高畑政一の心拍数は0になった。

第二楽章 4：音は……（前書き）

花岡小夜

はなおかぜよ

椿乃峰学園女子三年。

そして生徒会長。

ふわふわしているようで真面目な先輩として有名。

ただ、電腦世界では見とれるほど美しいと噂である。（いや…そんな……）

進路は電子警察へと既に決定している。

第二楽章 4：音は……

12時27分。

途中立ち寄った大型ドラッグストアで買った包帯や傷薬などを駆使した末、美咲は綺麗に応急措置された。

芦屋の達成感に満ちた誇らしげな姿は言うまでもなかった。

女子寮近くの公園にて、美咲と芦屋はレジ袋に入っていたアメリカンドックを食べていた。

「よかったー、まだ温かい！」

「……ですね」

芦屋の喜びの声に対し、美咲の声は蝋燭に灯る火を揺らすことさえできないくらい小さかった。

二人が座っているベンチのすぐそこでは子どもたちがボールを蹴って遊んでいる。

「さすがに二回唐揚げ棒買うのはナシかな、と思って変えちゃった」

「……ありがとうございます」

また呼吸を感じさせない声量の言葉が芦屋にとっては煩わしかった。何故美咲がこんなにも小声で話しているのかも、本当は話したくないとさえ思っていることも、芦屋は十分に理解していた。

芦屋はふと気付かれなくらいの小さなため息をひとつ。

「ちよつとケガさせたくらいでそんなに騒いでたら一生騒ぐハメになるわよ？」

「騒いでません」

「そうだけど……」

芦屋は苦笑。

美咲が長めの誰にでもわかる大きなため息をひとつ。

「別にそんな酷いケガじゃないから気負いしないでよ」

「酷いじゃないですかー!!」

芦屋の声は止まった。

初めて美咲が怒鳴るように返答したからだ。

強い音波が響き渡り、芦屋が軽く目を瞑る。

美咲は芦屋に向かって悲鳴でも上げるかのような感情で喋った。

アメリカンドックは紙袋の中に咄嗟にしまわれた。

「私の声は今までたくさんの人の心を傷つけてきました。最低限迷惑のかわらないように生きて、先輩のように今でも人を傷つけてしまっんです！」

今にも泣きそうな声は震えながら、美咲は目を瞑った。

「私の音は目に見えない凶器です」

芦屋は少しの間返す言葉をなくしてしまった。

しかし反論することに間違いはなかった。

「あんた本当は自分を理解してないでしょ」

美咲は前髪の間隙からちらと芦屋を見た。

「今の怒鳴り声聞いても私の耳は何ともないのよ？ましてや私まで悲しくなったわ。あんた成績優秀なあの“音姫”でしょ？能力が凶器になるわけじゃない！」

美咲が胸に手を当てて芦屋を見上げる。

「……自分の所為で人がケガしたら誰だって気負いするじゃないですか！」

「まあ、能力には責任があるからね」

美咲は眉を困らせ、芦屋の顔を見た。

「『責任？何それ』って顔ね。」

芦屋は人差し指をピンと突き立て、

「例え隔離地区でも能力者である限り能力を使うのには責任を持って欲しいものだわ。人間の言動ひとつひとつに責任があるように、能力を使うTPOにも責任があるわ」

Time

Place

Object

時、場所、その目的、全てを考え承知した上で能力者は自分の能力の威力と範囲を考えて使わなければならぬ。

芦屋が《TPOくらいわかるわよね?》という視線を向けたので美咲はメモに《馬鹿にすんな》と書いた。(美咲曰く、書いてやった)「いくら強くてすごい能力者でも、少しでも悪い事に使えばそれは犯罪になる。私は能力を良い事に役立てようと生きている人達を信じてこの生徒会に入ったの」

「……………」

「もちろんあなたのためにも
能力の良い使い方。」

美咲にとっては今まで考えたこともないことだった。

音波の良い使い方とは、音波の悪い使い方とは、など考えたことがなかったのだ。

「……………」

「きつと喋るだけで流れる音波が人に害を与えると考えてるのは美咲さんだけなんじゃない?」

芦屋は食べ終わった木の棒をくるくると振り回していた。

美咲が隣で動揺して言葉もでないのを知りながら。

真上から少し落ちかけた太陽が春の公園を照らす中、美咲は時間が止まったように黙り込んでしまった。

*

*

私の名前は美咲歩海である。

幼い頃から音に愛され、音と共に歩んできた。

母から多くの楽器と曲を教えられ、父から音が人体に与え得る影響を教えられた。

私が一言声を荒げれば、誰かが耳を塞いだ。

私が泣けば、誰かが頬に一筋の涙をこぼした。

父はそれを“能力”だ、と言い張り自分のことのように喜んだ。自分だって私が怒った時に耳が聞こえなくならないように守る耳栓を作って使っているくせに。

私はそんな父が大嫌いだった。

でも母だけは耳栓なんてしなかった。

母は言った。

「音は扱う人の心と扱い方を間違えなければ世界中の人の心を感動させられる」

そういった。

今はまだ扱い方が粗くて人を傷つけてしまつとしても、いつかそんな事さえ忘れさせるくらい音を与えられる。

学校の音楽の授業で私が活躍したことなんか一瞬だつてなかった。

しかし、私の家ではそんな悩みを打ち明ける相手さえいなかった。

才能を喜ぶ父、音を愛する母、どちらにも言えなかった。

自分が音楽の授業で一切音を出さないこと。

もちろん最初はクラスのみみんなと精一杯に歌いたかった。

ただ、気持ちがかもればこもるほどその音は荒削りの水晶のように人の心を突き刺した。

みんなが耳を塞いで悲鳴を上げた時、私は恐怖した。

次から歌う時、みんなが私を睨んだ時、確信した。

私はもう二度と歌わない。

いつのまにかクラス内では話し掛けられることすら危険であると言われれていた。

みんなが私を避けるようになった。

もはや私に逃げ場はなかった。

そんな時、何でも知っていたかのように微笑む母が前にいた。

母は教えてくれた。

「もし学校で困ったことがあったならば、音楽室のピアノを精一杯弾いてみなさい」

何も言っていないのに、何でもわかっている優しい微笑みはわたしの悩みをかき消した。

ある日、みんなが私を横目で見ながら噂する音楽室を、私は堂々と歩いた。

黒く大きなグラウンドピアノに向かって、真っ直ぐに歩いた。

授業が始まるチャイムの五分前、私は黒い椅子に腰掛け、鍵盤を叩いた。

*

*

美咲さん？

.....

「.....美咲さん？」

芦屋が美咲を覗いた。

美咲がハツとして辺りを見回した。

芦屋の笑い声がやけにムカついた美咲は口の端をひくつかせて芦屋に振り返った。

「そんなびつくりしなくても私が側にいてあげるから！」

「隣にアホなんていらななんですけど」

「アホじゃないわよ。私の話を無下にしないでちょうだい」

そう話していた時、芦屋の鞆からメロディが流れた。

芦屋があわてて鞆をあさり、白い携帯電話を取り出した。

スタイリッシュかつシンプルな着信音を止める前に、芦屋は美咲に手を合わせて謝った。

美咲は電話に出るよう“どうぞ”とジェスチャーをした。

すると芦屋は携帯電話を開いて耳に当てた。

「もしもし」

電話の向こう側はやけに急いでいた。

「芦屋あ！すぐに山吹病院来て！」

「羽賀先輩？何かありましたか？」

美咲はそつと芦屋の携帯電話に耳を傾けた。

「実は大変な………あつ?!」

芦屋が電話を耳から離し、スピーカーにした。

電話の相手が羽賀先輩から落ち着いた声の人が変わった。

「芦屋さん、水無瀬です。病院に搬送した高畑政一なのですが……」

少しだけ間を置いて静かに告げた。

「死亡しました」

二人は目を丸くした。

芦屋が了解の言葉を告げると、水無瀬はじゃ、と電話を切った。

二人は顔を見合せ、立ち上がった。

公園はまだ子どもたちの笑顔で溢れていて、春の日差しはまだこの花柳を優しく照らしていた。

第三楽章 1：潜入、山吹病院（前書き）

神宮愛里沙

芦屋のルームメイトであり、友達。

クラスは二年とも違うクラス。

とても活発で文字にしたら元気そのもの。（だろ？わかってんじやん）

ただし、口が滑りやすく、秘密はすぐにはれるというおしゃべり。

（仕方ないじゃん）

部屋を散らかすのが得意で、芦屋にはよく怒られている。（余計なことを！）

まあ、とにかく元気な愛里沙ちゃんでした（おうよう！）

第三楽章 1：潜入、山吹病院

午後一時。

山吹病院では大変な騒ぎだった。

美咲と芦屋が駆け付けた時、生徒会の腕章をつけた水無瀬と羽賀がすでに医者と話していた。

医者と入れ替わるように芦屋は医者が離れてから話し掛けた。

「先輩！」

「芦屋さん」

羽賀はすぐそこにあつた椅子に腰掛け、水無瀬は芦屋に状況を説明してくれた。

「特に看護師たちは気付かなかつたみたい」

「あの……」

美咲はゆっくり挙手した。

「あなたは？」

「一年の美咲歩海です。その高畑を本気で殴つたんですが」

芦屋は次の言葉がすぐにわかった。

自分の音波が原因で何かあつたからではないかと疑っていることに、強いショックで死んだとか……」

「高畑政一の死因は血管内に大量の空気を注入されたことによるもの。あなたの音波は関与していないわ、音姫さん」

美咲は音姫と呼ばれたことに驚き、少し顔を赤らめた。

「というより美咲の心中では、『この人きれい……』しかなかった。

「あなたのことは知っているわ。でも耳から血を出したくらいで人は死なないわ」

水無瀬は微笑み、話を続けた。

「ただ、医者の方が不審な新人を見たそうなの」

「新人？」

医者曰く深緑の髪が印象的で見ない顔だったので話し掛けたら、浜

田と名乗ったそう。

その女性は点滴を入れ替えに行っただけで点滴は入れ替えられていなかったし、そんな時間でもなかった。

「すぐにも犯人を捕まえなくてはならないわ。明日には資料がでるみたいだから明日学校に来てちょうだい」

「はい！」

「今日は解散！」

羽賀が両手をあげて万歳をした。

その日は時空領域も発生せず比較的平和な午後だった。

*

*

午後12時05分。

月の見えない曇った夜空の下、美咲はふかふかのベッドから起き上がった。

「もうさすがに病院閉まったよね」

枕元に置かれた灰色のオルゴールが静かに鳴り始める。

「バラード第2番op.38」

美咲がそう呟いて音叉を震わせた。

あつという間に美咲はオルゴールの中に消えてしまった。

曇った灰色の電脳世界に美咲ことアルニカは降り立った。

「曇りは私の服映えないから嫌いだなあ」

「いつだって映えてないじゃん」

「あ?!」

アルニカの隣には既に黒猫のクロがこじんまりと座っていた。

アルニカは静止した。

えーと、誰だっけ。

そう考えながら首をかしげた。

クロの顔が呆れているのがわかった。

「クロ」

「それ！うん、クロちゃんね」

「いや、俺確実に年上だから」

「嘘つけ」

アルニカはクロを置いて病院に向かって歩き始めた。

クロは早足でアルニカに着いてきた。

「てか今日の事件見た？車が落ちてきたやつ」

「ええ、今日なんてアルニカでもないのに犯人殴ったわ」

ええ？！と言わんばかりの表情でクロは尻尾をピンとのばした。

アルニカはそれさえ気にせずさつさと歩く。

「何、そいつ病院送りにしたとか………まさかね！だよな！」

「それどころか死んだわよ」

クロはさすがにふざけられない返事に目を丸くした。

アルニカは腕を組んでクロに振り返った。

灰色の曇った空の下、二人はじつと互いの目を見た。

緊張感のある空気が辺りを包み、アルニカはついに目的地を示した。

「私は山吹病院に資料を閲覧しに行く」

この無謀なアルニカの計画にクロが反対しないわけはなかった。

すぐさまアルニカの行く道を遮るように前に立つ。

「無理に決まってるんだろ！？現場に入るとかとはわけが違う！病院

つても能力者専用の超厳重警備の大要塞みたいなもんだぞ！！」

「そんな難しくないわよ」

「その自信はどっから来んだよ！」

「じゃついてくる？」

アルニカは何故か自信満々な笑みを浮かべ、クロを見下ろした。

という経緯でアルニカとクロは山吹病院のセキュリティサイトの前にいた。

堂々としたアルニカに対し、クロは辺りをキョロキョロと警戒しな

がら彼女の隣を歩いていた。

「マジで入るの？」

「ええ」

山吹病院はその名の通り山吹色の立体アイコンを浮かばせていた。灰色の電脳世界に映える黄金色に似た病院という名の要塞が二人の前にあった。

アルニカはづかづかと中に入っていた。

「クロちゃん、頼みごとがあ……」

「危険じゃないならな。務所行きなんてゴメンだかな」

クロが慎重な理由もアルニカは知っていた。

山吹病院は能力者の病院であるとともに能力者を研究し、観察するための“監獄”と有名であるために、能力者はよほどの事が無い限り近づかない場所である。

二度と病院から出られないような能力者もいるとまで噂されている。そんな要塞に能力者がのこのこと正面から歩いてくるなど普通では考えられないのだ。

しかし、

「あんた現実世界には戻れないでしょ？」

「おまえも無理だろ」

「できるわよ？」

通常、人間が電脳世界に入る場合は架空のアイコンを利用して精神のみをログインするので身体はその場で睡眠状態となる。

しかしアルニカの場合、オルゴール（即ち音が出せるもの）があればそこに身体を移せるのだ。

「それ以前に身体ごと電脳世界に入れるから心配ないわ」

「なんか：お前が人間に見えなくなってきた」

「れっきとした人間です！！とにかく頼みごと聞いてちょうだい！」

アルニカはクロを抱き上げ、こそこそと耳打ちした。

「ええ?!」

クロが顔を引いて動揺する。

アルニカは笑顔でうなずいた。

*

*

午後12時29分。

病院は真っ暗に非常口の緑色のライトがほのかに辺りを照らしているだけだった。

何かお化けでも出そうな不気味な雰囲気醸し出した待合室の椅子の下に小箱がひとつ。

山吹病院は夜中の警備は人間より厳重なロボットに任されている。

能力者に対応して武器まで搭載しているらしいが、落とし物には気付かないようだ。

小箱がほのかに白く光りだし、中からアルニカこと美咲歩海が光とともに出てきた。

しかし美咲は子どもがかぶるようなウサギさんのお面をかぶっていて顔が見えなかった。

小箱を手にとり、辺りを見回した。

「警備ロボットに見つかる前にカルテを……」

美咲は壁に背をつけ、音叉を手に深呼吸した。

素早く音叉を構えて廊下に出た。

仄暗い延々と先の見えない廊下が目の前にあった。

美咲は足音を出さないようにゆっくり、そして急いで廊下を進んでいった。

「資料室は……あった！」

しかし扉はカードキーによるロックがかかっているため中には入れない。

心の中で舌打ち。

「パソコンは使えないかな……」

そう呟いた瞬間、美咲はものすごい殺気に気付き振り返った。
美咲の真上には黒髪を一つに束ねた女性がナイフを振りかざしていた。

「！！！」

「侵入者確認」

美咲は咄嗟にナイフを避け、女性はバキツと扉にぶつかった。

「警備ロボットか、早いなあ」

女性のロボットは長身で、動きやすいように上下ジャージのようなものをきていた。

暗いのに目が慣れてきたのか、資料室のシステムが壊れて扉が半開きになっているのに気が付いた。

美咲は鼻で笑い、自信に満ちた表情になった。

「こんなダサイロボじゃ病院潰れるね」

「攻撃体勢に入る」

女性は美咲に向かって真っ直ぐに走ってきた。

振るわれるナイフの音を微かに聞き、美咲は潜り込むように女性の足下を走り抜けた。

そして資料室の扉を精一杯に押しあけた。

少しお面がズレたがそんなことを気にしている暇はなかった。

「高畑……」

中はまた薄暗く、大量の段ボールとホコリが詰まっていた。

美咲は咄嗟に新しい段ボールを開けてカルテを探した。

しかしすぐに女性は資料室に入ってきた。

「やべっ！」

女性の突きを美咲はギリギリで避けた。

女性は開けられた段ボールを見てまた美咲を見た。

「何か盗みに来たのか？」

「まあね。ちよつと高畑政一のカルテをね」

「許可できない。阻止する」

ナイフは美咲に向けられた。

「湿気たプログラムね、残念でした カルテは見つけたよ」

美咲は片手に高畑政一のカルテをひらひらとさせていた。

女性は素早く駆けてきた。

美咲は青く細長い機械を取り出し、ナイフを避けた。

少しだけTシャツの半袖と腕を切り裂かれたが、そこまで深手ではない。

美咲はカルテを床に叩きつけ、青い機械を上から下にスライドさせた。

「コピー完了！」

そう言った瞬間、女性が美咲に勢い良く切り掛かった。

そろそろ美咲がナイフを避けきるのも限界がきていた。

「オルゴールのネジ巻けないじゃない！」

現実世界から電腦世界に入るためにはオルゴールが鳴っていないければならない、という特殊なシステムのアルニカこと美咲歩海は遂に女性に壁まで追い込まれた。

「名を名乗れ」

……………。

本名を名乗れば万一ここから逃げられたとしてもすぐに捕まるはずだ。

美咲は上腕部から流れる血を押さえてにやりと笑った。

「……………アルニカ……………」

「アルニカ？彼女は死んだはずだ……………」

「まあね。あんたらが死なせたけどね」

アルニカである可能性は0である、と女性がナイフを構えると急に二人の間に見えない壁が作られた。

女性のナイフが壁に触れ、部屋の外まで弾き飛ばされた。

「?!」

「アルニカ！さっさと帰るぞ！」

「クロちゃん?!」

どこからともなくクロの声がして、美咲はすぐにオルゴールのネジ

を巻いた。

もう何の曲が流れたかもわからないくらいの速さで美咲は電脳世界へ戻った。

オルゴールごと消え、高畑政一のカルテのみが残されたその場所をみつめる女性に通信がきた。

「キャロライン、彼女は何と？」

「アルニカと」

「……へえ……キャロライン、そこもなかったように片付けて」
女性はロボットなので驚きはしなかったが一応質問した。

「宜しいので？」

「うん、いいよ。真似事じゃないなら、もしかしたらアルニカの再来かもしれないじゃん」

「……了解」

女性ロボットのキャロラインは資料室の掃除にかかった。

翌朝、早番の看護師が見る時には一切の傷を残していなかった。

また、平和な病院の1日が始まった。

第三楽章 2：大々的な成果（前書き）

浜風莉子

美咲のクラスメイト。

自宅に帰る帰宅生で、どちらかというスポーツ派。

部活はバレーボール、勉強もそこそこで優秀にみえる生徒（何その言い方！）

そんなこんなで偽成績優秀者の浜風さんでした！（うおい！何で偽よ！？）

第三楽章 2：大々的な成果

午前0時40分。

灰色の電脳世界の中、アルニカは肩の傷の変貌に驚いた。

じわじわと焼け付くような痛みと、悪化していく傷口、能力者に対応した武器とはこの事だったのかと後悔した。

おまけに頭までぐらついてきてもう立つことさえ難しかった。

「アルニカ?!」

「ん……………大丈夫……………」

「嘘つけ! さつさとログアウトしろよ!」

「あんたの報告をまだ聞いてない!」

息を切らしてアルニカが言った。

「いい加減にしろよ!!」

クロは奥歯を噛み締めるようにして怒鳴った。

アルニカが目を丸くして顔を上げた。

そうしている内にもアルニカの傷は悪化していく。

「このまま悪化して現実世界に戻ったらただのケガじゃ済まないんだぞ!」

「でも」

「でもじゃない!」

クロは面倒臭そうに目蓋を落とし、

「アドレス渡せ」

「……………何言って……………」

「俺の大々的な成果送ってやるから」

アルニカは少し黙り込み、情けないという表情で小さくうなずいた。

「…でも寮までは戻らなきゃ外にログアウトしちゃうから」

「じゃ俺の目の前でログアウトしてたのは?」

「……………どろろんっ!……………的な……………?」

「ホントに不便な正義のヒロインだな」

クロがそう言った瞬間、アルニカの傷の回りに見えない囲いができ、悪化が止まった。

痛みも消え、冷や汗をかいたアルニカがきよとんとしていた。

「一時的でしかないから後の痛いのは知らないぞ」

「一体何したの」

クロは仕方なく簡潔に説明した。

「俺の能力は一定の区間を無重力にしたりすること。ただしそんな長くは保たないから急いで帰れ、30分後にはこの大々的な成果を……」

「わかった。じゃ明日ね」

「最後まで聞け!!」

クロはため息をつき、手当では頑張れよ、と残してログアウトした。残されたアルニカが何かを言おうとする前にクロは消えてしまった。アルニカは痛みが一時的におさまった腕の傷を見る。

見えるようで見えない空気の囲いがアルニカの傷を守っている。

「一時的だったっけ」

アルニカは真っ直ぐ女子寮へ戻り、真っ暗な部屋に降り立った。

美咲歩海はすぐに腕を見た。

「まだ、守られてる」

クロがつけた無重力の囲いは未だに美咲の傷を守っていた。

美咲はベッドの下から救急箱を取り出し、ベッドに座り手当てを開始した。

しかし、その手は小さくパチツと弾かれた。

すると無重力の囲いが消え、病院で受けた時より少し傷口があらわになった。

急に、電脳世界ほどではないが腕を切られたそれなりの痛みが美咲の身体中を痺れさせた。

明日は土曜日。

2日も休日があればさすがに痛みも消えるだろう。

と勝手な推測をしながら美咲は青い機械からコピーしたカルテのデ

「夕のことを思い出す。

……………。
明日にしようか。

*

*

午前8時28分。

生徒会芦屋千代は他の役員と一緒に生徒会会議室にいた。今回提供される情報がだいたい理解できていた芦屋は少し緊張していた。

時空領域と関係しているのを確実に知っているのはきつと芦屋だけなのだ。

《……………時空領域は……………完成する》

水無瀬や羽賀は高畑とは一切話さずして死なれたそうで、実質彼と言葉を交わしたのは美咲と芦屋のみである。

全員が席に着いた。
会議室はまるで大学の教室のような段差ごとに机がある大きな部屋だ。

芦屋の隣には同じ書記の河南渚が座っていた。

「芦屋ちゃん、今日はやけに深刻な話題みたいだね」

「へ？」

河南が小さく見えないくらいに指差した方向を見ると、風紀委員会の金の腕章をつけた女子生徒が何人か座っていた。

風紀委員会は通常、校内の生徒の身だしなみなどを担当しているが、生徒会のみでは手の回らない事件には協力する心強い委員会。
しかし、

「風紀ってみんな話しかけにくいつてゆーか……………」

「そうねー。でも協力してくれるんだし」

学校の治安が第一である風紀委員会は生徒に対しては全てが公平でなければならぬため、少しでも身だしなみが整っていない生徒が話しかけようものなら事細かに注意される。だからみんな必要以上は近づかないのだ。

入口でもらった資料に目を通した。

風紀委員会との確認のための“時空領域”についての資料が二、三枚。

そして別件として高畑政一の経歴、能力、そして死因の資料が二、三枚。

芦屋はもちろん高畑政一の資料を手取る。

すると、

「皆さん揃ったようなので説明を開始します」

生徒会を担当する梁町先生が教壇に立った。

梁町先生は髪を下で斬新にお団子結びしたメガネの先生である。

顔立ちは綺麗なのにイマイチ格好が伴わないという、なんとも残念な人で有名だ。

「ではまず時空領域についての資料から…」

梁町先生から長い長い説明が始められた。

芦屋はそれを右から左へ受け流し、高畑政一の最後の言葉を思い出していた。

時空領域は既に何度も起きている。

完成する、ということは今までの時空領域は全て未完成ということである。

ただでさえ全てを飲み込む時空領域が彼の言ったように“完成”したら、一体どのようになってしまうのだろうか。

「…場所も時間も不規則で…」

電脳世界のみ起こる不思議な現象。

「…あとは質問がなければ次の件に移り…」

高畑政一、花柳第二中学三年生。

特に部活動には所属せず、専門選択科目で遺伝子操作を選考していたという少々物好きな極普通の生徒である。

死因は体内に空気を過度注入されたことによるもので、搬送から30分以内の犯行である。

証言から深緑の髪の女の看護師が時間外に点滴を入れ替えに行つたとわかつたので、まずはその看護師を見つけだすことが先決である。「電腦警察が既に協力体制をとって捜査を始めています。我々も捜査を開始します。質問は？」

ないようだ。
「では解散」

場の全員が素早く立ち上がり、次々と会議室を出ていった。

河南が芦屋を誘い、彼女らもまた会議室を後にした。

資料を手にやつと席を立つた生徒会長花岡の背を梁町先生が呼び止めた。

花岡はもちろん振り替える。

「何でしょうか」

「ちょっと頼まれて欲しいんだけど、いいかな？」

花岡がこくりとうなずいた。

「実は山吹病院から監視カメラの映像が届くはずだったんだけど遅れちゃったみたいでまだ病院にあるらしいの、取りに行ってもらってもいいかしら」

「わかりました」

「せっかくの休日にごめんなさいね」

花岡は満面の笑みを返した。

「いいえ、花柳の人々を守るために生徒会に入ったんですから、職務を全うできるならどこへでも行きますとも！」

「ありがとう」

花岡は梁町先生に一礼し、会議室を出た。

梁町先生も部屋に誰もいないのを確認し、電気を消し、部屋の鍵をかけた。

午前9時09分。
生徒会、風紀委員会合同会議は終了した。

*

*

午前8時30分。

美咲歩海は枕元の携帯電話の着信音にうつすらと目を開けた。
数秒後、その目はかっと開いた。

素早くベッドから跳ね起き、大きな窓の向こう側に広がる景色と鳥のさえずりをも無視した。

「寝すぎた！遅刻した！」

そして制服に手を伸ばした瞬間、ハッとする。

「今日休みだ！！」

まるで金ダライが頭上に落ちてきたような衝撃的な朝に美咲は床に膝をついた。

「あ……何か今日疲れた」

美咲は鳴りおわった携帯電話に手を伸ばした。

メールが来たようだ。

美咲の知らないアドレスからだった。

迷惑メールじゃないだろうな……と思いつつ読むと。

おーう、そろそろ起きたかー？
ちゃんと消毒したかー？包帯巻いたかー？
クロちゃんだよー

美咲は目を丸くして昨日の出来事ひとつひとつを思い出した。

「あ、アドレス渡したかも」
そうだ。

クロちゃんに調べてもらった成果を送ってもらった。がしかし、メールを進めて下へ下へ行くが、報告の“ほ”の字さえなかった。そして一番下へ行き着くと、

ゲラゲラゲラゲラ。
ムカついた？

と電話番号が書いてあった。

美咲は携帯電話をギリギリと握りしめ、ボタンを押した。舌打ちしながら耳に当てる。

「お、早いな」

美咲にとっては朝を邪魔した忌々しい声が聞こえた。

「おい！！何も重要なこと書いて無いじゃん！！」

「何、おはようもないの……いい感じの朝コール期待してたのに」

「何が朝コールだ！！自分の成果がそんなに大々的ならさっさと教えろよ！」

朝から大声で怒鳴った美咲はハツとした。

あ、音波が……。

その瞬間、美咲の部屋が蹴破られた。

「何事ダアアツ！」

「ひいつ！」

思わず美咲は電話の終話ボタンを押す。

寮長の篠原ことはが部屋にづかづかと入ってきた。

「異常な怒鳴り声でしたぞ、美咲！！」

「いえいえ！あの、何でもありません！休日と平日を間違えまして……」

篠原が上から目線で美咲を睨む。

美咲は頬に冷や汗をたらす。

「そうか、今日は休日だ。じつくり休むといい。じゃっ！」
篠原はくるりとUターンし、蹴破られたドアをそのままに美咲の前から姿を消した。

「…………え…………このドアの修理代自費ですか…………？」
するとまた携帯電話が鳴った。

朝から楽しい寮だな

楽しくねえよ！！

そう返してやりたがった気持ちを抑え、美咲は深呼吸した。
するとまた…………？

電話がかかってきた。
出る。

「もしもし」

「お前……………」

美咲は携帯電話をミシミシ言わせ、その後我に帰って落ち着く。

「じゃ更に怒りそうだから俺の大々の成果を教えてやる」

美咲はベッドに座り、高畑政一のカルテのコピーに目を通しながら早くするよう促した。

「まず病院勤務者のリストだが、浜田って奴はどこにもなくなってる。研修生のリストも見たがいなかった。」

「そのどこが大々的なのよ」

「んでちよつと悪い事したんだわ」

美咲が眉間にしわをよせ、何？と聞いた。

「…………監視カメラの映像データにクラッキング」
美咲は啞然した。

第三楽章 3：ケンカのテキスト―なあしらい方（前書き）

水無瀬しづる（みなせしづる）

椿乃峰学園女子高等部3年生。

生徒会副会長。

学園内で常に学問成績がトップ。

その理由は一度見たものを絶対に忘れない瞬間記憶である。（何を

暴露しているの。自分のことでも話したら？）

いや、水無瀬さんの紹介なんです。

冷静沈着、品行方正とは彼女のことである、という感じですよ。

第三楽章 3：ケンカのテキスト―なあしらい方

クラッキング。

それはネットワークシステムに侵入、破壊、改竄などの不正な行いをする事。

今ではハッキングと称されているが、ハッキングは元々システムを使いこなす尊敬すべき人のことを呼ぶ。

午前8時49分。

美咲はクロのクラッキングの事実言葉に言葉を失った。

「大丈夫、足跡着けてないから。再起動には時間かかるだろうけど」
「……何、もしかしてプロクラッカー？」

クロの声が一瞬止まり、にやははと棒読みで笑い始めた。

「まさか！馬鹿言うんじゃないよアルニカ！専用のソフトなんて持ってないし……」

「持ってたんだ」

……。

「でもすげえ情報は入手！その看護師とやらの顔が見える映像を飛ばしたわけよ」

話をなんとか反らしたクロは画像を送るために電話を切ると言ってさっさと切った。

美咲の部屋がしんと静まり返った。

メールが来るまでの時間はそこまで長くはないだろう。

しかしその間に美咲は少し考えてみた。

「そっか、クロちゃんもこっちでは人なんだよね」

その通り。

電脳世界では猫であっても現実世界に戻れば彼も人間なのだ。

少し気になった。

「きつと相当嫌な面してんだろーな」

外は清々しい晴れで、桜も少しずつ散りはじめている。

すると外で何かあったのか、救急車のサイレンが近づいてきた。美咲は窓からガラス越しに外を覗いた。

「休日なのになんとお忙しいこ………!?!?」
救急車のサイレンが遠退く。

美咲はあわてて携帯電話を開け、リダイヤルした。わりと早く出たクロに美咲は間髪いれずに言った。

「わかった!」

「……………何が」

電話の向こう側のクロが首をかしげているのが目に見えるくらいの間があり、美咲がまたハツとする。

ドタバタと慌ただしく階段を駆け上がる音が近づいてきた。

「えと、今日夜話す!じゃ!」

美咲は携帯電話の終話ボタンを押した。

切られた電話の向こう側が一言。

「……………一方的だな」

そして美咲の方は……………

「何事ダアアツ!」

また来たアアツ。

と心中で叫びながら美咲は啞然する。

篠原が息を切らして美咲の部屋へ踏み込んできた。

美咲は懸命に理由（言い訳）を考えたが、篠原は何かを思い出したように手を叩いた。

「そうだ美咲、外で友達が呼んでるぞ」

「は?」

それから美咲は外へ向かうと見覚えのある顔が並んでいた。クラスでケンカを売られた不良達だった。

「えー、場所を変えさせます……………」

「いや」

篠原が頭をかく。

「芝生を傷つけないければケンカは認める」

「……………ありがとうございます」

美咲は篠原を置いて外へ出た。

長い金髪を風に揺らしながら、腕を組んで立つ女子生徒一名。他後ろに5人。

春風が桜を舞い散らせ、芝生をなびかせた。

「おう！美咲歩海！昭島さんの手を借りるまでもなくはっ倒しに来てやったぜ！！」

「はぁ……………ご苦労なこつて……………」

「行くぞ！」

合計6名が美咲に向かって拳で殴りかかってきた。

こんなの音波で一発ではないか、とにやける美咲、しかしふと動きが止まった。

《人間の言動ひとつひとつに責任があるように、能力を使うTPOにも責任があるわ》

TPO……………。

石畳の上から芝生へはみ出さないように拳を躲した美咲は、頭上に浮いた豆電球が点いたかのようにひらめいた。

「よし！」

金髪はそこに立ったまま、他5人がまた殴りかかってくる。

美咲は試してみることにした。

《今の怒鳴り声聞いても何ともなかったわよ？ましてや私まで悲しくなつたわ》

できるかもしれない。

美咲は大きく息を吸い込んだ。

「ふわんふわんふわーん」

金髪は首をかしげた。

しかしその異変はすぐに現れた。

美咲に向かってきた5人がふらふらと足をくねらせた。

すぐに石畳に膝をつき、芝生に次々と倒れこんだ。

金髪の動揺は目に見えた。

すぐさま美咲の前に来てTシャツの襟をつかみあげる。

「何した!?!」

「寝ただけ。後でお仕置きくらうけどね」

「?」

すると恐ろしいオーラを放った篠原ことはがゆらりと歩いてきた。

すぐに目を覚ました5人の前で篠原は手首を鳴らした。

「オレの芝生に乗るんじゃねエツツ!!」

5人はことごとく一発づつ殴られ、石畳の上に倒れた。

美咲は棒読みの笑い声を発した。

しかし、

「お前等も同罪だアアツ!!」

「嘘オ?!」

篠原の殴りかかってくるのを避けた二人は一目散に庭を出た。

少し遠くまで走った美咲と金髪は同時に後ろを振り替える。

「来ないか?」

「来ないね」

二人は同時にその場に座り込んだ。

仲間がいいのか、と問う美咲に金髪は首を振った。

「もうなんか戻ったら殺されそうじゃん」

確かに。

美咲は鼻で笑って立ち上がった。

学校別の寮が立ち並ぶ菊通りの休日は私服の生徒が多いので誰が誰だかよくわからなくもなる（趣味が見える）。

その中制服を着た金髪を美咲は軽く笑った。

「今日休日だよ?普通私服じゃね?」

「うるせ!」

「で、まだやる気?」

金髪が少し引いた。

美咲が今ごろカンカンであろう篠原がいる寮を指差した。

「連れてくよ?」

金髪は深くため息をついた。

「……………わかった。今回は……………」

「じゃ学園祭頑張りましょ？」

金髪がギクツとしたのがまたわかる。

「お……………お前がもつと真面目にケンカ受けてればこんな状況にはな
って無エんだよ!!」

「そうですね」

「自分の能力をフルに使ってない時点でまともにケンカして無エじ
やん?!」

「そうですね」

金髪が眉間にしわをフルによせた。

「いいとも!か!!」

美咲は立ち上がった金髪を見上げ、止めを刺すように言った（美咲
曰く、言ってやった）。

「そもそも、私が能力をフル活用しなくても勝てる相手の方が悪い
でしょ」

金髪はショックで言葉を失った。

美咲はにこりと笑みを浮かべて金髪に手を差し伸べた。

「私もそれなりに暇ではないの。今日は終いにしましょ?」

「暇だと?!」

「そうよ、あんたの名前さえ知らないんだから。」

「ちよ!!あたしには綿貫菜穂って名前があるんだぞ!」

「そつか。じゃこれからよろしくね」

金髪が頭を抱えてうなり声を上げた。

今日は帰る、と叫んでたつたと菊通りを後にした。

それを見送った美咲は棒読みの笑い声を発した。とともに、自分の
能力がコントロールできたことに少し感動した。

「責任とTPO……………」

音波で空気を小さく揺らす手のひらをぐっと握りしめた。

「この音は人の心に響かせる音……」

午前9時02分。

美咲は嬉しそうに寮へ戻った。

その後篠原に叩きのめされたのは言うまでもない。

*

*

午後10時48分。

美咲は既に群青の電腦世界に降り立っていた。

アルニカとして。

クロはまだ見当たらない。

少し散歩だけしようかとアルニカは音速で電腦世界の夜を駆けた。

そのうちにアルニカは自分の大々的な推理を整理していた。

「クロちゃん来ないねえ」

「来ないわよ」

アルニカは振り向いて言葉を失った。

*

*

同じ時。

クロは群青の電腦空の下で既に足止めを食らっていた。

立ちはだかる女性アイコン（少しピンククローリータ気味）は既に右肩からすべてがキャノン砲に変わった自動アイコンだった。

さすがに小さな黒猫では分が悪い。

「おいおい、誰の差し金だオイ」

自動アイコンはクロにキャノン砲を向けて無表情で応えを述べた。

「私の主人は時空領域、すなわち浜風様とお応え致します」

ク口は心の中で苦笑いした。

“ 大々的な推理は的中だな、アルニカ ”

第四章 1：アルニカの推理（前書き）

はがゆつな
羽賀優奈

椿乃峰学園女子高等部三年。

生徒会副会長。

普段水無瀬と組んでいるお転婆。（いいだろー）

かつ、お馬鹿。（なんだトウ！）

能力としては走るのが速く、瞬発力、動体視力に優れていること。

（陸上部のエースなんだぜい）

勝手に紹介しないでくださいね。

あまり知られてはいないようだがスポーツ推薦で大学が既に決まっています。

（彼氏はその先輩なんだー）

勝手にプライベート紹介しないでください！

これ以上喋るかわからないのでこれにて。

第四章 1：アルニカの推理

午後10時50分。

アルニカ振り向いた先にいたアイコンに目を丸くした。

深緑色のポニーテール、やけに白い肌、すらりとした長身、そこには美咲歩海のクラスメイト、浜風莉子が立っていた。

闇夜に目立たない黒のジャケットにミニスカート、ブーツと全身黒をまとった浜風は声高らかに笑った。

「あなたがアルニカ……私の邪魔をした正義のヒロインって奴ね」

「浜風さん……」

浜風がアルニカに名前を言われて目を丸くした。アルニカがハッと口を塞ぐ。

「何で私の名前知ってるの……？」

浜風はアルニカが美咲である事を知らないのだ。この反応は当たり前である。

簡単に例えれば、町中でいきなり全く知らない赤の他人に名前を呼ばれるという奇妙な出来事なのである。

アルニカは決して他人に正体をバラしてはならない。

ばれたらアルニカとしてもう二度と電脳世界を回れなくなる。つまり、電脳音速散歩が出来なくなるのだ。

それは嫌だった。

アルニカはどうかして誤魔化す受け答えを考えた。しかし、

「まあいいや、調べたんでしょ」

意外な開き直りにアルニカも驚きを隠せないようなホツとしたような感じだった。

「でも生徒会より早くバレるなんて思わなかったわ。どこまでバレてるのかしら？」

アルニカは口の端を上げた。
「90パーセント前後。」

* * *

「ドップラー……?」
「ドップラー効果よ!時空領域は発生した直後に他の場所に遠ざか
つてるのよ!」

ドップラー効果

波の発生源と人との速度の違いによって、波の周波数が異なること。
救急車や消防車が通り過ぎる際、近づく時は高く聞こえ、遠退く時
は低く聞こえる。

原理としては近づいてくる時は波の振動が詰められて高くなり、逆
に遠ざかる時は波の振動が伸ばされて低くなる。

(「Wikipedia参照。見てみるべし」と自分の知能と組み
合わせて説明した事を誇示する美咲歩海)

電話の向こう側のクロは救急車の例を説明されてようやく理解した。
「でも実際は時空領域が全部吸い込んでるんだぜ?どこかに帰って
きてるわけでもないし」

「でもあの時空領域はすぐになくなってしまつて未完成、吸い込め
たとしてもあまり保たないはず」

だから?と聞くクロに美咲は少しイラツとしながら答えた。

「つまり、相手は完成を急いでるはず。時空領域に閉じ込めたもの
を永久に閉じ込めるために」

「そりゃマズいな。あ、大々的な成果見た?」

「は?」

美咲は携帯電話を耳から離し、受信メールがあるのに気付き、開く。
そして驚愕した。

添付してある写真に思わず目をぱちくりとさせた。

写っていたのは監視カメラの一枚だった。

その人物はあまりにも身近な浜風莉子だった。

「嘘……………！」

「ん？知り合い？」

美咲は電話を耳に押しあてた。

「隣の席」

「そりゃ大変だ」

美咲の声が止まったままなのでクロが少し心配するように声をかけた。

美咲は目をキョロキョロと動かして頭を回転させていた。

「……………時空領域は完成してるのかも」

「は？」

写真に写った浜風の表情は自信満々の薄ら笑み、協力者（仮定）を殺害した帰りにこんな表情をするものだろうか。

高畑に協力してもらったことがなくなったから、つまり時空領域が完成して起動するだけの状態になったから殺害したのではないだろうか。

*

*

午後10時51分。

アルニカは浜風に残り10パーセントのわからないことを聞こうと
していた。

がしかし、

「私も大掃除は最後まで終わらせたいの。こんな時に邪魔はさせない！！！」

「大掃除？」

浜風は高笑いしながら右手に大きな針のようなものを出した。

「そつよ………！この数年で成長しすぎたこの電脳世界を、私がリセットさせるのよ！！」

アルニカの返答を待たずして浜風は針を構えて駆けてきた。

アルニカも大きな音叉を構えて針を弾いた。

「完成した時空領域はどこにあるの！！」

「すぐにでも起こしてあげるわよ」

浜風の顔が異常ににやけたのが見えた。

*

*

午後10時53分。

クロはピンククロリータ気味自動アイコンに圧勝していた。

自動アイコンはその場に横たわり、同じ言葉を繰り返していた。

「検体コードヲ入力シテ下サイ。プログラムラインストールシ直シテ下サイ。繰り返シマス………」

何の外傷もない自動アイコンに目も向けず、クロはさっさとそいつを横切る。

「相手が悪かったな。さて、アルニカはどこかなあ………？」

自動アイコンはもう動けないはずだった。

なのに自動アイコンの真っ白な手がクロの足をつかんだ。

「ちよ」

「最終プログラム起動。暗黒領域ヲ発動シマス。衝撃二備エテ下サイ」

「は？」

すると急に自動アイコンの身体が体内から何かに引きずり込まれているかのようにぼこぼここと陥没し始めた。

まるで紙風船を指で押すように、折り紙でできた箱を握り潰すよう

に、自動アイコンは何かにのまれた。

そしてその引きずり込む力はクロのアイコンにまで及んだ。自動アイコンの手がクロの足を離さないのだ。

「おい！離せよ！洒落にならねえじゃん！！」

もう自動アイコンに喋るプログラムはなかった。きつと何かにのまれたのだらう。

そう焦っている間にもクロは自動アイコンの手が足をずるずると何かに引き込んでいく。

「おいおい、こりゃ……………時空領域じゃねーか」

自動アイコンが一瞬で吸い込まれ、吸い込んでいた何かを目にしたクロはそう言った。

そこにあつたのは真つ黒に渦を巻く大きな物体だった。

恐ろしいまでに大きな爆発音とともに電腦の空に真つ黒な時空領域が浮かんだ。

それを少し遠くにアルニカと浜風が見つめる。

「あんたの連れもお終いね」

浜風の高笑いにアルニカは血相を変えた。

「……………クロちゃん？」

「これで……………私の暗黒領域は完成よ！！」

アルニカはどんどん巨大化する暗黒領域を見つめた。

しかし浜風が笑い声を止めた。

「ちよつと、どうして成長が止まらない？！」

暗黒領域が辺りのモノを吸い込み始めた。

しかしその暗黒領域の大きさは電腦世界の空を覆い尽くすくらいだった。

建物も、人も、何もかもを吸い込んだ。

「アルニカ！」

その声にアルニカは振り向いた。

クロが傷だらけで走ってきたのだ。

「クロちゃん?!」

「アルニカ、無事か?!」

「それは私のセリフだ!! 一体何があったの?!」

クロは自分の目の前に暗黒領域ができたのを一切言わず、色々あってな、としか言わなかった。

アルニカはクロをひょいと抱き上げ、頬をすり寄せた。

「わっ!! 何すんだ、離せよ!」

「心配させた罰ね」

クロは前足を駆使してアルニカの腕から前足を出すことに成功した。

「それよりアレどうすんだよ」

アルニカはハツとしてクロを落とした。

クロがしりもちをついた。

それをそっちのけでアルニカは暗黒領域を見つめてへたりと座り込む浜風に駆け寄った。

「浜風さん! アレ止められないの?」

浜風は完全にショック状態で暗黒領域を丸い目で見つめていた。

「……止める気なんて無いわ……私はこれを楽しみにしてたのよ……」

……!」

アルニカは絶えず全てを飲み込む暗黒領域を見、クロを見下ろした。

「ねえ」

「何だよ」

「私の事信じる?」

クロは二回瞬きをし、アルニカを見上げた。

午後10時59分。

暗黒領域が完成した。

第四章 2：アルニカの発想（前書き）

紹介すべき人物が減ってきた。
というよりいなくなった。

……………グフッ！！

申し訳……………ごさいません……！

第四章 2：アルニカの発想

「ホワイトホール？」

「そこから出られるかもしれない」

午後10時59分。

アルニカはクロに提案していた。

ホワイトホール

アインシュタインの相対性理論上で議論されるものである。

全てを二度と外部へ逃さず、飲み込むブラックホールとは逆に、外部へ全てを放出するのがホワイトホールである。

しかし、数学的な理論としては成り立つが実際にあるかは不明である。

アルニカは暗黒領域の中に入って出口を探そうと考えただ。

それをクロが認めるわけはなかった。

「普通に無理だろ！自分で完成した時空領域は永久にものを閉じ込めるって言うてたる?!」

「言っただよ！」

アルニカは口をへの字にしてクロの隣にすくとんと座った。

「でも私ならできるかもしれない」

「その自信はどこから？」

フィクションとして扱われるホワイトホールが実際に起こるわけがない、それがクロの見解。

しかしアルニカは暗黒領域を止める気だった。

「音は何でも包み込む。私は暗黒領域を音で包み込む」

「無理だべ」

「あんた無理無理言い過ぎよ、私だって自信無くなっちゃうじゃない」

通常、ブラックホールは肉眼では見えないものである。

それが見えるという異常な事態なのだから、あるわけないものがある。あつてもおかしくないと考えていた。

そこへ電腦警察のサイレンが聞こえた。

浜風はもう動きそうにない。

アルニカはクロに耳打ちした。

クロの耳が少しだけ動いた。

アルニカはその後立ち上がり、音叉を精一杯に振るわせた。

音波は花柳を包み込む大きさになり、暗黒領域をも包んだ。

アルニカは音叉を持ったまま走り出した。

「んじゃ行つて来る」

アルニカは暗黒領域に吸い込まれた。

それとともに音波が暗黒領域を引き込み、群青の電腦世界が戻つた。あつという間の出来事で、クロはまだアルニカが消えていった空を眺めていた。

「……………ちよつと……………何で止めるのよ!!」

浜風が突然立ち上がり、クロに怒りの視線を放った。

そういえばアルニカのクラスメイトだったっけ。と思いつつ、クロは後ろ足を少し引いた。

しかし、

「生徒会です！おとなしくその場に座りなさい!!」

生徒会の役員が二人駆け付けてきた。

クロは思わず近くの草むらのフィールドに飛び込んだ。

「逃げよ!!」

自分だつて見つかつては困る。

既にアイコンが不正なのだから。

とにかく自分はログアウトしなければ。

電腦警察のサイレンが遠退き、クロはやっと足を止めた。

「待ちなさい」

クロは尻尾を立てさせて硬直した。

真横から藤色のウイステリアが歩いてきた。

クロは自分の最期を覚悟した。

確実に逮捕だ。

「アルニカを見なかったかしら？」

「……見てない」

「嘘ね」

ウイステリアはクロの前に屈んだ。

「貴方アルニカの連れよね？」

「よくご存知で」

ウイステリアの顔立ちはよく見るととても綺麗で、可愛らしさと言
うより美しさを引き出していた。

濃い紫の着物から少し見える足がアイコンなのにやけに生々しい。

クロの見解としては、アルニカよりも胸が明らかに大きい。

アルニカも少しは………と思いつつ、クロは仕方なく少し話す
ことにした。

「アルニカは完成した時空領域と一緒に消えたけど」

「消えた？！何があつたの？」

「そのうち今まで吸い込まれたモノと一緒に出てくるから安心しろ
ってさ」

「答えになってないわ！ましてや貴方不正アイコンじゃない！」

クロがギクツと心の中で苦笑する。

やはり捕まるのか。

ウイステリアが額に手を当てて深くため息を吐いた。

「……もうすぐ包囲テープがここにも張られるわ。急ぎなさい、黒猫
さん……」

「捕まえないのか？あんた生徒会だろ？」

私が追ってるのはアルニカだけ、と言い残してウイステリアはサイ
レンの鳴る現場へ消えていった。

クロはホツとした。

そしてログアウトしようとした。

ちらと空を見上げ、少しまぶたを落とした。

「アルニカ……………」

午後11時05分。

クロは電脳警察の包囲テープが完成する寸前、ログアウトした。

ともに、椿乃峰女子学園高等部1年、浜風莉子は時空領域事件と高畑政一殺害事件の犯人として逮捕された。

*

*

翌日、日曜日。

午前9時ジャスト。

電脳警察本部の取調室にて、浜風莉子の事情聴取が行われた。

全てを灰色の壁が囲い、唯一鏡が横長についている。

一瞬でわかる。

マジックミラーであり、向こう側では警察が見ているのだ。

灰色のデスク、向かいに置かれた2つのパイプ椅子、そしてデスク

の裏には別室のパソコンに送られる聴取レポートのための音声感知機能の機械がある。

浜風の前にはスーツ姿の男が座った。

「浜風莉子、まず何故やったのか答えなさい」

浜風は何の口籠もりも無く答えた。

「電脳世界の大掃除」

「何故そんな事を？」

浜風の口が少しにやける。

「何か理由が必要ですか？やりたい事に」

男はそれ以上動機は聞かなかった。

経緯や、計画についてのみ聴取し、終えた。
浜風には一切の謝罪の念はなかった。
とにかく満足した。
そう言い残して聴取は終了した。

*

*

美咲歩海は考えた。

暗黒領域の中から出口を探す方法を。

アルニカは見た。

暗黒領域に吸い込まれたモノの眠りを。

ここはどこだろうか。

いまは何時だろうか。

光も、色も、音さえ無い空間にアルニカは立たされていた。

周りにあらゆるモノが眠っているのを感じられるだけだ。

でも

何も無い。

叫んでも自分の声なんて聞こえなかった。

風も吹かないからせつかくの青く可愛らしいリボンもしぼんだように見える。

「こんな所で何をしているんだ？」

「もうここからは出られないよ」

違う。

違う。

眠っている人の諦めが聞こえた。

アルニカはこだまするその声に耳を塞いだ。

ひたすら頭に響く声は、塞いだ耳を通り抜けてくる。

「もう……………諦める」

違う。

違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う！！！！

アルニカの響かない声が虚しく悲鳴を上げた。

「私はここに何しに来たのよ？」

アルニカの手にもぎたバイオリンが握られる。

右手に弓、左手に弦を構えてアルニカは目を閉じた。

「私は……………」

弦に弓を乗せる。

弦がギツと小さな音を響かせた。

呼吸が聞こえる。

音の無い世界に音が響いた。

アルニカは大きく呼吸した。

弓を静かに引いた。

「私はここを出るために来たの！」

簡単な答えが真っ黒な空間を真っ白に塗り替える。

「響け、私の音！！」

アルニカのバイオリンからメヌエットが響き渡った。

風が髪を揺らす。

春の音に目を開ける。

真っ白な領域が全てを包み込む。

アルニカはうつすらと目を開けた。

第四楽章 3：音が聞こえる

あの夜から少し経ち、今は月曜日の朝である。
午前6時24分。

朝にも関わらずクロは空色の電腦世界を散歩していた。

「おいおい、遂に徹夜か……………」

クロは空を見上げた。

ログアウトした後も結局アルニカの言葉を忘れられずに深夜徘徊をしていたのだ。

「とりあえず今日はサボるとして……………」

週明けの通勤（通学？）をサボることまで考えていた。

何故ここまでアルニカを心配しなければならぬのか、自分でもわからないまま人目につかない通りを歩く。

サボる理由もない人達が圧倒的に多いため、この時間帯にアイコンが見えることはない。

しかしクロはふとアイコンを一つ見つけた。

午前6時29分。

静まり返った蓮通りに、見覚えのあるアイコンが立っていた。

ピンクに白のレースの厚手のワンピース、ピンクの厚底ローファー、銀の長い髪、そして白い日傘。

そこにいたのは暗黒領域を起動した（ピンククローリータ気味）自動アイコンだった。

「おい、お前！！」

自動アイコンがクロを横目に見つめた。

クロは思わず口走った驚愕の一声に後悔した。

襲ってくるかもしれない奴に声かけるなんて自殺行為である。
しかし、

「アルニカなら心配いりませんよ」

「……………へ？」

意外な言葉にクロは首をかしげた。
その時だった。
空が鳴った。

*

*

午前7時03分。

芦屋千代は寮長室に来ていた。

とはいえ寮長室の前だった。

「なんかストーカーしてるみたいよね……………最低の人間に近づいてるのかも……………」

芦屋は美咲の部屋をノックしても誰も出ない事に違和感を覚えてこの状況に至る。

寝ているとしてもさすがに起きる時間である。

しかし、これを訴えるとイコール美咲の部屋に入りたい、とならないか？とどきまぎしているのだ。

「おい、いつまでそこにいるんだー？早く入れー。」

部屋の中から篠原の声が聞こえた。

芦屋は唾を飲み込んだ。そしてゆっくりと扉を開けた。

中はカーテンが閉まっていて、薄暗い部屋だった。

寮長の焦げ茶色のデスクで篠原が何か書類を書いていた。

「よう、芦屋」

「あ、お、おはようございます……………」

芦屋は口の端を吊り上げて言った。

「言えません。」

「言えませんか！！」

芦屋がああ、その、と戸惑っている。と篠原がため息をついた。

「美咲歩海なら実家でバカンスだ。学校にはそのうち戻れるらしい」

から安心しな！。」

芦屋は目を丸くしてホッとした。

しかしそれもつかの間、篠原のデスクに手をついた。

「って、そのうちって何ですか？！実家どんだけ遠いんですか？！」

「いや？すぐそこだ」

「ではすぐ帰ってこれるじゃないですか！！」

篠原がふざけた笑い声を上げる。

「大丈夫だよ、すぐ帰ってくるから安心しな」

「さつきそのうちって言ったじゃないですか！！」

「そんなに気になるのか？音姫が」

芦屋は少し恥ずかしげに笑った。

すると篠原が思い出したように手を叩いた。

「そういえば風紀の安西がお前を呼んでたぞ？事件の事じゃないか？」

安西は芦屋のクラスメイトであり、風紀委員会に所属している気難しい女生徒である。

芦屋は友達のようなだが本当にかみ合っているのかは不明な仲である。

「あ、あとこれでお使い頼めるか？」

篠原は芦屋の手に500円玉を乗せた。

そして耳打ち。

芦屋の目が呆れと面倒臭さを語った。

篠原はもう一度お願いして、芦屋はやつとうなずいた。

芦屋は篠原のいる寮長室を後にし、安西の住まう311号室へと向かった。

芦屋の住まう305号室の向かいが315号室、311号室は一番奥の部屋である。

「誰が部屋に来说いたのじゃ」

驚きに肩を動かし、振り向いた先には黒髪の女生徒が立っていた。

風紀委員会、安西潔子だった。

きつと椿乃峰の制服が黒かったならものすごく綺麗な人だろう。

バツサリと切られた黒髪、黒い瞳、人形のような白い肌。しかしその声はかなり低めだ。

「あ、きよだ！」

「気安く呼ぶでない」

朝から少々不機嫌な受け答えに芦屋は首をかしげた。

すると安西は携帯電話を開き、芦屋の耳に無理矢理当てた。

携帯電話から聞こえてきたのはバイオリンの独奏だった。

「ポツケリー二作のメヌエット……………」

安西が携帯電話を閉じる。

「これが今電腦世界中に流れている。花柳の隅々までな」

「?!」

不可能な事である。

花柳には電腦世界に音楽を隅々まで響き渡らせることができるほどの技術は存在しない。

各位置にスピーカーがあるなら別とするにもそんなものは設置されていない。

「通報が殺到じゃ。“空が鳴っている”とな」

「空が……………鳴る？」

芦屋は予感がした。

しかしそれは、嫌な予感ではなかった。

*

*

美咲歩海は言った。

完成した時空領域からは二度と出られないと。

アルニカは言った。

私なら出来るかもしれないと。

あの暗黒領域が広がる空の下、アルニカはクロに告げた。

「私の音を聴いてて」

クロは空を見上げた。

午前7時05分。

どこからともなくメヌエツトが花柳中に響き渡っている。

優しい音色に多くのアイコンが電脳世界にログインしてきた。

「音が……聞こえる」

そして更に不思議な事に空から白い雲が無数に現れ、あらゆる色のついた音符が落ちてきた。

ふわふわと落ちてきた音符は時空領域が起きた現場に降り注ぎ、建物やアイコンに姿を変えた。

花柳が喜びの色で満ちあふれた。

再会を喜び、驚き、涙さえこぼれた。

自動アイコンの手にも音符が舞い降り、小さな緑色のオルゴールが乗せられた。

クロの前に静かに置いた。

クロはまだ空を見上げていた。

もう何も落ちてこないのか？

「アルニカ………？」

「そのオルゴールはアルニカのもんです。帰って来たら渡して下さい」

そう言い残して自動アイコンはDELETION（削除）と表示されて消えてしまった。

クロはまだメヌエツトの鳴り響く空を眺めている。

周りの喜びなんて気にしなかった。

救ったはずの張本人が帰ってこないのだから。

「まさかね………」

最悪の事態を考えた。

「死ぬわけ無いでしょ？」

「だよな………？………?!」

クロは思わず振り返った。

そこには腕を組んだアルニカが仁王立ちしていた。
クロは目をまん丸にして言葉を失った。

「……ちよつと、クロちゃん？大丈夫？」

「遂に俺にも幻覚幻聴の症状が……」

アルニカはため息とともに肩を落としてクロを抱き上げた。

まだ音符は花柳に降り注いでいる。

「本物よ！もう少し喜ぶと思ったのに」

「……本物？」

確かに抱きしめられたアルニカの肌からは熱が伝わってきた。

ドキドキするくらいに心臓の音が聞こえた。

「……本物だ」

アルニカがウンウンとうなずいた。

「この貧乳はアルニカだ」

「お前サイテー！！」

アルニカはクロを突き放すように地面へ落とした。

クロが背中を打ち、ピクピクと震えながら起き上がる。

そこをアルニカは髭を引っ張った。

「暴力反対！！」

「うるさい！この変態ネコめ！！」

しかし周りの状況にアルニカが手を止めた。

そこらじゅう人だらけである。

もしここでアルニカに注目が集まってしまったら正体がバレる可能性大だった。

アルニカはクロを抱えてハミングした。

人が一人座れるくらいの八分音符が出来上がり、その上に座った。

ふよふよと浮かんでいくアルニカに人々が大口を開けて歓喜する。

「あれは……」

「アルニカだ！！」

アルニカにとっては正体を知られないために逃げていたが、人々に

とっては彼女が自分たちを救って帰っていくように見えていた。

桜色の髪が揺れ、青いリボンが風になびく。

膝に乗ったクロが春の温かさと徹夜で欠伸をかいた。

午前7時11分。

時空領域事件は解決した。

終曲：数々の贈り物を、あなたに

午前7時15分。

美咲歩海は女子寮202号室に降り立った。

アルニカでいる時間が長かったためか、足がふらついていて。

カーテンも閉まっていて薄暗い部屋に美咲は一人ポツンとベッドに座った。

終わった。

その事実には脱力感を憶えて肩を落とし、深いため息をついた。

「あれから浜風さんどうなったのかな……」

美咲は学校に行く事が恐くなった。

もしあの後浜風が捕まったとしたら、もう会えなくなる。

学校の隣の席に、浜風がもういない事になる。

美咲は確かに時空領域事件を解決した。

しかし心の奥底で後悔していた。

「私は……」

すると静かな足音が近づいてきた。

ノックの音が部屋に鳴り響く。

「美咲？入っても良いか？駄目なようなら出直すが」

篠原の声だった。

美咲はあわてて扉を開けた。

「どうぞ！全ツ然大丈夫です！！」

「……………そうか？まあプレゼント渡しに来ただけなんだけどな」

「プレゼントですか？私に……………？」

おうよ、と篠原が紙袋を手渡した。

中身を取り出すと、黒い短パンが現れた。

ちょうどミニスカートの下に履くようなものだった。

「ケンカがいくら強くてもパンツ丸見えじゃなー、と思ってな」

「パツ……………！！」

美咲は顔を真っ赤にした。

篠原がゲラゲラと笑って腕を組んだ。

「だってこの前ケンカしてた時、音波でスカートひらりだったんだぞ？女として嗜みがないとな！」

わっはっは、と篠原が美咲ね部屋を後にした。

美咲は少し恥ずかしげに黒い短パンを広げた。

そして気付いた。

今日は月曜日である。

色々と考えていたせいか、既に時計は8時を指そうとしていた。美咲歩海の遅刻をかけた大奮闘が始まった。

*

*

午前8時30分。

14秒。

美咲歩海は椿乃峰学園の下駄箱に到着した。

そして冷ややかな視線を感じて振り向いた。

「今日も遅刻ね……」

腕時計を指でコツコツと叩く芦屋千代が立ちはだかっていた。

下駄箱には他に人がおらず、本日の遅刻者は美咲一人のようだ。

「また生徒会室に連行するわよ？」

「生徒指導ですか？」

「当たり前でしょ？もう二回目よ」

「そうですね」

「そうそう、やっと耳鼻科にかかった男子生徒が退院したのよ」

「そうですね」

「知らなかつたくせに……」

芦屋が頭を抱えて激怒する。

まるでキラウエア火山が噴火した大事件のように。

美咲が遠い目で素っ気なく笑った。

美咲は上履きに履き替え、かかとを整えた。

そうやって頭を下げた状態の美咲の前に白いレジ袋が差し出される。

美咲は芦屋を見上げて首をかしげた。

「プレゼントよ」

「何で」

芦屋が口をへの字にして吐き捨てた。

「高畑捕まえてくれたお礼よ！さっさと受け取りなさい！」

「捕まえたの先輩じゃないですか」

「でもケガまでして戦ってくれたじゃない」

セーラー服が長袖のため見えないが、腕にはまだ高畑の能力によるケガが残っていた。

芦屋がレジ袋をわざと揺らす。

美咲は礼を言ってからレジ袋を受け取った。

中身を見て美咲の表情が少女に変わる。

周りにお花畑が見えるくらいキラキラした目をして袋からプレゼントを取り出した。

入っていたのは先日コンビニで美咲が手に取っていた女の子雑誌だった。

しっかりとスペシャル(?)な電動消しゴムもついていた。

まるで子どもを高い高いとするように雑誌を上に向けて喜ぶ美咲を芦屋は白眼視する。

まさか本当に欲しかったとは。

「これ……………本当にくれますか？」

「え……………ええ」

「ありがとうございます！！」

本当に喜んだアアツ！

芦屋の頭上に金ダライが落ちた。(非現実で)

しかし芦屋は美咲にどうしても言わなければならなかった。

自分がものすごい緊張感に包まれているのが肌にさえ感じられた。恥ずかしいというのか、情けないというのか、どんな感情が緊張感を生んでいるのかはわからなかった。

しかし芦屋は美咲とパツチリと（たまたま）目が合った瞬間、緊張が絶頂期に達した。

はつきり言えば、今の自分の顔を鏡で見たくなかった。

美咲の目は変わらずやる気のない目で、芦屋を見つめていた。

「緊張してますね」

「?!……………いいえ?!まさか!!そんなわけないじゃない!」

芦屋は両手を振って完全否定した。

美咲には「凶星です」と言っているようにしか見えなかった。

何故なら美咲には芦屋の動揺が音波から感じ取れるからだ。

「言わないなら授業に……………」

「待った!ちよつと待って?えーと、あの、」

珍しく美咲が止まってくれていた。

芦屋は叫ぶように言い放った。

「ありがとう!!」

美咲は桜色のメモに何か書き始めた。

芦屋が顔を真っ赤にして美咲をちらと見た。

「いって。」

そう書いたメモを切り取り、芦屋に渡した美咲はたったと教室に向かった。

芦屋はメモを見直す。

端っこに小さく何か書いてある。

「一人でまたパトロールが寂しかったらまた誘っても良いですよ」

芦屋の感謝の気持ちが一瞬にして消え失せた。

「二度と誘ってやるか、この問題児がアアツ!!」

美咲が階段を駆け上がる瞬間だった。

*

*

午前8時31分。

美咲は一年B組にたどり着いた。

まだ先生は来ていなかった。

ギリギリセーフである事を確認した美咲に学級委員の二人が駆け寄ってきた。

「おはよう、美咲さん!!」

「あの人達何かあったの?!」

学級委員の一人がちらと視線を向けた。

その先には学園祭でのクラスの催しについて企画している輪の中に入る不良（綿貫ら）がいた。

美咲は思い出した。

あ、勝ったわ。

しかしそれは言わなかった。

「さあ、改心したのかしらね」

「え、じゃあ美咲さん何も……」

「ええ」

「昭島先輩には……」

「会ってないわ。それに手伝ってくれるんだからそれで良いんじゃない?」

美咲は二人を残して自分の席に着いた。

学級委員は目を輝かせた。

「さすが……」

「音姫様の風格ね……」

ちょうど美咲が椅子に掛けた時、先生が入ってきた。

「ごめんなさいね、出席簿探してて」

先生が教卓に手をついた。

美咲は隣を見るのが恐かった。

しかし彼女は横目で見た。
誰も座っていない浜風莉子の席を。
もう誰も座らない彼女の席を見た。
そして先生が切り出した。

「皆さんに悲しいお知らせがあります。浜風さんが急な都合で花柳外に転校する事になりました。」

美咲は思わず先生をまじまじと見た。
転校だと？

クラス内が騒ついた。

ちなみにその後、電子新聞には時空領域事件解決について書いてあるのを美咲は目にした。

しかし犯人は匿名で、女性ということしか書かれていなかった。

そして一面にはアルニカが暗黒領域から脱出、引き込まれた全てが戻ってきた事が大きく書かれていた。

美咲は授業が終わった後、すぐに寮へと戻った。今日は衝撃的な事がありすぎたのかもしれない。

202号室を閉め、薄暗い部屋で美咲は扉に背をついた。

ずるずるとその場に崩れ落ちるように座り込み、気付けば頬を伝い、床に滲む涙が落ちていた。

足を軽く投げ出すように美咲は座っていた。

「私は……」

その時だった。

美咲のカバンから携帯電話が鳴り響いた。

美咲は鼻をすすり、携帯電話を開けた。

電話だった。

ク口からだった。

出る気がしなかった。

こんなに涙でぼろぼろの状態で喋れば確実に笑われてしまう。

そう思った。

しかし………

長いな。

やけに着信が長い。

どれだけ待っているのだろうか。

もしかしたら「おかけの番号に繋がりましたが、お出になりません」

(諦めるよ)とアナウンスが流れるまでずっと耳にあてているので

はないか？

.....

美咲は携帯電話を床に置いた。

通話ボタンを押した。

しかし美咲は何も喋らなかった。

ただ静かな部屋の音を聞いていた。

携帯電話の画面は通話中と秒数が刻々と刻まれている。

「.....」

「.....」

美咲は終話ボタンに手を伸ばした。

「泣いてんの？」

美咲の手が止まった。

電話からクロの声がした。

しかしその言葉は美咲に電話を持たせた。

「な.....泣いてるけど？！それが何よ！笑いにかけたわけ？！」

美咲はまた鼻をすすった。

それでも周りに音波の影響が出ないように声を潜めていた。

「.....笑って欲しいの？」

「違うわよ！！」

「じゃあ切らないで」

美咲はそつと終話ボタンから手を引いた。

「笑うつもりでかけてないから」

クロはいつにも増して物静かに言った。

美咲は笑うためでない事で更に泣き出した。

「だいたいわかるけど何があったか言ってみ？聞いてやるから」

「……………学校行ったら浜風さん転校した事になってて新聞見たら自分の方が大々的に載っててちつとも嬉しくなくて…」
美咲の口が止まった。

クロはまだ何も喋らずアルニカこと美咲の言葉を聞いている。
セーラー服の袖で涙を拭った。

「……………私……………悪い事したのかなとか……………思っ……………」

美咲はまるで子どものように泣いていた。
それでも声を殺して静かに泣いていた。

しかし美咲はふと気付いた。

クロにとっては美咲は“アルニカ”である。

こんな風に弱音を吐いているようではアルニカの品位が下がってしまうではないか！

クロにとってもアルニカは正義のヒロインかもしれないのだ。

美咲は酔いを覚ますように首を振り、携帯電話を握りしめた。

「ごめんなさい！！やっぱり何でもないわ、気にしないで！」

「え……………」

「もう全ツ然大丈夫！！だっ……………」

「正義のヒロインだから？」

美咲はその一言に少し身震いした。

まるで自分が今考えていた事が筒抜けになっていたように分かり切っているようだった。

心臓の音が聞こえて、空気が無いわけでもないのに胸が苦しくて、呼吸が苦しかった。

また涙が頬を伝った。

「ちなみにさ」

美咲が持つ携帯電話からクロの声が聞こえた。

「……………お前は悪い事はしてないからな」

「……………」

「……………本当、俺のクラッキング以外は悪い事してないからな」

「……………」

「…ほ、本当にお前は悪い事してないんだぞ！変なブラックホールから人出して、ちゃんと眠気覚ましのバイオリン聞こえたし…」
美咲は“バイオリン”の一言に顔を赤くした。

聞いてくれていたのか、と感動かつ恥ずかしがっていた。

「…眠気覚まし？」

美咲が突っ込んだ。

「いや、さすがに徹夜はキ……げ。」

「徹夜？」

美咲は理解した。

身体中が熱くなり、いてもたってもいられない感情にまた涙が落ちた。

クロが電話の向こう側で後悔の叫び声を上げ、話を切り替えた。

「それより大変なんだわ、復活したか？アルニカ」

美咲は歯を噛みしめ、その目に輝きを取り戻した。

少し返事に間を置いたが、美咲は涙を袖で拭いて強くうなずいた。

「……………おうよ……！」

「よし、本題はこれだけだ。よく聞け、電腦世界では今ホワイトホールと一緒に吐き出されたウイルスが花柳を崩壊させようと頑張っている。1分後に桜通りに集合な、んじゃ！」

美咲は硬直したがすぐにハツとした。

「待って……！」

「……………何さ」

美咲は本日初めて心から笑った。

「ありがとう」

クロが少し間を置いて答えた。

「……………いって」

んじゃ、とクロは言い直し、電話を切った。

美咲はスカートについたカラビナポーチから素早く銀に輝く音叉を取り出して、震わせた。

「ロゲイン……！」

こうして美咲は“音”という名の海を歩み、
アルニカは世界を包む“音”となり、
“音”を駆ける。

終曲：数々の贈り物を、あなたに（後書き）

本日まで読んで下さった皆様、大変感謝でございます!!!
第一章はこれで終了になります

本当になんちゃって思いつきストーリーが完成してしまい、私は楽しかったですが皆様は………という不安な感じですよ。

しかしながら第二章も考えています

完成、完結まで時間はかかると思いますが、続きを待つて頂いて、読んで頂けたら幸いです。

本日まで、本当にありがとうございました
また第二章をよろしくお願いいたします

〈間奏〉

美咲歩海は猫に遭遇した。

電脳世界ではなく、現実世界で。

とある日曜日朝、まだ東京だった頃の名残がある隅田川でそれは起こった。

何故そんな所にいるのかというと、実家が近かったからである。寮に戻る彼女を遮った三毛猫。

彼の名はホームズ。

何故こんな名前がわかったかというと、首輪をしていたからだ。よほどの放浪猫なのか、革の首輪には携帯番号まで彫ってあった。美咲は携帯を取り出した。

いつもはこんな優しい事はしないのだが、今日は気分が良いらしい。しかし、三毛猫ホームズは美咲のルーズソックスに身体をすりよせてきた。

電話してほしくないのだろうか。

やけにブニブニしている、年寄りで太っているようだ。

「何、帰りたくないの？言わないと一生帰れないぞ？」

ホームズはゴロゴロと鳴いた。

するとバタバタと少年が走ってきた。

「ホームズー！ー！ー！！！！」

少年はわりと速く、すぐに美咲の前に着いた。

美咲はちらとホームズを見た。

「飼い主？」

「そう！いつもここら辺に逃げるんだ！ありがとっお姉ちゃん」

「いいわよ、毎日こんなことを？」

少年は嬉しそうに頭をかいた。

ホームズが少年にすり寄った。

少年はホームズを抱き上げた。

小さく「よいしょっと」が聞こえた。

「っーかまえた！」

少年は毎日家を抜け出すホームズを捕まえに行っているようだった。彼らにとつてそれは“かくれんぼ”らしい。

美咲はそれからも時々ホームズと少年を見かけるようになった。

彼女が少しだけ、微笑む瞬間だった。

～間奏～（後書き）

第二章は7月上旬予定です

序曲：喧嘩無視の青年（前書き）

俺はいつも一人だ。

周りにはわざわざ好んで近づかない。

恐いから。

世界のはしっこで一人座り込んで、流れる人の波を見る。

周りには何も寄り付かない。

空気さえ、微生物さえ、細菌さえ、寄り付かない。

だから風邪さえひいたことない。

そこに入った奴はもがき苦しんで死ぬ。

恐れられて、道を全て決められて、未来を勝手に決められる。

だから何も来ない。

何も無い。

だから俺は、夜に逃げた。

気ままに歩いて、いつぱいに背伸びをして、自由になる。

世界のはしっこで俺は少しの間、自由になる。

でも退屈なことに変わりはない。

時計を見ていると退屈を実感する。

だからあまり見ない。

全く面白くない。

夜の自由も、どうせ一人だ。

そんな夜。

俺は正義のヒロインに出会った。

小さな、お姫様に。

序曲：喧嘩無視の青年

突然ではあるが、最近ぶっちゃけ暇だ。

ため息を無限につける。そして時計の秒針を真っ黒な瞳が追う。刻々と1日の終わりが近づく。

午前10時32分。

俺はあるレストランの窓側の席に座っていた。

テーブルの上には食べ終わったハンバーグの皿と半分残った水のグラス、そして真っ白無回答の宿題プリント。

「なんか面白いことないかなー」

と言った瞬間、外で大きな爆発音がした。

でも気にしない。

面白くない。

何か、もつと面白いことはないかな。

黒いノートパソコンを開き、電源を入れる。

そうしている間にレストランにいた客は外の爆発を見に行った。

こうやって野次馬というものができると。

そんな馬鹿には付き合ってられない。

もつと簡単に知ることができる。

パソコンの起動が完了すると俺は指をキーボードの上で滑らせていく。

たしか監視カメラがあったな。

と思いつつながら、パソコンの画面にはレストラン前の爆発現場の映像が映された。

「ほらね」

野次馬になんてならなくても状況を知ることができる、と鼻で笑う。どうやら一人青年が暴走したようだ。

珍しくも黄緑色の髪をして、左の額に二つ丸い傷がある。

血が少し流れていて生々しい、かつ痛々しい傷だった。

……………あんまり面白くない。
日常茶飯事だ。

俺は映像を閉じ、パソコンを閉じた。
すると後ろの席で誰か立った。

ちよつど真後ろに背中合わせだったので振動が伝わった。

「うるさい」

という小声と舌打ちが聞こえた。

レジに向かったのはセーラー服の少女だった。

黒に近い桃色の髪を少し二つに結び、それなりのスカートの短さ、

白いルーズソックス。

「止めときなよ」

少女は俺の声に止まった。

振り向いた顔は幼げで、吹き出しそうだった。

「何で」、というかと思えば、桜色の地味なメモを取り出し、何か書いた。

「何で」

喋れないのか？

……………何でって、そりゃ。

「すぐに警察来るし、あんたが行かなくても」
言葉を切った。

少女はレジにちよつどの金を置いて店を出た。（のだらう）

俺の前にメモが一つ。

何で、は二重線で消されていた。

「そついった傍観者大嫌い」

初対面に嫌われた。

今日は血液型占いできつねさん一位だったのにな。
面白い。

*

*

午前10時38分。

椿乃峰学園女子高等部一年、美咲歩海は鬱陶しい野次馬を前に片足で思い切り地面を踏んだ。

美咲のいる地点から波紋のような衝撃が広がった。

まるで地面が水面になったかのように揺れた。

野次馬が一斉に道を開けていく。

美咲が中心へ進もうとした瞬間、見慣れない青年が勢い良く彼女とぶつかった。

思わず尻餅をつく美咲を横切り、青年は人の海へと消えていった。はずなのだが、青年の周りから人が一気に退いた。

黒いワゴン車が何台か止まり、武装した電子警察が次々と銃を構えた。

彼は嘲笑うかのような顔で、片足で思い切り地面を踏んだ。オレンジのレンジが畳がバリバリと割れ、地面に亀裂が走った。

野次馬が悲鳴とともに亀裂を避ける。

ワゴン車のガラスも割れ、警報を鳴らす。

美咲は立ち上がり、青年の様子を改めて伺う。

ワゴン車から一人、白衣姿の女性が現れ、青年に近づいた。

「さっさと来なさい、あまり手間をかけたくないのよ。」
「失せる」

眉間にしわを寄せた青年は少しふらつき、じつと女性を睨み付けた。美咲は考えた。

今、この野次馬ばかりの路地で、先ほどの地割れの何かと銃乱射の戦争が始まったら、大変な被害になる。

いや、それどころではない。

おそらく一般人を大いに巻き込む大戦争が始まってしまう。

そのうちに白衣の女性は武装した電子警察に撃つ合図を送ろうとしていた。

青年も身構える。

「そこまでエ!!!」

その怒鳴るような大声は野次馬と戦闘体勢の彼らを完全静止させた。黄緑青年は面倒くさそうな眼で、美咲は馬鹿を見る眼で、遠くにいる黒髪青年は傍観者気取りの眼で声の主を見つめた。

白いＴシャツに筋肉のついた褐色の肌、よく磨かれた白い歯をきらりと輝かせ、彼は電子警察の前にどっかりと現れた。

坊主と短髪の間のような髪が自然に茶色く見えるのはおそらく日焼けによるものだろう。

何故かその肩には足腰の悪そうな老人がちょこつと乗っていた。

「何の騒ぎかは知らんがこのご老人は道を通りたいのだ!」

肩から下ろされた老人はゆっくりと礼をし、ゆっくりと人混みへ紛れていった。

「お前達!何をこんなに騒いでいるのだ?!」

それ以前にお前誰だよ、と美咲は内心つつこんだ。

すると、

「オレは露木光!」

何わざわざ自己紹介してんのさ、と黒髪青年が内心つつこんだ。

「誕生日は8月4日だ!」

誰も聞いてねエよ(失せる)、と黄緑青年が内心つつこんだ。

「箸の日だ!」

「知るか!」

その場にいた野次馬が声を揃えた。

その調子でごちゃごちゃしてきた現場で、美咲は一瞬で黄緑青年のか細い腕を引いた。

一般人が邪魔で撃てない彼らを背に二人は野次馬の海を抜けた。

「テメエ何者だ」

「あんた逃げなさい」

黄緑青年は未確認物体を見るように眉間にしわを寄せた。

「実験台の気持ちはわかるから」

「テメ……！何わかったようなく」

連続した銃声、電子警察の一人が野次馬を抜けたようだ。弾はこちらに一直線だった。

美咲はスカートにあるカラビナポーチから音叉を取り出そうとしたが、間に合わない。

しかし、鈍い金色の弾丸は青年の前に立っていた美咲の目の前で止まった。

というより、水に入ったように遅くなり、ふわりと浮いていた。弾丸はすぐに音をたてて地面に落ちた。

撃った電子警察はとてつもなく動揺している。

美咲はとにかく青年を逃がすべくちらと振り向いた。

「悪さしたら私が潰しに行く」

「ケツ！やってるボケが」

そう呟いた青年は町の向こうへ走っていった。

それと入れ替わるように声が飛んだ。

「その自転車新品なんだけど、弾が一発でも当たったら弁償しろよ？」

レストランから黒髪青年が大きめのバッグを下げて歩いてきた。

「お前！……じゃあ今の弾丸は」

「俺」

美咲は自転車に跨る青年のハンドルを止めた。

先ほどの電子警察がまた撃とうとしたので、震わせた音叉を投げて銃もろとも手を壊した。

彼は悲痛な叫び声をあげて跪いた。

「わーお」

美咲は鼻を鳴らした。

「で、お前何者？」

「あ、俺？んー……宿題やりにきた高校生。進まなかったけど」

「誰がんな事聞いたんだよ」

青年は顎に手を当て、美咲を見つめた。

黙ること3秒、美咲は耐えられなかった。

「なんか喋れ」

「うむ」

青年の手が美咲の手前に伸びた。

美咲が抵抗する間もなく彼の手は右のリボンを解いた。

リボンは地面に落ち、結ばれていた美咲の髪は肩下に垂れた。

片方だけアルニカヘアだった。

「ちよつ……！！」

「おそらく両方下ろすと……」

「黙れこの野郎……！」

美咲の顔はみるみる真っ赤になり、隠すようにだらりと垂れた髪をぐしゃぐしゃと手中に収める。

青年は薄ら笑いしてペダルに足をかけた。

「襟澤称。あんたは」

「みつ……美咲ああ歩海！」

動揺する美咲を笑いながら青年襟澤は自転車をこぎはじめた。

美咲は彼の背を見ながら地面に落ちたりリボンを拾った。

「何だあの野郎め」

「誰のこと？」

背後で白衣の女性が囁いた。

振り向くと野次馬達が全員倒れていた。

「一体何を……！」

「少し寝てるだけよ。あーあ、全く！せっかく見つけたのにまた振り出しね」

女性が合図をすると電子警察は次々にワゴン車に乗り込んだ。

美咲の目は女性が首に下げる社員証を確認し、舌打ちした。

「あなた研究所の人？町まで荒らして何やってんの？」

「あーら、あれが悪いのよ？ご主人様の言う事聞かないから」

美咲の微かな歯ぎしりが聞こえた。

「人間を物扱いすんじゃないわエー！」

彼女の怒鳴り声は全ての電子警察を倒れさせ、女性に耳を塞がせた。しかし女性は鼻を鳴らし、美咲を片手で突き飛ばした。

バランスを崩し、座り込む美咲に彼女は背を向けて歩きだした。「何その台詞。そんなにあの実験動物が気になる？ま、これからなんとしても捕まえるから失礼するわ」

吐き捨てるように言われた美咲は歯を食い縛ってワゴン車で遠ざかる女性を睨んでいた。

しかし、その緊張感があっさり抜け、すぐ地団駄を踏んだ。

「あり得ない！いざって時に何にもできてないじゃない！」

午前10時50分。

美咲はその後、イライラしながら救急システムを呼び、その場を去った。

この時は予想なんてしていなかった。

この30分にも満たない出来事が、長い一日を引き起こすきっかけになる事。

*

*

最近、あるオンラインゲームが流行っているらしい。

暗号解読をしながらゲームを進めていくロールプレイングゲーム。

最初は小学生でもできるなぞぞだったりするのだが、段々それは大人でもわからなくなってくる。

しかし、一度でも間違えると罰ゲームが表示されるらしい。

罰ゲームが実行されない場合、その接続端末に大量のウイルスが送り込まれ、再起不能となる嫌なゲームだ。

にもかかわらず、人々はこのゲームに参加してしまう。

そのため、今再起不能になる端末が続出している。

誰もが問題を解けず、罰ゲームをハツタりだろつと実行しないのだ。

専門家は言う。

これは、花柳内の“ハツカー”がつくったものである。

序曲：喧嘩無視の青年（後書き）

皆様お久しぶりです。

第二章開幕です！

また喧嘩です。

よろしくお願ひします

第一楽章 1：調査開始？（前書き）

はたまた紹介ページです。

襟澤称

どこかの高校生。

宿題をやりによくレストランに出没するらしいが、結局進まない。
嫌いなのは退屈な時間。

好きなのはパソコン。

4月に自転車を吹き飛ばされたらしく、新調したばかりのようだ。

第一楽章 1：調査開始？

午後10時59分。

美咲歩海ことアルニカはピンクの傘をさしていた。

電腦世界は本日、雨。

混沌とした青い世界が広がっている。

雨粒が現実世界より大きいため傘が必要なのである。

アルニカの桜色の服も全く映えない。

大きくため息。

「何もなかったかのように平和ね」

「平和つてのは当たり前にあるもんじゃないんだぜ？」

アルニカは辺りを見回し、嫌な予感で傘下を見下ろした。

真つ黒な猫が身体中の水滴を身震いして弾き飛ばしていた。

「クロちゃん、人の傘に勝手に入ってんじゃないわよ」

「いーじゃん。それが抱っこでもしてもらえ……ブツ!!」

アルニカは片足でクロを踏みつけた。

しかし、その足は珍しくすぐ上げられた。

「あ、そうだ！会ったら聞こうと思つてたの」

「……何を？」

アルニカはクロをひよいと抱き上げた。

傘を肩にかけて二人分の雨を凌いだ。

「最近変なオンラインゲームが問題になってるの。あんたつくつた？」

クロは首をかしげた。

中身は男性だがやけにかわいらしかった。

「俺がそんなことするわけないじゃん？」

「だって作り手はハッカーだろうって……」

クロが小さな口でため息をついた。

「だから、ハッカーは尊敬すべき人！俺はあんな悪用はしない。…

……つておお俺はクラツカーなんかじゃないし?! 他人事?!」

クロはじたばたしながら無罪でも主張するかのように叫んだ。

「うん、もう白状なさい。天才クラツカーさん?」

「え?..... いやあ、そんなあ..... はい、わかりました」

数秒間にかかなりの葛藤があったようだが、クロはやっと自分がクラツカーであると白状したようだ。

アルニカがホツとした顔をしているのでクロがまた首をかしげた。

大粒の雨はまだ降り続き、アルニカの傘をボタボタと打つ。

「じゃあ、敵はあんたじゃないのね」

「何、心配してくれたの? 嬉しいなあ〜正義のヒロインに心配さ...

.....ゴツ?!」

「...あら、手が滑ったわ」

アルニカはクロを持つ両手をパツと放した。

もちろんクロは勢い良くしりもちをつく。

普通の猫なら大変なことに.....がしかし、クロは電腦アイコンなので多少の痛みで済む。

すぐに四つ足で立ち上がり、アルニカが傘を持ちなおすとその傘下に収まった。

「クロちゃんはゲームしたの?」

「まさか、紛い物クラツカーの不正ゲームなんてするかよ」

そんなものするくらいなら自分で作ります、と付け足した。

が、クロが口を開けたまま固まった。

アルニカは不審に思い、クロの視線の先を眺める。

「隠れるぞ」

「何で」

「アレはヤバイ」

クロの視線の先には桜通りのメインロードがあった。

やけに騒ついている。

よく見るとアイコンが一つ苦しそうにもがいていた。

周りのアイコンがそれに足を止めていた。
アルニカがそれを放っておけるわけもなく、すぐさま向かおうとした。

クロは咄嗟にアルニカの前に立ちはだかった。
とはいえ小さいのでそうには見えなかった。

「何よ？このままログアウトしなければ死ん……………」

「いいから近づくな」

クロはアルニカを止め、もがき苦しむアイコンを見ながら言った。

「あれが、オンライン罰ゲームの様子ってやつだ」

アルニカは言葉を失った。

アイコンはすぐにログアウトし、周囲のざわめきだけが残った。

今の罰ゲームであるアイコンは、二度と同じアイコン（同じくパソコンなどの端末機）で電腦世界には入れない。

なんとも恐ろしい罰ゲームだった。

*

*

午前6時30分。

大きな窓から強い日差しが射してきた。

美咲歩海は珍しく、既に制服に着替えていた。

部屋を後にし、食堂で食事を済ませ、寮を出ていた。

芝生を踏まないようにしつかりレンガ畳の上を歩く。

ちよつと寮長の篠原ことはが水まきをしているところだった。

「ん？美咲、随分早いな。明日は雪か？」

「おはようございます、明日は晴れです。テレビくらい見てくださ
い」

美咲は篠原の前で止まった。

篠原も水まきのホースを置き、蛇口を締める。

芝生や花が雫を落として光る。

「どこ行くんだ？」

「図書館」

「今日休みだぞ」

「嘘?!」

美咲は三秒ほど硬直し、すぐに首を振った。

篠原は笑って、またホースを手に取った。

「調べ物でもあるのか？教えてやるぞー」

「……………」

「ホントはどこ行くんだ？」

「……………」

美咲は白状した。

「桜通り」

何故なら、昨日オンライン罰ゲームがあった現場だからだ。

何かヒントはないかと思うわけだ。

しかし、アルニカが白昼堂々桜通りに出没するのはまずい。

言葉では言い表わせないくらいまずい。

というわけで。

アイコンを買おうかと、外出したい。

なんて言えるわけもなく、美咲歩海のまま桜通りへ繰り出すつも

りだった。

「そういえば昨日アイコンが一つ再起不能になってたな」

それ！調べたいのはそれです！と美咲は内心叫んだ。

「もう生徒会が行った後だからなあ、何もないかもな」

「でも行きたい」

「意外とアンテナ網が広いんだな？なんか収穫あったら教えてよな、

行ってこい！」

笑顔で手を振る篠原に美咲は一礼した。

芝生は踏むなよ、と投げ掛けるような声が飛び、美咲はレンガ畳を慎重に歩いた。

よし、行くぞ桜通り。

と思った瞬間、間の抜けた声が美咲を呼んだ。

「アッルミーン!!!」

美咲が振り向くと、胸あたりまである黒いゆるく巻かれた髪をふわりと浮かせ、満面の笑みを浮かべた女子高生が美咲に飛び付いていた。

大きな花のついたカチューシャも風に揺れる。

蓑輪なぎさ。

彼女の名前である。

出席番号が隣の陽気な風紀委員である。

今日は休みなのか、腕章がなかった。

「どこ行くのー?」

「関係ないじゃん。」

「聞くだけならいーじゃん!」

とにかく美咲は腹に抱きつく蓑輪を引き剥がした。

桜通りに向かって歩きだした。

蓑輪が三歩後をついてくる。

「買い物ー?」

「違う」

「じゃー付き合って」

美咲は足を止め、振り返った。

蓑輪が拝むように両手を合わせて頼んだのは、友達の誕生日プレゼント選びだった。

友達は病院にいるらしく、お見舞いも兼ねてとのことだった。

美咲はため息まじりに承諾、桜通りのモールに向かった。

その後、蓑輪は桜通りのあらゆる店を周り、5時間かけてプレゼントを選んだ。明日お見舞いに行くようだ。

「アリシアっていうの。スウェーデンの生まれでー……………」
と夕方まで小話（一方的）は続いた。

別れた後、美咲は小さなため息をついた。

夕焼け色の空は町を照らし、行き交う人をも染め上げていた。

「随分遅いスタートね、美咲さん？」

「?!」

美咲の落胆する肩を叩いたのは、彼女と同じ学校の生徒会書記である芦屋千代だった。

「どうせオンライン罰ゲーム調べてるんでしょ？そういった事に首を突っ込むのが得意みたいだから」

「そういった事に首を突っ込み済みの先輩が何やってんの？………
………でしようか」

一応芦屋は先輩だ。

芦屋はよしよし、とうなずいた。

「コーヒーでも？」と芦屋は美咲を誘い、美咲も「おごりなら！」とついていった。

自動販売機を見付け、缶コーヒーを二つ買つと美咲に一つを手渡した。

「そろそろ暑いじゃない？だから冷たいの買ったわ」「で？何かわかったんですか？罰ゲーム」

芦屋がニヤニヤしながら語り始めた。

わかっているのはニュースに流れているものとほぼ同じ。

生徒会で今日わかったのはゲームを作った端末がある地区。

葵通りとまではわかったけれど、主に住宅地だから特定はキツイ。

「一件ごとにはキツイでしょ？」

美咲はうなずいた。

花柳はネットワーク管理都市であるため、最低でも一家庭に一つはパソコンがあり、9割以上が携帯電話と個人アイコンをもっている。つまり、住宅地なら家を全件回ることになる。

「今日の収穫は以上ね。何か質問は？」

「……話していいんですか？」

美咲は一番基本的で素朴な疑問を投げ掛けた。

彼女は花柳を守る生徒会、美咲はアルニカであることが秘密なのでただの一般人である。

捜査内容は秘密のはずが、芦屋は完全に流している。

「いいのよ、まだ大した情報じゃないし。でも美咲さん、あんなゲームに引っ掛かっちゃダメよ？被害者として会うの嫌だし」

「何で」

「なんか笑っちゃいそう」

何をう！と美咲が芦屋に怒りをぶつける。

その後、暗くなってから恐る恐る帰った所を寮長篠原にこっぴどく叱られたのは、言うまでもない。

*

*

外は午前8時頃。

しかし部屋は真っ暗で、パソコンの青白い光だけが部屋を照らす。

今度はどんな罰ゲームにしようかな。

だいたいがやらずにログアウトするハメになるけれど、助かろうと必死に罰ゲームを実行しているのを見るのも楽しい。

誰か、最後まで解いてくれないか。

最後の暗号を、読んでくれないか。

私には読めないんだ。

応えてくれ。

愛しい人よ。

第一楽章 2：仮面の少女（前書き）

露木光 （つゆのきみつる）

花柳大学生。

ものすごい体力の持ち主で、その実力はムキムキの容姿からも証明できる。

パソコン関係はそこまで詳しくなく、勉強を始めるも、既に行き詰まっているらしい。

第一章 2：仮面の少女

午前0時10分。

アルニカは散歩と称して深く、青い電腦世界を駆け回っていた。小さな弱いウイルスを次々と蹴散らし、ふとため息をついた。

「一応見に行ってみますか、梅通り」

「何で？」

アルニカが見下ろした先にはクロがいた。

ここまでくるといるのが当たり前になつてくる気がする、と思った。

「ああー、ちよつと調べた結果よ。ゲーム発信源がそこなんだって」「家ばつかできついな。俺が特定してやるうか？」

そんなことができるのか、とアルニカは隣にぺたりと座った。

クラッカーに出来ないことはない、と誇らしげに言った。

そして2秒後に多分、と付け加えた。

アルニカが次の言葉を遮るように手を叩いた。

何か思い出したようで、右手を前に出す。

「今日買ってきたんだ、クロちゃんには効くかなと思って」

手に持ったのは桃色の猫じゃらしだった。

クロの目の色が一瞬だけ変わる。

アルニカがニヤリとしたのでクロはすぐに首を振った。

アルニカは猫じゃらしの穂先をクロの顔に近づける。

「そんなものっ！」

「やつぱり好きなんだ。これは現実世界でも効くってことだよね？」

クロはぐつと目を瞑って堪えていたが、やがて猫じゃらしに襲い掛かってきた。

アルニカが声を高らかにして笑った。

クロは猫じゃらしを追わずにアルニカを見てきよとんとした。

その頬に一筋の涙が伝っていたからだ。

「……………こんなに笑ったのは初めてかも！」

「お前さ……」

涙を拭うアルニカの顔は、いつの間にか嬉しそうな泣き顔になった。クロはアルニカの前でちょこんと座った。

「笑ったこと無いのか？」

クロはどこか悲しげなアルニカを見ていた。

新聞やニュースには絶対見せない表情だった。

「大笑いしたりとか……その……」

アルニカはクロに笑って返した。

「無いよ。鼓膜を破っちゃうから」

音波を扱うアルニカが、美咲が人前で笑えるわけがなかった。

小さな頃、コントロールができなかった音波で何度も人を傷つけてきたからである。

ましてや、人と話すにも耳栓という壁がある。

少し前に全ての感情の音波が人を傷つけているわけではない、と芦屋が言ってくれたが、美咲にはまだ抵抗があるようだ。

もちろんここは人気のない町の裏。

誰も来ないし、クロ以外にアルニカの笑い声を聞く者もない。

「笑って」

「？」

クロが呟いた言葉にアルニカは目を丸くした。

3秒後、クロが焦ったのが見て取れた。

「ほら……その、笑わないと顔の筋肉衰えるからな！一生動かなくなるぞ?!」

アルニカはクロの懸命な言い訳にまた小さく笑った。

「あら、こんなところで何してるの？」

二人は魔法でもかけられたかのように固まってしまった。

振り向いた先には藤色のポニーテールを揺らすウイステリアが立っていた。

「げ、生徒会じゃねーか」

「何って、散歩」

さっさと帰るようウイステリアは命令したが、アルニカは逆に質問してきた。

「あんたは何しにきたの？」

「私が言うと思うの？とにかくさっさと帰ってもらおうよ」

アルニカが音叉を取りだそうとした瞬間、少女の静かな声が辺りにこだました。

「夜分遅くに騒ぐのはどなた？」

アルニカはすぐに声がる方を向き、少女の姿を見た。

それは真っ白で、ふわっとした金髪以外は色がなと言ってもいいくらいに白い少女が立っていた。

というより、空から降り立った。

しかし、そのきれいで華奢な容姿なら必要無いであろうものがつけられていた。

顔を覆うように白い不気味な（テキストに描かれた）仮面がつけられていたのだ。

その場にいた3つのアイコンは完全停止、白い仮面少女を未確認生物を見る眼で見た。

声さえかけにくい。

すると少女が小さな両手を顔にあて、身を左右に振った。

「そ、そんなにみるでない！顔が火照ってしまっつ！」

うわ、馬鹿だ。

三人とも思った。

仮面をつけているのだから関係ないだろうに。

しかし、この少女は一体どこから来たのだろうか。

アルニカが恐る恐る声をかけた。

「あ……あの」

「何だ？ピンクの出来損ないマリモ」

「マッ………！？」

たしかにふわっとショートで丸く見えますけど、その言い様は問題アリなのでは？とアルニカは考えるのに必死で硬直してしまった。

「嘘よ 私はジュリ。いきなりごめんなさいね、でももう遅いから
帰りなさいな」

ウイステリアがその言葉に反応する。

「いや、私は調べたい事が…」

「帰りなさいな」

ジュリの声が少し低くなった。

クロはジュリをじっと睨みながら返答した。

「帰るぞ」

アルニカとウイステリアはクロをまじまじと見た。

アルニカはクロの分かりにくい（何故なら猫だから）表情を察し、

従った。

仕方なくウイステリアもその場でログアウトした。

誰もいなくなつた暗がりの梅通りのメインストリート。

ジュリは不気味な仮面の下で安堵の息を漏らした。

*

*

午前0時31分。

美咲は自分の真つ暗な部屋に戻ってきた。

緑色のオルゴールがカタカタと揺れた。

美咲は肩を上下させて大きく息をしていた。

何故なら、アルニカはいつでもどこでもログアウトできるわけでは
ないからだ。

寮の自分の部屋、つまりオルゴールがある場所まで戻らなければな
らない。

みんなの前では「ドロロンッ」としているだけなのだ。

梅通りから寮がある菊通りまでは距離があり、さすがに音速でも疲
れる、というわけだ。

赤い絨毯の上に座り、前の白いベッドに顔を埋める。
ベッドに置いてあった携帯電話が鳴る。
電話のようだ。

誰から、というのを見ずにだるそうに電話に出た。

「……………はい」

「もしもし、そろそろ着いた？クロちゃんだよ」

「切つていい？」

携帯電話がミシミシと音をたてる。

必死に、かつ棒読みでクロは切らないようにお願いする。

「あの趣味悪い仮面女のこと知りたくないの？いいなら切るけど」

「あ、それ聞きたい。てかあんたさっき初めて会ったのに何かわかつたの？」

クロはそれがわかるのが当たり前かのように語りはじめた。

「あの仮面女、無人だった」

美咲はすぐに聞き返した。

通常、アイコンはパソコンなどの端末に保存されている。

そこに五感と精神を繋げることで有人アイコンが完成する。

しかし、無人アイコンは人間の精神の代わりにそれぞれに合ったプログラムが入っている。

つまりはロボットである。

「でも彼女には感情があつたし、無人アイコンにはないはずよ」

「そこが問題」

無人アイコンにはもちろん感情はない。

プログラムでアイコンの全てが構成されているからである。

しかし彼女は、人々の視線に照れたり、声色を変えたりと、感情があつたのだ。

クロもその謎には唸った。

「自分のこと“ジュリ”って言ってたし、つけた人がいるはず」

「じゃ、そつちで調べてみますかね」

「……………できるの？」

できるよ、とクロはまた当たり前のように言った。

美咲は埋めた顔を上げ、少し間を置いて口を開いた。

「クロちゃん」

その声は少し沈んでいた。

「……………何？」

「……………何でもない。おやすみなさい」

美咲はクロの返事を待たずに電話を切った。

また布団にぎゅっと顔を埋める。

「……………どうして…？」

美咲はそのまま寝てしまい、翌日に大遅刻をした。

*

*

午後3時。

美咲は帰りの公園で足止めを食らっていた。

前には4、5人の女子学生。

同じ学校の先輩のようだ。

生徒が一人、腕を組んで仁王立ちした。

「お前が美咲歩海だな？うちのもんが世話になったみたいでな」

美咲は首をかしげた。

あの、と挙手する。

あん？と4、5人が首をかしげる。

「どちら様？」

「んだとコラア！？」

美咲は誰が世話になったのかさえ覚えていなかった。

女子学生の一人が舌打ちしながらだんだんつと地面を鳴らした。

「綿貫！テメエのクラスにいんだろーがよ」

「……………あー……………いたっけ？」

うおいつ!!

ちなみに世話になったのは文化祭で揉めた綿貫菜穂である。

今でも名前は呼びあわないらしく、人前で話すことはまずない。

「ま、知らなくてもテメエには落とし前つけてもらわなきゃな!」

女子学生らが拳を握りしめた瞬間だった。

「やめておけ」

太く聞こえた女性の声に彼女らの手が止まる。

美咲の背後から長く切り揃えられた黒髪を揺らした生徒がゆっくり歩いてきた。

短すぎるスカートから伸びる足はすらりと細かった。

女生徒らが急にかしこまり、深々と礼をする。

美咲が軽いため息をついた。

「お前が美咲歩海だな? あたしは昭島麗子。昭島組の次期組長だ」

「誰も聞いてないし、私帰ります」

美咲は公園の出入口に向かって歩き出した。

昭島の横を通りすぎた時、彼女は口を開いた。

「お前、美咲組の娘か?」

美咲の足が止まる。

「家に何かしてみろ」

昭島は美咲の背を眺める。

「その耳潰すぞ」

美咲はさっさと公園を後にした。

昭島は女子学生らを止め、誰もいない出入口を見つめた。

「何故ですか!」

「良い。あたしだって奴の組には逆らえない。あの美咲歩海は花柳の天下、美咲組の娘だ」

女子学生らが揃って言葉を失った。

第一楽章 3：初めての（前書き）

綿貫菜穂（わたぬきなほ）

美咲のクラスメイト。

今現在は昭島組。

長い金髪は毎日朝シャンプー、そしてトリートメントを欠かさない彼女の努力の結晶。

少しでも汚されるとキレるらしい。

第一楽章 3：初めての

午後3時26分。

美咲は帰り道をそれて葵通りにいた。

電話をかけていた。

「もしもし、お母さん？歩海」

すると電話口から陽気な声が飛び出した。

「おー！歩海！どうだ？学園生活は」

「順調。あのさ、最近何かあった？」

何故そんなことを聞くのか、という口調で何もないと返ってきた。

美咲はホツとしたように目を閉じた。

「じゃあ何でもない。急にごめんなさい」

「いや、いいけどさ。なんか困ったらまた電話しなね」

またね、と言葉を交わして電話を切った。

肩を落とし、大きなため息をついた。

「何かあった？」

「？…あ、この前の」

美咲が顔を上げると、黒髪の青年が彼女をのぞきこんでいた。

青年は眠そうな目をして美咲を見つめた。

「なんだ、喋れるんだね」

美咲はまたため息をついた。

「人の顔見てため息つくとか呪われるぞー」

「誰にだよ」

「俺に？」

美咲はさらにため息をついた。

青年を横切つて帰り道に戻ろうとする。

するとそれに合わせて青年が美咲の隣を歩いてきた。

すぐに美咲が青年の足を（わざと）踏んだ。

青年の悲鳴。

「ついてくんな。気持ち悪い」

「今日は占いで3位だったのに気持ち悪いって言われたー。しかも赤の他人に」

「赤の他人ってわかってんなら寄るなよ。てかその占い当たんないな」

「いや？占いが当たらないのは知ってるさ」

なら何故見てるのか、と美咲が聞くと青年は人差し指を突き立てて言った。

「面白いから」

美咲はもう聞いているのに嫌気がさした。

「あのね、私そんなに暇じゃないから。お前もさっさと帰れ」

「さっきから何で小声なわけ？」

「鼓膜破つてもいいなら音量上げますけど？」

美咲は帰り道をすたすたと歩いた。

青年はまた隣を歩く。

「なーなー」

「しつこいぞ、赤の他人め！」

「あんた最近流行りのゲームやった？」

美咲が足を止め、振り向いた。

それをちょうど調べている美咲が止まらないわけがなかった。

葵通りはカフェなどが建ち並ぶおしゃれな通りで、放課後を楽しむ学生がわんさかいる。

二人もそのうちの一組にしか見えない。

「何か知ってるの？」

「うん、簡単だからもうすぐラストステージだなー、って」

大した情報ではない。

むしろ、ただの自慢話ではないか。

「でひとつわかったんだ」

美咲は首をかしげた。

青年がニヤニヤしながら自慢するように、謎が解けたアマチュア名

探偵のように言った。

「あれを作った奴は一般人だ」

美咲がポカんと口を開ける。

そんなわけがない。

実際、その暗号は難しく、電子警察や生徒会もハッカーの仕業だと捜査している。

「じゃあ、あの問題は……」

「さあな。また考えてみようかな。暇潰しに」

と青年が言い終わった瞬間、美咲の携帯電話が鳴った。

耳に当てると怒鳴り声が出た。

「うおいつ！美咲！客が来てるぞ！早く帰ってこい！！」

即座に電話を遠く離れた美咲はまた携帯電話を耳に当てる。

「あの、もしもし寮長？すぐ帰りますから、お客さん待たせといて下さい」

電話を切った美咲は青年に急用が入ったと言って携帯電話を閉じた。

「んじやな」

「ん、何か、情報ありがとね」

美咲は音速で寮に向かった。

青年の髪がわずかに揺れる。

「……音速？」

* * *

午後3時53分。

美咲は寮がある庭に帰ってきた。

桜の散りきった木の下で、スカートの短すぎるクラスメイトが立っていた。

美咲を見るなり笑顔で手をふった。

「おーい、音姫！待ちくたびれたぞー！」

「そのまま干からびてりゃよかったのに」

美咲が彼女の前に立ってぼそりと言った。

待っていた客とはクラスメートの不良、綿貫菜穂だった。

長いサラサラの金髪をなびかせ、綿貫は白い歯を見せて笑った。

「なあ、音姫暇？」

「アイムノット暇」

綿貫が思わず吹き出し、腹を抱えて笑った。

美咲が寮に入ろうとすると綿貫もついてきた。

舌打ちして勢いよく振り向いた。

「だいたい、お前のいる組の昭島とかいう奴らが喧嘩ふっかけてきたし！お前何か言ったわけ？」

すると綿貫は目を丸くして驚いた。

「昭島さんが？あたしは何も言っていないけど」

「じゃ言つといて。喧嘩売るなら私一人に売れって」

「本当に何でも一人だなあ。なら喧嘩売らないように頼んどくよ」

美咲は腕を組み、視線を宙に泳がせた。

「それはそれでつまんない」

「じゃなくて、今日は遊びに来たんだ！友達にならね？」

美咲は言われたことのない言葉に口を開けた。

今まで友達やら遊ぶやらワードをかけられたことがなかったのだ。

クラスメートから発せられるだいたい頼みごとか悪口だ。

友達？

しかし口から出るのは心とは違った。

「却下」

「何でさ？」

「そもそもお前中途半端な不良でしょ？まして成績優秀な音姫が付
き合えないでしょ」

「んなことわかってんだ。だからあいつらとつるむのやめるんだ」

美咲は耳を疑った。

今までつるんでいたグループから抜け出すなら、確実に喧嘩になるからである。

綿貫は金髪をぐしゃぐしゃと掻いて笑った。

「昭島組、やめんだ」

「ちよっ…それこそ却下。ボコボコにされるわよ」

「昭島さんは許してくれたし。その下の人達がどうもな」

その後綿貫は言った。

初めてなんだ。

本気で友達になりたいと思ったの。

もし抜けられたら友達になってよ。

美咲は何も言えなかった。

* * *

午後5時37分。

夕焼けが町を染め、公園の遊具も重い影を帯びていた。

綿貫菜穂は砂の上でひざまずいた。

口の端からは血がにじみ、息も荒かった。

目の前には昼、美咲に喧嘩を売った生徒達が偉そうに綿貫を見下ろしていた。

「辞める？昭島さんが本当に許すと思ったのか?!」「勝手な奴はシメる。わかってんよなあ」

一人が綿貫の頬を蹴り、彼女は近くのベンチに頭をぶつけた。

綺麗な金髪に血がにじむ。

綿貫は叫ぶように言った。

「あたしは…絶対に抜けてみせる!」

その目からは、涙がこぼれていた。

椿乃峰学園は各推薦クラス、成績優秀クラス、通常合格クラスで分かれている。

なぜ成績優秀な美咲が通常合格クラスなのかはまた別として、綿貫は一年B組にて、成績優秀A組のお嬢様達と張り合っていた。

「あーら、やはり雑居房なだけあって頭の悪そうなクラスですわー」
茶髪の女子生徒とのお着き(?)が高笑いした。

その一言にクラス内全員がムカついたが、綿貫が堪えられずに罵声を飛ばしてしまった。

「テメエらそれだけいいに来たのかよ」

「あーら、やはり言葉もお下劣ですわー」

「さっさと帰りやがれ！」

またA組が高笑い。

綿貫が拳を握りしめ、殴りかかるうとした時だった。

「言うことはそれだけでしょうか」

美咲歩海が綿貫の少し前に立っていた。

綿貫の力強い腕を片手で押さえながら。

A組軍団の高笑いが止まる。

「あーら、貴方はオルゴールではありませんの？何故A組にいないのが不自然と噂の能力値トップですわね」

美咲は首をかしげ、声のトーンを下げた。

「ですから、言いたいことはそれだけかって言ったんだよこの能無し女」

美咲は殺意を思わせる笑顔を崩さずに言った。

さすがに引き下がり、茶髪の女子が帰り様にキーキーと言いながら帰った。

「覚えてなさい！こんな雑居房、この学園に相応しくないんですからー！！」

「申し訳ございません。負け犬の遠吠えにしか聞こえませんか」

さらにキーキー言いながら帰ったA組軍団の背を見つめ、ボソツと呟いた。

「バカ死ねッ……」

それを綿貫は聞き逃さなかった。

そして美咲はクラスに振り返り、小さな声で告げた。

「言つてやった」

そう言つた瞬間、B組の教室は歓声で沸き上がった。

お高く止まるお嬢様クラスを好む生徒がB組にいるわけがない。

自分たちをいつも馬鹿にしているからだ。

その後すぐに教室に先生が入ってきた。

A組のキリツとした眼鏡の先生である。

「うちのクラスの子が殴られたようなんですが、どなたですか？」

クラスが静まりかえった。

誰も殴つてないよね？

あの女嘘つきやがった

役者だな

などとクラスメートは次々に思う。

しかしそれを言えないくらいに先生は癩癩を起こしている。

気まずい雰囲気になったB組で美咲は手を挙げた。

「申し訳ございません。私が殴りました」

先生は目を丸くした。

「あなたが？」

意外な犯人だったのか、眼鏡を人差し指でキリツと直す。

「理由は後で聞かせてもらいます」

「あなたのクラスの方がこのクラスを“ガラクタ揃いの雑居房”と言つたものですから。自分のクラスの汚名を晴らすために手が出てしまいました。申し訳ありませんでした」

ちよつと付け足したアアツ！！

とクラス一同の心の声がこだまする。

先生は言葉を失い、職員室に来るよう告げた後、素早く教室を出て

いった。

クラスは一気にざわついた。

「美咲さん、何であんな嘘を」

「埒あかないでしょ。任しといて、先生の前でボコボコにしてやるからさ」

全員がうなずいた。

その後、美咲は職員室へと向かった。

何があったのか、その先は知らない。

ただ、帰ってきた時に美咲は勝ち誇った笑顔で、茶髪の子は泣いて帰ってきた。

綿貫は美咲を純粹にすごい奴だと思った。

それをつるんでた他の女子達は両手を叩いて、面白可笑しく笑った。許せなかった。

もうすぐ日が落ちる。

綿貫はもう立つ力がなかった。

「絶対……友達になるんだ!!」

「柔なこと抜かしてんじゃねーぞこの野郎が!!」

女子達が殴りかかるうとした時だった。

「確かに柔ね」

綿貫の前で女子達が一瞬で吹き飛ばされた。

一人の少女が片足づつつ着地する。

砂ぼこりが舞い、ピンクのリボンつきワンピースに黒のスウェットズボンという不恰好な姿で美咲歩海が公園に現れた。

「でも私の友達ボコボコにした落とし前はきっちりつけてもらうからな!!」

第一楽章 4：プライド？

午後5時11分。

美咲の携帯電話が鳴った。

メールのようだ。

美咲は自分の部屋にいた。

芦屋にもらったピンクのワンピースを着て、ドレッサーの前に座っていた。

風呂上がりで髪はおろしてアルニカヘアになっていた。

「どうしよう………いいえ！友達なんていないし?!……」

美咲は考えたこともなかった。

自分と友達になりたいという人間がいるなんて、と。

美咲は鏡に向かって自分に言い聞かせるようにボソボソと喋っていた。

しばらくすると口が止まり、携帯電話を手に取った。

メールは芦屋からだった。

ヤッホー！

びっくりした？

ちーの友達の神宮愛里沙だよ

今ね、近くの公園で喧嘩見かけたよ

あたし学校中の人間熟知者だけど、美咲ちゃんのクラスじゃない？
って報告

美咲はゾツとした。

綿貫かもしれない。

ドレッサーから素早く離れ、黒短パンをワンピースの下に履いた。

着替えている場合ではない。

こんなことは生まれて初めてかもしれない。

人のためにわざわざ喧嘩を買いに行こうとしているのだ。

今さら二つに結び直すのは面倒なので、垂れ下がった二つの髪の毛を後ろで一つに結わいた。

ハッとして電話をかけた。

相手はすぐに出た。

「く、クロちゃん？ああああの！今日散歩がで、できなくて」

「……………もうちよつと落ち着いて喋ってくださいます？正義のヒロインさん？」

かけた相手はクロだった。

喧嘩をしに行くのだから、アルニ力になって散歩ができるわけがない。

「えと、クラスメートが喧嘩してて、その…」

「ん。いつてらっしゃい」

美咲は意外と早い返答に言葉が止まった。

クロは続けた。

「助けに行くんだろ？一応ヒロインなんだから顔気を付けろな」

美咲は相手には見えていないのに何度もうなずいた。

「うん、いつてきますす！！」

電話を切った美咲は勢いよく扉を開けた。

「ぎゃっ！…」

ぎゃっ？

美咲は恐る恐る扉の向こう側を見た。

白に青のセーラー服に黒のスウェットズボンを履いた箕輪が倒れていた。

混乱したようで、頭上にヒヨコが見えた。

「あつねー、アルミン今日はセクシーだねー」

たしかに美咲の格好はピンクのリボンつきワンピースと黒のピタッとした短パンである。

他と比べれば短い足も露出し、裸足にスニーカーを履いている。美咲が顔を少し赤らめた後、自分が急いでいることを思い出す。

「箕輪、今急いでるから」

「ん？喧嘩でもすんの？」

そうよ、と美咲が鼻を鳴らすと、箕輪は壁伝いに立ち上がり、スウエットズボンを脱ぎ始めた。

美咲はもちろん止めに入る。

ズボンの下がパンツだったからである。

白い肌に映えるブルーのレース仕様だった。

スウエットズボンを美咲に差し出す。

「履いていきな？そんな可愛いと襲われちゃうよ？」

「ちよつと！お前こそなんで……あー！！せめてこれ履きな！」

美咲は顔を真っ赤にして部屋から制服のスカートを持ってきた。

ふんわりとお礼を言われ、互いにその場でズボンとスカートを履いた。

「アルミン、明日遅刻しない程度になー」

「わかってるよ。……ありがとう」

美咲は箕輪を置いて走り出した。

音は町を飛び、公園へと走り抜けた。

全ての景色が見えないくらいに流れ、夕焼けを裂いた。

たくさん音が美咲の耳に入る。

「絶対………抜けてみせる！」

「柔なこと抜かしてんじゃねーぞこの野郎が……！」

いた。

美咲は降り立った。

ちょうど綿貫の前だった。

昼に喧嘩を売ってきた女子達を音速で蹴散らした。

ぼろぼろの綿貫をちらと見ると鼻を鳴らした。

「随分なやられようね？」

「……………音姫！」

「美咲でいい」

綿貫はムスツとした美咲を見上げた。

「友達になるんだろ？綿貫」

今にも死にそうだった綿貫の目が少し輝いた。

女子達がふらふらと立ち上がり、次々に罵声を飛ばした。

もう空は暗く、公園に設置された電灯二つだけが両者を照らしていた。

「お前は美咲組の！」

「美咲組？」

綿貫が首をかしげた。

美咲組といえば、花柳中の組を一挙に牛耳る代表格である。

その娘なのか？

と綿貫はぐるぐると頭を回転させた。

「昼はお前らの頭が止めちゃったからね。これで邪魔者いないですよ」

美咲はパチンと手を叩き、音波を震わせた。

辺りの木々がざわめき、ブランコが揺れた。

「続きをしよう、覚悟しな！」

美咲が走り出すと、真ん中で一番偉そうな女子が片手で風を斬った。

美咲の腕を風が切り裂いた。

美咲は足を止め、舌打ちした。

「…能力者」

「その通り！あたしは鎌鼬よ」

そう言って笑うと、彼女はどんどん風を斬っていった。

身体中につけられた傷がさらに深くなる。

しかし、それを大きな音波が一掃する。

「何……全員雑魚つてことでいいの？」

美咲は片足を鳴らし、砂を渦巻かせた。

一瞬で消えた美咲を探しながら鎌鼬は風を斬り、探したそうとした。

「遅い」

鎌鼬の背後にいた女子達が次々と音波を込めた拳で殴られた。

その拳が鎌鼬に向かった時、音波が止まった。

頬を斬られたのだ。

うつすらと伸びた切り傷からは一筋の血が流れ出た。

「なるほど。他の振動で中和すればよく見えるな！」

「顔傷付けんなって言われてきたんですけど？これは更に落とし前

だなオイ」

二人は、いわばぶちギレ状態だった。

* * *

午後7時2分。

芦屋は部屋で大噴火していた。

前には土下座する神宮愛里沙。

芦屋の手には生徒会で忘れていった携帯電話。

「誰が勝手にメール使つていって言ったのよ！」

「そんな怒るなよちーちゃん」

「そして部屋が汚すぎる！今すぐ片付け！」

確かに部屋は脱ぎ捨てられた服や本、そして荷物で散らかっていた。

全て神宮のものだけである。

神宮は嫌な顔で口を尖らせた。

「だって、全部そこに置いてあるんだよ」

「どう見たってゴミ屋敷の始まりにしか見えない！少なくとも私の

ベッド周りくらいどうにかしなさい！」

神宮はブーブー言いながら近くの服を両手で抱えた。

芦屋はため息をつくと携帯のメールを見た。

「美咲ちゃんに喧嘩情報教えたんだ。友達だったみたいだから」

芦屋が驚愕しながら神宮を叩いた。

いい音がした。

「美咲さんを喧嘩させてどーすんの！場所は？さっさと教えなさいこのスカタン！！」

肩を掴まれ、ぐらぐらと揺らされた神宮は近くの公園だと白状した。よほど煩かったのか、風紀委員の安西潔子が扉を開ける。

「何の騒ぎじゃ……うわっ！！」

安西の顔面に枕が飛んできた。

二人は枕投げをしていた。

ストツクの枕まで参戦し、4つに増えていた。

まるで修学旅行の夜更かしの風景だった。

まともにぶつけた安西は真っ白な枕をぐっと握り締めた。

「お前達…何をしている！！」

芦屋と神宮の手が止まる。

投げたばかりだった枕が芦屋の頭を叩いて落ちた。

安西は魔女のような黒いローブを着ていた。

もう春だから暑かろうに……。

二人は笑顔をひきつらせて声を揃えた。

「やあ、きよちゃん」

「気安く呼ぶでない！何時だと思っておる！」

二人はきよとんととして時計を見た。

午後7時10分。

芦屋が拳手する。

「今の言い回しは夜中にするもんじゃ」

「このうつけ！もう私は就寝時間だ！」

神宮の身体中に鳥肌がたった。

今、7時ですよ？

夜はこれからですよ？

「寝ちやうの？」

次に言おうとした言葉を止めた。

眉間にしわをよせ、歯を食い縛る（マジギレ）安西が枕を振り上げた。

「私の安眠を邪魔するでない！」

柔らかい枕と言えど、ものすごい勢いで叩かれた芦屋と神宮は頭をふらふらさせた。

「次一言でも騒いでみる、殺すぞ」

彼女からは黒いオーラさえ見えた。

扉を乱暴にバタンと閉め、安西は出ていった。

二人はしばらく無言でその場に座っていた。

芦屋がハツとして、素早くカバンを持った。

「どこいくの？」

「美咲さんとか。大怪我とかしてたらどーすんの」

芦屋は静かに、少し警戒しながら部屋を出ていった。

* * *

午後7時10分。

美咲と鎌鼬のバトルは白熱していた。

お互いに傷だらけになり、風と音波の戦いが繰り広げられていた。しかし、美咲には限界が近づいていた。

両手のひらが血で滲んだ。

鎌鼬が声高らかに笑った。

「音波の使いすぎだ！私はまだまだ使えるぞ？」

美咲は舌打ちした。

今すぐやめるように綿貫が叫ぶものの、美咲が聞くわけがなかった。「大丈夫、お前に組としてのプライドがあるように、私にもプライドがある。風で飛ばされないように響かせてやる！見てるこのボケナスめ」

美咲は手を叩き、音波を発した。右手拳をぐつと握りしめる。

「いいかボケナス。私の友達志願者は正式に組から抜けようとしてる。勝手なプライドで邪魔すんじゃねえ！！」

走り出した。

鎌鼬が大きく風を斬り、見えない盾を作っていた。更に連続して斬ったため、盾は強いものになった。

美咲は拳を思い切り盾にぶつけた。

馬鹿げた行動に鎌鼬が大笑いする。

しかし、彼女の唸り声とともに風の盾に音がめり込んだ。

美咲が左手で風の裂け目をこじ開けた。

笑い声は一瞬で止まった。

「鋼鉄の音姫なめんなよ」

少しだけ開いた風の隙間から、右手拳のパンチが飛んできた。

風は美咲の服をヒラヒラさせながら止まり、鎌鼬は遠くの木まで飛ばされた。

気絶していた。

美咲が血のついた手でガッツポーズ。

「うおし、私の勝ちい……………」

美咲はマネキン人形のようにその場に垂直に倒れた。

綿貫が苦し紛れにも走る音、誰かが近づいてくる音、全てがこだまして、美咲は静かに眼を閉じた。

第二楽章 1：母、襲来（前書き）

遅れました、申し訳ないです……

第二楽章 1：母、襲来

午前6時46分。

目覚めの悪い鴉の鳴き声でゆっくりと眼を開けた。

公園ではなかった。

とてもふかふかで、起き上がると白い清潔な布団がかけられていた。そこら中に絆創膏や包帯などの処置がしてあり、ズキズキする頭を押さえた。

美咲歩海は山吹病院にいた。

能力者専用設備が成されている総合病院であるが、美咲には恐ろしい思い出があった。

時空領域の一件で不法侵入したのだ。

すぐさま出ていきたい美咲を引き戸の開く音が止めた。

「あら、起きたのね？良かったわ……………」

看護師の後ろから馴染みの面々が飛び出した。

「アツルミーン！」

美咲をきゅっ、と抱き締めに来たのは箕輪だった。

その後ろから芦屋と神宮が入ってきた。

「美咲さん？……………遅刻どころか欠席沙汰とはいい度胸じゃない」

顔をひきつらせる芦屋の後ろで神宮がひたすらごめんなさい、とジエスチャーをする。

メールがバレたんだ。

美咲はその事実を一瞬で理解した。

看護師はすぐにクスクスと笑いながら出ていった。

芦屋が美咲の前で腕を組んだ。

「ま、3日ほど安静にしてれば退院できるみたいよ。死ななくてよかったわね」

「心配のしの字もなさそうですね」

美咲が顔色一つ変えずに言うと、箕輪はブンブンと首を振った。

「でも救急車呼んだの芦屋先輩ですよー？」

「言うな！！」

芦屋が箕輪を軽く叩いた。

笑い声が響く。

美咲が少し微笑んだ。

今まで入院なんてしてもお見舞いに来る人がいなかったからだ。

来ても家族だけだ。

友達や、先輩が来るという初めての現象を前に、少しだけ幸せを噛

みしめているのだ。

そんな時、隣で一名、向かいで二名がゆっくり起き上がった。

隣は綿貫、向かいは鎌鼬と不良だった。

箕輪が綿貫を呼ぼうとしたのを二人の声が掻き消した。

「お前！！」

もちろん指差すのは美咲。

ポコポコにされたのだから。

美咲がニヤリとして中指を突き立てた。

芦屋が病人にも関わらず美咲をはたいた。

「全員の親にはしっかり連絡しておいたから」

「え?!」

「嘘?!」

「……………電話……………しちゃったか」

不良二名は驚いたただけだが、美咲は頭を抱えて落胆していた。

どうしたの？と芦屋が聞いても反応しない。

箕輪と綿貫があー、とうなずいた。

「アルミンのお母様恐いもんね」

「見たことねえが、お頭みたいだしな」

と噂をすれば、引き戸が開いた。

ただし、静かに。

入ってきたのは昭島組次期総長、昭島麗子だった。

「うちの者がすまなかつたな」

一気に不良二名が背筋を伸ばす。

綿貫がうつむいたので美咲は昭島に視線を向けた。

「綿貫に何を言ったの？」

芦屋達が青ざめる。

昭島は三年生である。

この病室では一番年上である。

なぜタメ口？と全員が思ったのだ。

昭島は鼻で笑い、薄ら笑いした。

「賭けをしたんだ。一週間で歯向かう奴を全員倒せたらとなあ。それが組を抜ける条件だ」

まだ抱きついている箕輪は美咲を見上げた。

何故かこちらを向いていた。

瞳がキラキラと反撃を待っていた。

苦笑いした箕輪はさっと離れ、芦屋、神宮に耳打ち、綿貫にジェスチャーした。

「耳を塞げ」と。

伝言が回った瞬間。

「ふざけんじゃねぞコラア！」

不良二名がまたベッドに倒れこんだ。

昭島が慌てて耳を塞いだ。

病院の警報が鳴り、看護師が耳を塞ぎながら入ってきたが、芦屋が

大丈夫ですと追い返した。

「お前の組の掟なんか知らない！お前らのお遊びなんかより、こいつの覚悟の方がダントツ上なんだよ！」

「こんな下っぱの覚悟？遊んで何が悪い！」

美咲が拳を握りしめた瞬間、引き戸がものすごい音を立てて開いた。

黒に赤い牡丹の柄の着流しの女性がすたすたと入ってきた。

金の帯は輝かしく、長い黒髪をかんざし一つで結び上げていた。

髪がどこか桃色に近く、美咲と似ていた。

昭島の腹に蹴りをいれ、美咲のベッドの前に立った。

美咲がいつになく怯えた様子で、「おか」と言っただとところで女性に勢いよくビンタされた。

室内でビンタの音が響く。

全員が氷のように固まった。

音姫にビンタした。

喧嘩買いの少女にビンタした。

この女何者？

てか、誰？

それをお構い無しに女性は怒鳴り声を上げた。

「ダアレが病院沙汰の喧嘩しろつつたんだコラア！」

それに続いて黒い甚兵衛を着た男が二人入り、美咲のベッドの前に膝をついた。

「お嬢！心配しやした！」

「お怪我の方は！」

「うるさいよ、黙ってなお前たち」

女性が一喝。

更に芦屋達の頭はちんぷんかんぷんになってきた。

美咲がビンタされた頬を撫でる。

力強く女性を睨む。

女性がうなずいた。

「お前何しに！」

「おい昭島、私とお前の身分差を知らんわけじゃあるまいな？」

女性が壁に座り込む昭島を横目に見る。

「花柳公認、美咲組の総長ですぞ！」

また子分が口走ったので女性が叩く。

「黙ってな。それより昭島、そいついらならぬならくれなひか？」

「お前にタダでやるわけないだろ」

二人のお付きがやいやい、と脅しをかける。

「遊んで痛め付ける“物”なんてタダだろ？」

女性の殺意の視線が昭島を黙らせた。

「今日とはとにかく帰んな、後程他の者を入れるといいよ」

昭島は二人の子分に後で来る、と告げて病室を出た。

芦屋が恐る恐る女性に近づいた。

「あの……失礼ですがどちら様でしょうか」

女性は少し振り向き、微笑んだ。

結び上げていたかんざしを抜き、美しいつやつやの髪が腰の辺りまで落ちた。

どこか色っぽかった。

いや、とてつもなく色っぽかった。

「私は花柳総元締め、美咲組総長の美咲歩遊。歩海の母親だ」

箕輪以外の全員が口を開け、悲鳴と歓声が上がった。

美咲がため息。

* *

午前7時18分。

美咲を（無視して）間に挟み、母歩遊は綿貫を勧誘していた。

「というわけで、菜穂ちゃんはどこにいきたいの？」

「どこって……て、何で名前知ってんですか」

「……エスパー？」

歩遊は先ほどとは別物のようにニコニコしていた。

芦屋達は学校のため病室を出ていった。

昭島組の二名が話の輪に入れるわけもなく、美咲さえほっぽって話していた。

「で？美咲組やめんの？別に条件なしで今やめられるけど……」

つて事を踏まえて入院ライフ送んな返事は百年後でも良いからさ
ふてくされた美咲がフン、と鼻を鳴らした。

「百年後じゃ干からびてんな」

母が美咲を叩く。

綿貫は下を向き、悩んでいたが、すぐ美咲の母をまっすぐ見つめた。その目はいつもより輝いていた。

「やります…お世話になります！娘さんの友達にもなります！」

母は歯を見せてにっこりした。

「いい返事だ！」

「よろしく願います！」

二人のお付きも両手を上げて喜んだ。

「ま、とにかくお前も無事で良かった」

「も？」

誰のお見舞いに来たんだ、と猛烈に問いたいところをグツと我慢した美咲は、母の少し安心した顔を見て微笑んだ。

「あ、それから動いたらしいぞ」

美咲以外は首をかしげ、美咲は眉を少し困らせた。

「……また病院入ったらごめんなさい」

「仕方がないな、また何かあれば連絡しな」

母は美咲の頭を力強く撫でた。

「無事で良かった」

「……ありがとう」

しっかり入院しろよ、と残して美咲歩遊は病室を出ていった。

引き戸が閉まると、綿貫が美咲を呼んだ。

美咲は振り返り、首をかしげた。

「あたしさあ……」

「それくらい自分で考えるボケ」

「まだ何も言っていない！」

綿貫は口をへの字にし、少し悩んでいるようだった。

「何すればいいんだろ？」

美咲が大きなため息をついた。

「私の護衛でもしてれば？友達として」

綿貫は目を丸くし、意外と簡単な美咲の答えに笑った。

* * *

美咲歩海は入院中である、つまり、アルニカには当分なれない。

何故ならば、オルゴールがないからだ。

そして、できたばかりの友達や看護師などの目もある。

入院イコールアルニカストップ。

そしてその大問題はすぐにきた。

ニュース速報だ。

午後9時01分。

病室には一つずつテレビがついており、みんなそのニュースに釘付けになった。

電脳世界でウイルスが暴れだしたのだ。

どうやら生徒会などでも間に合わないらしい。

美咲はウズウズしていた。

何故このニュースに釘付けになっているのかというと、アルニカが今まで早急に破壊していたため、話題が珍しいのだ。

何故アルニカが来ないのか、どうしたのか、と心配する声が飛び交うのが聞こえる気がした。

綿貫が隣で呟いた。

「アルニカどーしたんだろな」

ギクツ！

美咲が返す言葉に困っていると携帯電話が鳴った。

本当は出てはいけないのだが、美咲は相手を見て出ることにした。クロだった。

「もしもし」

「で？何でこの一大事に出てこれないのかなー、正義のヒロインのアルニカさん？」

美咲が歯を食い縛る。

「喧嘩したから今病院なんだって。手とかぼろぼろに………」
「はぁ?!」

美咲はクロの怒鳴り声に携帯を耳から離れた。
また当てる申し訳なさそうに言った。

「ごめん、大丈夫、すぐに行くし」
「本当に行けるの?」

美咲は自分の怪我を見て黙りこんだ。
クロのため息が聞こえた。

美咲が落胆されたんだ、と落ち込んだ。
少し間を置いてクロが切り出した。

「テレビ見てんのか」
「………見てる」

「よし、そのまま見てろ」
美咲が電話を両手で持った。

少し嫌な予感がしたからだった。
「は?何を………」

「俺が行く」
美咲が反対しないわけがない。

「ダメだって!一人で何………」
「じゃああんた見てるだけ?」

「そんなことしたくないけど」
「あのさ」

美咲の声が止まる。
「この前の“どうして”の後を聞かせてくれる?」

仮面の少女の話をした夜のことだった。
美咲は息をのんだ。

第二楽章 2：パートナー（前書き）

美咲歩遊 みさきあゆま

美咲の母であり、花柳を統べる美咲組の総長である。

初の女総長であるため、その後を危ぶまれてもいたようだが、それを全く感じさせずに既に8年が経過している。

東京に生まれ、東京に育ち、花柳に務める、ご先祖から根強く暮らすいわば江戸っ子である。

第二楽章 2：パートナー

午後9時08分。

クロは青い電脳世界を一人駆けていた。

とはいえ、一匹。

通り過ぎる間にウイルス達をどんどん窒息死させていた。

この世界ではウイルスも呼吸する。

周りの空間を無にすれば駆除は可能なのだ。

そろそろ生徒会が戦う中心地だった。

「さーて、黒猫クロちゃん参上でーす」

クロは後ろ足で大地を蹴り、中心地の真上に飛び出した。

「おい生徒会！離れてな！！」

真下にいたウイステリアがクロをまじまじと見た。

クロと視線が合い、一瞬の判断をした。

「皆さん、遠くに逃げて下さい！」

一人が理由を聞いたが、ウイステリアは一喝した。

「いいから！」

クロは生徒会が離れる様子を確認し、大きく息を吸い込んだ。

「スペースエリア！」

そう叫んだ瞬間、生徒会の面々の前に見えない壁が現れた。

ウイルス達が苦しそうにふわふわと浮かび上がった。

一体何が起きているのかわからない生徒会達がキョロキョロと辺りを見回す。

ウイステリアはただ一人、ふわふわともがきながら消えていくウイルスを眺めていた。

*

*

午後9時11分。

美咲は自分の口をふさいだ。

クロがテレビに写ったからだ。

黒猫という不正アイコンが堂々とテレビに写ったからである。

ニュース番組は大騒ぎである。

生徒会のピンチを不正アイコンが救ったのだから。

美咲はベッドから降り、携帯電話を持った。

綿貫が行き先を聞いたが、軽く謝る以外に言葉はなかった。

引き戸を開けて外に出ると、静かな真っ白い廊下に出た。

エレベーターのボタンを押し、乗り込んだ。

屋上へのボタンを押し、エレベーターは彼女を上に乗らせた。

暗い階段へと続く小さな部屋に出て、美咲は鈍い金属音をたてながら上っていく。

頼りなのは非常口の仄かな緑色のランプだけだった。

重い鉄の扉を開けると風が美咲の髪を強くなびかせた。

顔にかかる髪の毛を手で払いながら、美咲は手すりに背をもたれた。

その場に座り込み、花柳のきらびやかな夜景に振り返る。

「……………どうして…」

美咲は結局、その後は言えなかった。

電話で言葉が詰まったのだ。

するとクロは言った。

“じゃあ、これから俺が無傷で帰ってきたらね。テレビ見ときな”と。

美咲は携帯のテレビを開き、クロがウィルスを消していく様子を見ていた。

空気の壁を消すと、クロは素早く闇に消えていった。

あれこそ謎のアイコンである。

テレビを消し、電話をかけた。

「もしもし」

「あら早い。俺の活躍見た？」

「この馬鹿！」

美咲は声を殺しながら叫んだ。

「一人で行って何かあったらどうすんの！」

「じゃあんだ一人で行けた？俺はあんだの入院してる間交代するだけだつて」

「何で私の代わりなんてするの?!」

「パートナーだからに決まってるんだろ!!」

美咲の声が止まる。

パートナー？

そんな言葉聞いたことない。

「会ってからほんの1、2ヶ月で勝手かもしれない。でも俺はアルニカの隣にいる。それだけで構わない、今までこんなに楽しいと思つたこと無いんだ。誰かと一緒にいて」

美咲は仰天して頭が真っ白になっていた。

パートナーとはつまり相棒、つまり未知の世界である。

今まで友達さえできなかった美咲にとって、初めての言葉だった。

とこのように、美咲はクロの正直な気持ちをスルーして“パートナー”をエコーしていた。

「聞いてます？」

「聞いているよ？パートナーは後で辞書引くからさ」

かなり混乱してるんだ、とクロは思った。

パートナーを辞書で引くって何？

そして先ほどの正直さに急に恥ずかしくなったクロは黙りこんだ。

無駄に秒を進める通話画面。

美咲もエコーを続けているため、電話どころではない。

やがてクロが沈黙をやぶる。

「唐突なんだけどさ」

美咲が混乱した意識から戻ってきた。

首を振ってクロの声を聞いた。

「あのオンラインゲームの話」

美咲はハツとした。

今自分が調べているにも関わらず、忘れていたのである。

「まだ推測だけど、作った奴は一般人だ。暗号も最初は自分で作ったんだろう」

美咲はふと昨日のことを思い出した。

たしか青年襟澤が同じようなことを言っていた気がする。

美咲は感心しながらうなずいた。

その間美咲は無言だったのでクロが呼ぶと、彼女はうなずきながら言った。

「いや、昨日クロちゃんと同じこと言ってた人がいて…」

「へー、そいつも頭いいな。」

と一言で片付け、自分の調査結果を続けた。

「でも暗号の難しい部分は自分ではつくってない」

「他の人？」

クロがため息まじりにそうだ、と言った。

美咲は頭の中のエコーを完全に消し、オンラインゲーム一色にした。

「おそらく犯人は二人いる」

「ゲームを作った人と暗号を作った人ね」

「でもってそいつは葵通りにいるかも？」

クロがニヤニヤしているのがわかった。

とても楽しそうな口調だった。

「あ、もうひとつ情報があるぜ」

「何？」

美咲が喧嘩をしている間にニュースがあったようだ。

「罰ゲームを無視して電脳世界から閉め出された奴らが次々に死んでるんだ」

クロが言うには、ニュースではそこまで言わなかったそうだが、情報の手先を言わないのではたまたクラッキングでもしたのだろう。美咲は被害者が多数であると察し、静かに目を閉じた。

少し嫌な予感がし、クロに聞いてみた。

「クロちゃんは……ゲームやった？」

「……………やってない」

「嘘つけ」

「本当」

「じゃあどうして暗号の内容がわかるのよ」

美咲は心配になったのだ。

もしクロが調査と称してゲームをやっていたら？そして、間違えて罰ゲームを受けていたとしたら？

深く、深く考えていくと死につながるからだ。

「友達がやってた」

クロが語りだした。

「罰ゲームもやらなかった」

美咲は息をのんだ。

喉元がつまり、クロから次の言葉を聞くのが恐くなった。

「昨夜、死んだ」

美咲は言葉を失った。

* * *

午前1時02分。

葵通りにはどこまでも広がる静寂と、真っ暗な世界があった。

その闇夜の真ん中に、一人の少女が仮面を小さな両手で覆っていた。

ああ……………私はどうして……………

少女が鼻をすすり、震え出す。

……………なんて愚かなの……………

どんだん人が死んでいく。

私の所為で死んでいくのだ。

たくさんの人が言葉を連ねる。

ソノ答エハ？

ふわふわとした金髪をぐしゃぐしゃと掻き、静かに仮面の下から涙を落とす。

すると葵通りの青く透明な地面に雫がポタポタと落ち始めた。

次第にその音は重なりあい、世界に涙の雨が降った。

雨の中、少女ジュリは泣いていた。

誰か……………彼を救って……………

そして

私を

殺して

第二楽章 3：芦屋千代の大作戦その2（前書き）

安西潔子（あんざいきよこ）

芦屋千代の隣のクラス、そして風紀委員会。

本人らは一切語らないが、どうやら二人は幼なじみらしい。

無造作に切られた黒髪は自分で切っている。

時々芦屋が切るが、結局髪型は変わらない。

他人に厳しく、自分にも厳しく、寡黙で早寝早起きの安西さんでした。

第二楽章 3：芦屋千代の大作戦その2

午前9時40分。

まるで倉庫のような狭い一窓の生徒会室に、役員全員が集まっていた。

会長の花岡紗夜。

副会長の水無瀬しづる、羽賀優奈。

会計の上沼美代子、千森美代子。

書記の河南渚、そして芦屋千代。

花岡が資料を両手に話を切り出した。

「今日は緊急会議です。先生方に授業欠課の申請もしてあります。昨日の件についてです」

羽賀がニコニコしながら両手を後頭部に回す。

「いやー、サボりかぁー」

すかさず水無瀬が羽賀を殴る。

深刻な表情であることに気付いた羽賀は小さな声で謝った。

外に見えていた桜は全て散り、緑色の葉が風に揺れていた。

会計の上沼美代子がティーカップを片手に会長に眩く。

「会長、今回の件の説明をお願いしますわ。あまり時間ありませんのよ」

完全にお嬢様だった。

胸あたりまでの金髪をふわりとカールさせた上品な生徒である。

隣で分厚い眼鏡をかけた千森美代子が数独をひたすら解いている。

上沼が肩を叩くと、彼女はペンを置いた。

花岡はうなずいて、資料を読み始めた。

事件は昨日。

一人目の被害者が亡くなったのは午後5時ちょうど。それを始めに18名が次々と自殺をしている。その方法は様々で、共通点はひとつだけ。

書記の河南渚が挙手する。

「共通点とはなんでしよう？」

花岡が少し口ごもったので、水無瀬が資料を奪う。

静かに読み始めた水無瀬は花岡を横目で見た後、内容を口にした。

「被害者の腕には大きく切り傷が残っており、その文字は被害者全員に同じようについていた」

ソノ答工八

と。

場の雰囲気冷め、しんとする。

水無瀬が全員をちらと見て、また切り出す。

「私達は被害者のリストからまだ亡くなっていない方々への聴取、そして調査をします」

全員の声が揃い、部屋から次々と出ていく。

花岡と水無瀬だけがまだ席に着いていた。

芦屋は不思議に思い、部屋の外で立ち止まる。

ちょうど死角に入り、耳を寄せる。

「だから私が読むと言ったのに」

「ごめんなさい、でも私は会長だし……」

「その前に貴方は被害者の遺族です。本当なら私達はここで会議してる暇なんて」

「いいえ！この事件を解決しなきゃいけないわ！」

花岡が素早く立ち上がり、ガタツと椅子を引く音がした。

水無瀬も静かに席を立つ。

「今の貴方は足手まといよ」

「そんなこと言ってられないの！」

とケンカになりそうになった部屋に芦屋は堪えきれずに割り込んだ。

「行ってきて下さい！！」

二人の動きが完全に止まる。

言ってしまった後に芦屋もハツとする。

しまった。

盗み聞きしてたのに。

しかし、芦屋の言葉は止まらなかった。

「ご家族が亡くなられたなら、こんなところにいる場合ではありません！すぐにご家族のところへ！早く行ってきて下さい！」

花岡が何か反論する前に芦屋は叫んだ。

水無瀬が静かに見つめる。

「私達に任せて下さい！みんな生徒会の仲間なんです！ちゃんと解決してみせますから！」

水無瀬が微笑み、花岡の肩を優しくたたいた。

「行かないと彼女に強制連行されるわよ？」

花岡は両手で顔を隠しながら、その場に座り込んだ。

静かなすすり泣きが聞こえた。

午前9時57分。

花岡紗夜は椿乃峰学園を発ち、生徒会は調査を開始した。

* * *

午前10時18分。

芦屋は河南と菊通りに来ていた。

暖かい日差しがじわじわと人々を唸らせる。

河南がだるそうに芦屋に引っ付いた。

咄嗟に暑苦しい河南を避ける芦屋。

「やっぱり学生が多いはずだし？回るわよ！」

「えー、暑いしアイスとか食べちゃダメ？」

それもそのはず。

まだ椿乃峰学園は冬服で生地も厚く、夏服の移行期間を迎えている公立学生よりは何倍も暑いだろう。

スカート丈も規定通りの長さで厚い生地なので、これまた暑いのだ。ときばきと歩く芦屋にふらついた河南がついてくる。

芦屋は菊通りからアクセスされている閉め出しを食らった被害者のリストをペラペラとめくった。

「菊通りだけで254人か……しらみ潰しでいくわよ！」

「何をしているのじゃ？」

ばったり。

一言で言えばそのような感じだ。

芦屋の前に風紀委員会の安西が立っていた。

さらりと現れた彼女は、冬服にも関わらず汗ひとつかいていなかった。

「あ、きよ。おはよう！」

「うむ。で、何をしているのじゃ」

芦屋は菊通りで事件の調査をしていることを簡潔に話した。

風紀委員会と生徒会は協力体制になることが多く、調査内容などを話しても良いとされている。

安西もニュースは見たようで、話の内容をすらすらと理解した。

「では、今日1日ご苦労様だな。一枚渡せ」

「え？だってきよのやることじゃ……」

安西は芦屋からリストを一枚破った。
河南が声なき悲鳴を上げる。

「お前一人では夜を越して朝になる」

「ちよつと、私もいるんですけど！」

安西は河南を無視し、芦屋に聞いた。

「花岡会長の分もあるのだから？」

芦屋は強く一回うなずいた。

リストが多い理由を言い当てた安西は小さく何度かうなずいた。

「ありがとう、きよ」

「良い。寮の門限に遅れるなよ」

安西はリストを眺めながら芦屋に背を向け、目的地へ向かった。

芦屋の隣で河南がその背中を見つめた。

今回の大作戦、それは菊通りの被害者全員を今日中に調査することである。

この気が遠くなるような作戦を芦屋は着々とこなしていった。

時より、扉さえ開けない生徒もいたが、芦屋お得意の根性で粘って開けさせた。

午後3時47分。

芦屋は自分の寮の前のベンチに座った。

河南も隣でだらりと座った。

薄い夕焼け色の雲が早く流れていく。

「何も情報無かったねー」

「全員回ったのに……収穫無しじゃ帰れない！河南、先帰ってて」

芦屋がベンチを立つと、河南も立ち上がる。

「嫌だつて！生徒会として一緒に頑張るの」

そのように盛り上がっていると、見慣れない青年が寮の前を通った。黄緑色の髪に左額に二つの丸傷、よれたTシャツとジーンズの青年である。

芦屋は不審に思い、彼に話しかけた。

「ねえ！あなた見かけない顔ね、どこの学校の子？」

青年はギリリとした目付きで芦屋をにらみ返した。

芦屋が半歩引くほどだった。

「何だよ」

「……今流行ってるオンラインゲームについて、何か知らない？」

芦屋は冷や汗をかきながら聞いた。

緊張感が辺りを包み込む。

河南が緊張して唾を飲み込んだ。

青年は面倒臭そうにため息をついた。

「強制的マインドコントロール」

芦屋は首をかしげた。

青年はまたため息をついてその場を去っていった。

河南がそっと芦屋に近づく。

「マインドコントロール？」

「……有りかも」

河南が芦屋の顔を覗きこむ。

マインドコントロール

強制するのではなく、あたかも自らの意志かのように、思い通りの行動させること。

強制的となればそれは洗脳である。

たくさん種類があるが、全員に同じ行動をさせるには一番の方法である。

しかし、

「どつやって……」

芦屋は眉間にしわを寄せた。

青年の姿はもう見えない。
夕焼け色はさらに空を染め上げ、門限が刻々と近づいていた。

* * *

電子警察は本日より、花柳内のハッカーを全て聴取することを決めた。

ニユースは電波に乗せて花柳中に流す。

美咲はそれを見てすぐさま電話をかけた。

「はい？」

「もしもし！大丈夫？！もしかしてもう捕まって」

クロが電話の向こうでため息をついた。

「今、夜中の1時ですよー？ニユース見るの遅くない？」

午前1時15分。

外は真っ暗で美咲のいる廊下も真っ暗だった。

非常口の緑色のランプが不気味さを演出、ゾンビでも出てきそうな雰囲気だった。

「いや、なんかお見舞いと称して情報ペラペラする人が大分長いて」

芦屋のことである。

「情報？」

「ん、マインドコントロールとか洗脳が何とか………きっと今回の被害者たちの殺害方法として浮かんだのかも」

「有りだな」

美咲はもちろん何故か聞いた。

クロははたまたニヤニヤしているのだろう、楽しそうに言った。

「ジユリについて少しわかった」

ついに、待ちに待った情報が明かされようとしていた。

しかし、それは一瞬で中断された。

電話が切れてしまったのだ。

音がしない。

画面を見ると電源が切れていた。

何故か再起動もできなかった。

「一緒に来てもらおう、アルニカ」

美咲が目丸くし、ゆっくりと声がするほうを向いた。

冷や汗が止まらず、全身が熱かった。

現実世界でアルニカと呼ばれたのだから。

上下ジャージ、ひとつ結びの長い黒髪、単調な声。

病院のガードロボットだった。

そして彼女がおす車椅子に座るのは一人の金髪少女。

「私はアリシア・フリーデン。殺されたアルニカの友達よ」

美咲は息をのんだ。

第二楽章 4：掟（前書き）

かなんなぎさ
河南渚

椿乃峰学園二年、生徒会書記。

芦屋とは知り合ったばかりだそうで、現在は友達になりたて。能力は速記術。

すごいのは速記する際に両利きであること、そして書きながら先を予想して書き進められることである。パソコンのタイピングも異常に速い。陽気で暑いのが大嫌いなインドア派。

第二楽章 4：掟

午前1時21分。

美咲は変な部屋に連れ込まれていた。

真っ暗なはずの小さな部屋がパソコンの青白い光でピカピカしていた。

大きなサーバに冷却装置、パソコンは3台。

部屋であのロボットがもう一人いた。

長い金髪を膝の上に乗せる少女アリシア・フリーデンが二つのロボットを紹介する。

「ゴムの色が赤いのがキャロライン、青いのがアンジェリカ」
何そのネーミングセンス。

微妙、かつ呼びにくい、そしてゴムの色とか見分けつかないと美咲は内心つつこんだ。

「で、どうして呼んだの？」

「貴方がアルニカの真似事をしているから。その若さじゃ本物を見たことも無いんじゃないか？」

アリシアは偉そうに車椅子の手すりに頬杖をついた。

青白い光でできる影が不気味さをさらに演出していた。

「やめてほしいの」

「あんなアルニカの友達？」

「そうよ」

二人はにらみあっていた。

すると、一つのパソコンから何か音がした。

アンジェリカがアリシアに電話がきていると伝えた。

画像は無かった。

上についたスピーカーから陽気、かつ冷静な声がした。

「ヤッホー 話の途中で俺の彼女誘拐したのはあんだだな？誰だよ」
美咲が一瞬にして誰だかわかる。

クロだ。

何故ここがわかったのだろうか。

「そういう君は何者だ？」

「彼氏？」

「断じて違います」

アリシアがスピーカーと美咲をまじまじと見るが、二人のロボットは一切動かなかった。

「とにかく、私はこいつに話がある。君の話は後にしな」

「あんたの話そんなに大事なの？」

クロの静かな問いかけにアリシアが口の両端を吊り上げる。

クロには見えていないであろうに、アリシアは美咲を指差した。

「君は知らないだろうな」

誰かが口を挟む間もなく、アリシアがいい放った。

「アルニカは既に死んでいる！」

美咲は歯を食い縛り、拳を握った。

事実だからだ。

* * *

私のピアノはみんなのこころを優しく揺らし、鼻歌を歌わせた。

でも音楽室でみんなと歌えないことに変わりはない。

母の呼ぶ声をたよりに夕飯のあたたかいテールに走る。

お手伝いさんが母と一緒に食事を持ってきた。

何お手伝いさんがいるのに母が持ってきたか？母が料理を作るのが好きだからだ。

私と父は二人が座るのを待ち、一緒に夕飯を食べ始めた。

だいたい日本人小学生が好きなカレーを口を汚して食べる、美味しさを表現する子どもの特権である。

私の笑顔を見て、母がにっこりする。

美味しい、は何度も言わなくてもわかるのだ。

何が美味しいとか、この具がどうか、理屈じゃないのだ。母にとつては私の笑顔が全ての答えだった。

そんなあたたかいテーブルで、父ははりつめた顔をしていた。

お手伝いさんが心配そうに聞くと、父は箸を置いて答えた。

母の名前を呼ぶ。

「……………アルニカのコアを、私に出来ないか」

何故、と聞くと父は答えた。

ある計画に必要なのだ、と。

あたたかいテーブルが冷めていく。

母が少しわかったようにうなずいた。

また、全てを理解してくれたようなやさしい顔で言った。

「何の実験かしら」

「……………人を傷つけずに人を気絶させる道具さ。なんなら、歩海でもいいんだ」

「それだけはお断りよ!」

初めてかもしれない。

母が父にこんなに怒鳴ったのは。

この日からだ。

家族が壊れていったのは。

母は私を強く抱きしめて言った。

「あなたは何も心配する必要はないの」
心配だよ。

私はこんなに心配してるのに、どうしていつも笑ってるの？

そして、その日は来たのだ。

母が、二度と笑わなくなる日が。

* * *

美咲は瞬きをした。

クロが何か答えたからだ。

「だから何？」

「真似事はやめてほしいと言っているのだよ」

「あんたに何かデメリットがあんの？」

「計画の邪魔だ」

計画？

「ある計画に必要なのだ」

〔実験？〕

脳裏にそれがこだました瞬間、美咲は音波を散らして怒鳴った。

「違う！！」

アリシアが耳をふさぎ、二人のロボットが素早く美咲の腕を片方ずつ掴んだ。

「アルニカは……私の母親だ！」

アリシアが大きく目を開けた。

全ての時が止まったようだった。

そんなわけない、そんなはずない、と何度も呟くアリシア。

美咲は二人のロボットの手を振り払った。

「でもって今のアルニカは私！花柳は私が守る！」

そしてクロに時間を聞き、話を明日に回した美咲はたったと部屋を出て暗がりの廊下に消えた。

アリシアは震えながら呟いた。

「彼女に……娘などいなかったはず」

「でもあいつはアルニカだ。あんたこそ邪魔するなよ」

クロは電話を切り、アンジェリカがスピーカーを切った。

キャロラインが車椅子を押し、パソコンの前に移動させた。

アリシアがキーボードを強く、素早く叩き始めた。

アルニカの名前を何度も呟きながら。

そして午前1時50分、美咲は暗い屋上に一人座っていた。涙をぼろぼろと流しながらネオンでいつぱいの町を眺める。携帯電話が鳴った。

クロだった。

とても出る気にはなれなかった。

「……………前にもこんなことあったかも」

携帯電話をコンクリートの床に置き、通話ボタンを押した。暗い屋上で光る携帯の画面が秒を刻む。

「前もあつたなこれ。泣いてんの？」

「悪い？」

美咲は鼻をすすった。

「また私のこと知ってる人増えたんだもん！いつちやいけないのに」
「それはなんかのルールなのか？」

「そう！アルニカは他人に正体を知られてはならない！言ってもいけない！……………負けてはならない！」

美咲は唇を噛みしめ、また涙をこぼした。

携帯に向かって手をつき、自分に言い聞かせるように言った。

クロはそれをじっと聞いていた。

また美咲が黙りこむとクロが喋った。

「……………それさ、お前の掟か？」

「……………お母さんのじゃダメなわけ」

即答したクロに美咲が反論できなくなる。

「一人ならそれでいいかもしれない。でもあんたは……………」

「一人じゃない。わかってる。パートナーだって辞書で引いたのよ」

【パートナー】2人1組でする際に組む相手。事業などの協同者。

「わかってるから尚更守るのよ！」

「じゃあ何であんたは一人で突っ走ってんだ！！」

電話の向こう側でクロが怒鳴った。

おそらく向こう側では近所迷惑になっている、かもしれない。

「パートナーってのは遠慮なんかしないんだよ！隣を歩くのがパー

トナー！どつちかが前に立つのはどつちかがダメになった時だけ！
「前に立つ必要なんて無い！時空領域事件終わったのにどうしてまだ協力してんのよ！」

クロの声が止まり、美咲が音波の飛ばないように静かに泣いた。
涙が床に滲み、携帯の液晶画面がそれをぼんやりと照らした。

「どうして…………隣にいるの…………」

美咲は袖で涙を拭い、頭の中をぐるぐると駆け回る言葉をやっと思口にした。

「それが昨日聞きそびれた続きみたいだな。ダメダメの泣き虫め」
クロが言いそうで言わなさそうな言葉に美咲が反応する。

携帯を軽く持ち、耳に当てた。

「何その言い方！このわからず屋め！」

「はっ！わからず屋はどつちだど阿呆、既にアルニカの掟破ってるくせに中途半端に守ろうとすんなんて」

異常にムカついてきた美咲は舌打ちをして怒鳴った。

「あれは約束なんだもん！お前にど阿呆扱いされる筋合いはない！」

「破っちまったもんはしょうがねーだろ！あんたが自分でルールでも何でも作れば結果オーライだろ！」

「何が結果オーライだ！猫のくせにその耳は節穴か！破つてもルールは変わらないんだよ、私はアルニカについて何も言えないもん！」

「辛くても言わないんだろ、一人で何でもできると思うなよ？あんなの弱音くらいいくらでも聞いてやるよ。要するにあんたを一人にしておけないだけ！」

美咲が眉をひそめる。

クロがハツとしたようで、言葉が止まった。

「……………今…なんか寒気したかも」

「え？！ジーンときたとかじゃないの？ま、まあいいや、今日調べた大々の成果は明日までにメールするから！じゃな！おやすみ！」
美咲が言葉を返す前に電話が切れた。

美咲は待ち受け画面に戻った携帯電話を見つめ、少し顔を赤らめた。

「……クロちゃん最近変じゃない？」
変なのはクロだけではない、というのは完全にスルーで美咲は眩いた。

また花柳の夜景を眺め、携帯電話を閉じる。

涼しい風が屋上に舞い込み、美咲の頬を撫でていく。
しかし火照った顔はしばらく冷めることはなかった。

午前1時56分。

美咲は屋上を後にし、暗い病室で静かに目を閉じた。
翌日、朝ごはんをスルーするほど寝坊した。

第三章 1：美咲歩海の困惑、故。

午前11時37分。

美咲はごちゃごちゃの髪型で起き上がった。隣で綿貫と箕輪が大笑いする。

「このお寝坊さんめ！何してたのー？」

「朝飯は無いからな」

何してたって……と美咲は思い返す。

アルニカワード連発だから言えるわけもなく、美咲は電話をしてい
たと言つてごまかした。

「誰と電話してたんだよ？」

「彼氏とか！」

「違うわよ……何ていうか……その……」

美咲は言葉を止めた。

完全にアルニカワードが出る。
というより。

「その人のこと何も知らないんじゃない？」

「恋どころじゃねーじゃん」

美咲は少し顔を赤らめ、完全否定した。

しかし本当に知らなかった。

クロという名前とクラッカーであること、それから……男性である
こと以外。

箕輪が両手を組み、目を輝かせた。

「誕生日とか血液型とか職業？学校とか？今度聞いてみな」

「却下！そもそも聞けるような関係じゃ……」

というより、何だこのガールズトーク！

何故病院で展開してるんだ！

と心の中で美咲は叫んだ。

メンツも微妙で話も微妙、美咲がそう思うのも無理はない。

「そーいえばメールが来てたよ？まだ見てないけど」
箕輪が美咲の携帯電話を摘まむように持った。
美咲はハツとした。

クロクが昨日言ってたメールかもしれない。
面白半分で見られたらマズイ内容であること間違いない。
オンラインゲームについてだろう。

「返せ！私の携帯じゃん！」
「彼氏かなー 読んじやう？」

普通なら恥ずかしそうに真っ赤になるこのシチュエーション。
しかし美咲の場合、アルニカ内容連発のメールの危機なので真っ青
だった。

箕輪はメールを見て口を開けた。
無言なので綿貫が箕輪を呼ぶ。
美咲が唾を飲み込む。

「……………何このデコメ……………」
「は？」

箕輪が美咲と綿貫に携帯電話の画面を見せ、二人もすぐに口を開け
た。

メールにはデコ画像がひとつ貼り付けられていた。
黒猫が真ん丸になって座りながらあくびをし、その吹き出しには「
おはよう」と可愛らしく入っていた。

箕輪が美咲に携帯を渡し、キヤーキヤーと騒ぎ始めた。

「やつぱ彼氏だあー ヤツフー」
「なんか進展したら報告しろよな！気になるから！」
何故か綿貫も目を輝かせる。

美咲が携帯を閉じ、ホツとしたようにため息をついた。
「そんな進展あり得ないから却下！」
箕輪と綿貫が声を揃えて駄々をこねたが、美咲は携帯を枕元に置い
た。

「遂に明日退院かー！外が恋しい！」

綿貫が両手を組んで伸びをした。

箕輪がそうだね、と返す。

この和んだ雰囲気を中心に美咲は考えた。

「これが……友達、なんだろうか」

二人の笑い声がこだまし、白い病室が鮮やかになる。

「今までこんなことなかったからな」

彩られていく。

「でも……」

「もし、私がアルニカだと知ったらどんな顔するんだろう？」

少し不安になる。

この彩りが消えてしまう。

「離れていくんだろうか」

箕輪が美咲を呼んだ。

美咲がハツとして、ごめん、と謝った。

「提案なんだけどー、夏休みに三人でピクニックとかどう？お姉ち

やんの家があるから泊まりで」

「ひまわりすごいらしいぜ」

美咲はいつも見せないくらいにっこりした。

「いいよ」

「今はこのままで」

このままで。

* * *

午後3時58分。

美咲の携帯電話が鳴った。

クロからのメールだった。

綿貫は昼寝中、あとの二人は退院手続きが終わったようで病室には

いなかった。
今なら！

もしもし

昨日の大々の成果を大発表！
ジュリについて少しわかった。

もとは現実世界で普通に働いていた女性だった。

名前は秋元珠理。

ただし、その履歴は並じゃない。

……… 続きはウェブで

美咲の携帯がミシミシと音をたてた。

しかしメールはさらに下まで続いていた。

下へ、下へ、下へ………

長い。

そしてやっと文が出てきた。

5年前、ネットワークに接続中に身体だけ殺されている。

美咲は目をこすり、また文を読み返した。

間違いはなかった。

身体だけ死んだ？

つまりロゲインした精神は……？

「あの仮面の子は死んだはずのアイコン……」

しかし、今回のオンラインゲームとは関連性が全く見られない。

ゲームの発信源として怪しい葵通りにいる謎のアイコン、ということと以外は無関係だ。

美咲は頭を悩ませた。

そこで美咲はふと思い付いた。

【何も知らないんじゃない？】

【誕生日とか血液型とか職業？学校とか？今度聞いてみな】

全く関係ない話を急に思い出した美咲は拳動不審に辺りを見回した。唾を飲み、勇気を振り絞ったのか、美咲は電話をかけた。

「もしもし！」

「あれ？ちゃんと最後まで見た？怒られるようなこと送ってない……」

クロが言葉を止めた。

美咲が電話の向こう側で口ごもっていたからだった。

「えと……その……あの……」

「何」

また少し美咲のごもごもは続き、遂に何か言った。

「誕生日とか血液型とか職業とか！あと好きなものとか嫌いなものとか！例えばあと身長とかそーゆうの！」

美咲は目を瞑りながらマシンガンのように質問攻めにした。

全くもって頭が真っ白の美咲はおそらく今言った質問の内容さえ覚えていない。

綿貫が寝返りをうつたのでドキツとしたのか、美咲は周りをキョロキョロと見回した。

「………何、本当に好きになっちゃった？」

「ち、違うわよ！」

「じゃ何で知りたいの？」

美咲が口をつぐみ、理由を懸命に考えた。

友達に言われた？

私を知りたい？

何で？

気になる？

「……………」

クロのため息が聞こえた。

「誕生日は文化の日の翌日、血液型はA B、実は高校生」

美咲が動揺している間にクロはまだまだ続けていく。

「もちろん公立な、やっぱ女いないとな。あと何だっけ……………好きなものは真夜中の散歩、嫌いなものは暇な時間、それと身長は……………いくつだろ？あ、この前測ったかも。165前後だと思う。低いだろ？あとは？」

美咲は口をポカリと開け、啞然としていた。

まさか答えてくれるとは思っていなかったからだ。

「答えると思わなかった？さて、こんな教えたんだからあんたも言えよな」

美咲は頬を赤くし、視線を宙に泳がせた。

また綿貫が寝返りをうったのでホッと一息をした。

「た、誕生日は7月7日、血液型はA型で高一、あと……………」

「え、今のは歳言っちゃったも同然じゃん」

「あ！まあ…別にいいか」

美咲は15歳だと完全にばらしたが、特に気にしなかった。

「好きなもの？オルゴール、嫌いなものは私の身長、146センチだから！」

クロが吹き出した。

おそらく身長についてだろう。

アルニカの時靴が多少ヒールなので背が高く見えるが、実際はとも背が低い。

美咲は顔を真っ赤にした。

「笑うな！」

「いや別に？てかもうすぐ誕生日なんだな」

今は6月。

美咲は短く答えた。

クロが思いだし笑いをする。

「でも本当にいきなりだなあ…何かあったの？やっぱ好きになっちゃった？」

「違うって！なんかそればっかりね？そんなに好かれたいの？」

「あ……………」

クロが今さら気付いたように声を伸ばした。

「アルニカなら良いかなあ」

美咲は顔を真っ赤にして口の端をひきつらせた。

クロが少しニヤニヤしているのがわかり、美咲が猛反発した。

「この変態！私は絶対好きになんてならないから！」

「ウソだあー 相手のこと知りたくなるのは恋だろ？」

ヒューヒューとクロがもてはやす。

「切る！！」

「あ、待った待った！本題はあんたの恋愛相談じゃないから」

美咲はカバンから透き通った赤い暗記用下敷きを出し、顔に向けてパタパタと扇ぎ始めた。

真っ赤になった顔はまだ元に戻らず、下敷きから送られる風がさらに涼しく感じた。

「さて、秋元珠理についてだな」

「電腦世界にいる間に現実世界の身体が殺されたってことは？」

秋元珠理は既に死亡届が出されていた。

他殺のようで、犯人は捕まっているようだ。

島村隼人。

動機は彼女が作り上げたアルゴリズムで……

「ストップ」

美咲が下敷きをパタパタしながら質問した。

クロがまるで先生のように解説した。

「うん、おそらくアルゴリズムだな？」

【アルゴリズム】

数学、コンピューター関連の問題を解くための手順を表すもの。いわば解き方。

世に出回る電子的産物にはすべて基本のアルゴリズムを元にした電子文書プログラムが搭載されている。

クロがわかりやすいよう例まで出してくれた。

「そうだな……ネット上の検索、あとは素因数分解とかもそうだな」
「なにそれ」

クロが信じられない、とでも言うような短い悲鳴をあげた。

素因数分解は高校一年生なら既に習っている課程だからである。

花柳の授業課程では中学三年生で習うものである。

「素因数分解！ルート（ ）とかやったでしょ！？」

「さあ？ましてや算数で30点以上とったことないし」

「算数から?!」

クロのイライラが爆発したような叫び声が聞こえ、美咲が何もわからず首をかしげた。

【素因数分解】

ある整数を素数の積で表す方法。

素数とは約分ができない1より大きな自然数のこと。

2、3、5、7、11のように割りきれないものが例である。
これを元に解いていくのが素因数分解のアルゴリズムである。

「お分かり頂けたでしょうか？」

「んー、ちよつとだけ。まさか病院で算数の勉強すると思わなかった」

「これ数学！とにかく話がずれてきたから戻すぞ。」

秋元珠理が殺された動機は彼女が作り上げたアルゴリズム。

未だ誰にも使われず、闇に消えた幻とも言われている。

もしかしたらオンラインゲームの難しい問題は彼女のアルゴリズムが使われているのかもしれない。

「葵通りにいたジュリって子にもう一度会いに行かないと」

「いいよ、俺行ってくる」

「私行く」

美咲は辺りを見回し、ひそひそと言った。

「私もう明日退院だし、近いし行ってくるよ」

するとあっさりクロがそれを承諾した。

驚く美咲にクロは一つ提案した。

「じゃその間ゲームでもしてようかな」

美咲は耳を疑った。

ゲームとは問題のオンラインゲームだろう。

「何言ってるの?!」

「大丈夫だよ、俺天才だから」

「間違えたらどうするの!」

「一つだけ聞いてもいい?」

美咲が反論を止め、クロが静かに言った。

「外でもし、俺と会ったらどうする?」

美咲はその瞬間、呼吸を忘れたように固まった。

第三楽章 2：マインドコントロール

「外でもし、俺と会ったらどうする？」

美咲は考えたこともなかった。

クロと現実世界ではったり会うことを。

病室でただひとり、時間が止まってしまったようだった。

秒を刻むうちに美咲は微かに考えた。

「……………正直言つと恐い。」

クロは何も返さずに聞いていた。

「でも勇気が出たら、握手できるかも」

「はあ？」

返答が予想外だったのか、クロがため息をついた。

ホツとしたような、温かいため息だった。

美咲はそれがどういった意味のため息なのかわからず、自分の言葉を思い返す。

「……………よかった」

「何が？」

美咲がそう聞いた瞬間だった。

綿貫がモソモソと起き上がり、目をこすった。

「ん？誰と電話してんの？彼氏？」

「ぎゃああっ！」

電話の向こうから「そいでーす」と聞こえた。

違うと叫んだ美咲は電話を切った。

綿貫が美咲のベッドに乗りだし、しつこい尋問が始まった。

この後箕輪が加わり、ガールズトークが再展開したのは言うまでもない。かもしれない。

* * *

午後4時41分。

芦屋は葵通りの小さなカフェにいた。

目の前には風紀委員会の安西が座っていた。

まわりにはわりと空席がなく、カップを置く食器の音などがざわつきでかきけされる。

テーブルにはチェックがたくさんついたオンラインゲーム被害者のリスト。

丸印はひとつもなかった。

芦屋が頬杖をついてため息。

安西がすかさずだらしないと注意する。

「まさか情報ゼロとはな」

「ホントよ！時間無駄だったというか……」

安西が美しい装飾のティーカップに入った紅茶を少しだけ飲む。

芦屋も頬杖をやめ、紅茶をすすする。

はたまた注意される。

芦屋がむくれる。

「あ、でもひとつ可能性を見つけたよ？」

安西は猿真似でも見るような、呆れた顔で聞いた。

芦屋は黄緑色の青年の言葉を思い出した。

強制的マインドコントロール、洗脳。

芦屋の考えを言葉にした。

ゲームをし、間違える。すると罰ゲームが表示される。

人間は誰しも言葉を見ると想像する。

しかし実際に動くことはない。

そこで一緒に表示されている“従わなかった場合の罰ゲーム”を頭の片隅に閉まっただま。

下には自分の死に方が表示されていて、すべては後日のあるメールで呼び起こされる。

「ソノ答工八」

自分が手をつけなくてもかかった者だけが勝手に死ぬ。ちよつとした賭けだができないわけではない。

安西が目を点にしているので芦屋がまたむくれる。

「信じてない！」

「いや、そういう意味ではない。可能性としてはあり得る。ただ、誰に聞いた？お前の考えではなかるう？」

芦屋が返答に困る。

名前さえ聞いていないのだから。

「通りすがり」

「其奴が犯人かもしれないだろう」

芦屋が即座に立ち上がる。

そんなこと考えもしなかったからだ。

あの青年が犯人かもしれない。

これが真実なら大変なことだ。

犯人とすれ違い！

しかもみすみす逃がすとは！

紅茶がカップの中で揺れた。

安西はいたって冷静に座っていた。

「探さなきゃ！」

「無理じゃる馬鹿者」

「でも」

「それがわかれば良い、確認に行くぞ」

どこへ？と芦屋が首をかしげた。

安西が立ち、カフェを出た。

芦屋もそれについていく。

「殺された被害者のパソコンだ。電子警察が持っているだろう」

安西は芦屋と一緒に電子警察に向かった。

夕焼けが二人を照らし、その影は長く伸びた。

* * *

暗い階段を登っていくと、小さな小部屋にたどり着く。

重い扉の向こうには青白いパソコンの光が充満する。

そこに大きな花のカチューシャをつけた女子生徒が入ってきた。

箕輪なぎさである。

部屋の中には車椅子の少女が金髪を膝に丸めて座っていた。

アリシア・フリーデンである。

その左右には病院警備ロボットのキャロラインとアンジェリカが立っていた。

「アリシア？」

「……………実験を始めましょう」

アリシアが箕輪に背を向け、パソコンの画面を見ながらカタカタとキーボードを打った。

アンジェリカが珍しく口を挟んだ。

実験とは。

アリシアは嬉しさがどこまでも込み上げるような顔で言った。

まるでこれから始まることを楽しみにして、待ちに待ったものが来るような感覚。

「こんなお遊びは余興よ、ゲームは今から始まる」

キャロラインが笑顔を全く崩さずに立っている箕輪を横目で見る。

「応力発散が遂に起動する」

ストレスレイアウト

アリシアが笑みを浮かべ、箕輪が可愛らしく小首をかしげた。これから何が始まることも知らずに。

こうして、作戦は始まった。

同じ頃、美咲は病院の屋上にいた。

風当たりのない入口の陰に隠れた美咲は黄色のオルゴールを鳴らしていた。

まだ日が落ちたばかりで薄暗い景色に美咲はため息をついた。オルゴールの美しく、簡単な旋律が風に乗る。

「フルートとハープのための協奏曲八長調、299………だったな」美咲は病院から一瞬で消えた。

その瞬間、美咲は電脳世界に咲いた。

アルニカとして。

群青の空からはポツポツと小雨が降っていた。

久しぶりのアルニカ姿に美咲は微笑んだ。

「いつやあー、なんかもう照れちゃうねヤバイ久しぶり！」

誰もいないのをいいことにアルニカははしゃいだ。

ピョンピョン跳んでみたり、くるりと一回転してみたりと、とにかくはしゃいだ。

目指すは葵通り。

アルニカは音速で電脳の空を駆け抜けた。

景色が見えなくらいの速さで流れ、彼女の桜色の髪ははしるようになびいた。

そして何秒も経たないうちに、葵通りのメインにたどり着いた。その入口を守るかのように、仮面の少女がポツンと立っていた。顔こそ見えないが、どこか寂しげだった。

「……………マリモ？」

少女ジュリの前でアルニカは足を止めた。

二つのひよっと長い髪が前に出て揺れた。

「久しぶり、ジュリさん。どうしてもあなたと話がしたくて」

ジュリが小さな首を人形のように横に傾ける。

アルニカが口の端をきゅつと引き締める。

「あなたのこと、わかったよ。何故ここにいるか、何故ここを守っているか」

「ねえ」

ジュリが小さな声で囁くように呼び掛けた。

ふわっとした金髪を揺らしながらアルニカの手を握った。

「あなたアルニカでしょう？」

「そうだけど」

見上げた仮面が微笑んでいるように見えた。

同じ変でテキトーな仮面なのに、不思議なものである。

「何か聴かせて」

アルニカが聞き返す間もなくジュリは、精一杯の心をこめたように言った。

「死ぬ前に」

まるで運命を知っているかのような言葉にアルニカは少し悲しい顔をした。

しかし、それはすぐに強気な笑顔に変わった。

右手に銀色のフルートを出し、器用にくるりと回転させた。

「もちろんよ」

ジュリが笑顔になった気がした。

第三楽章 3・シヨリ（前書き）

今回、更新が大変遅れましたことをお詫び申し上げます。
では、どうぞ

第三楽章 3：ジユリ

午後10時18分。

クロは葵通りに侵入することに成功していた。

何が起こったのかというと、アルニカがジユリに感覚麻痺ウィルスをつけたのだ。

全身麻痺や死ぬような麻痺ではなく、一瞬だけ五感を麻痺させるウィルスである。

ウィルスを受けたアルニカにジユリが触れた瞬間、彼女に全て移すという作戦である。

別に、持っているからといってアルニカが死ぬわけではないので安心を。

その一瞬にアルニカがかかかとも鳴らせば、クロは気づかれずに葵通りに入れるというわけだ。

正直、この作戦の成功にホッとしているクロはあくびをした。

成功する確率が本当にわずかだったからだ。

そもそも提案したのはアルニカで、実現化するために頑張ったのがクロである。

算数さえまともできないアルニカから出た作戦が、まさかうまくできるとは思っていなかったのだ。

「さて、犯人の家を探しますかね」

クロが辺りを見回すと、各家のパソコンのメインフロアが見えた。

しばらく見ているうちに、クロは一軒に目をつけた。

「犯人はメインフロアを開いてないはず。でも全てをオフにはできないんだな」

パソコンが起動されていなくても、各家にメインフロアが常に現れている。

起動している場合は少し明るく見え、ログイン状態になる。

犯人はそれを隠したいはず。

「なーんてことをマジで考える犯人がいるんだなあ。」

一軒だけログオフ状態で微かに光るおかしなメインフロアがあった。クロが楽しそうに目を細めた。

「ド素人が」

その一軒の前に立ち、空白領域を発生させた。

オンラインゲームのファイルを見つけ出したクロはすんなりと中に入れた。

入ろうとしたクロは、少しだけ足を止めた。

フルートの美しい音色が聞こえたからだ。

存在感ある独奏が遠くまで響いていた。

「……アルニカだ」

今度は自分のために弾いてくれないかな。

あの美しいバイオリンを。

そしていつか。

自分のために、歌ってくれないかな。

クロはファイルに入り込み、ゲームを始めた。

* * *

芦屋千代はこの葵通りの様子を見てはがゆくなった。

アルニカがフルートを独奏してジュリを引き付け、黒猫が一軒のサバに侵入していたのだ。

もう犯人をつきとめたというのか？

午後10時24分。

芦屋と安西は電子警察の資料室にいた。

安西が芦屋の横で資料を見つめていた。

「芦屋、犯人が分かった」

「え!?!」

芦屋が安西を二度見した。

安西が資料のページをひらりと見せる。

「露木光。葵通りで唯一被害を受けていないのじゃ。行くぞ」
芦屋が少しうつむくと、珍しく安西が声を荒げた。

「事件に集中しろ！お前は生徒会の芦屋千代じゃろ！」

芦屋が奥歯を噛みしめ、うなずいた。

露木光。

花柳大学二年生。

とくにパソコンに関する技術はないようだ。

どちらかというと体育会系。

二人は警察署を出て、暗くなった町に足を踏み入れた。

「ここからじゃ葵通りは遠いわ」

すると眩しい二つのライトが二人を照らした。

ものすごいエンジン音とブレーキ音、青いミニワゴン車が止まった。

運転席の窓から篠原ことはが叫んだ。

「おい！急いでんだろ？乗んな！」

いつもはただ庭を守る管理人が少しだけ格好よく見えた瞬間だった。

直ぐ様後部座席に座った二人を乗せ、車は猛スピードで発進した。

荒すぎる運転に芦屋は手すりに掴まった。

「寮長！」

「花岡から連絡があつてな、本当は中で頼まれ事があつたんだが急ぎなら送つてやる！」

すると手すりに掴まった安西が行き先を葵通りと告げた。

車のスピードがさらに速くなる。

止まったら絶対吐く。かもしれない。

二人は思った。

* * *

フルートは高音域に位置する楽器で、独奏も重奏も美しい。まあ、どの楽器も美しい音色を出すのが、アルニカは楽しそうにその音を響かせていた。

ジュリがぺたりと座ってアルニカの音色を静かに聴く。

その音色は葵通り全域に広がった。

最後の小節を終え、静かにアルニカはフルートをくるりと回した。ジュリが小さな拍手を送る。

「ありがとう」

アルニカは軽くお辞儀をし、その顔で言った。

「教えてくれる？」

ジュリはうなずいた。

「ねえアルニカ、恋をしたことはあるかしら」

アルニカは少し頬を赤らめた。

そしてひたすらに否定した。

するとジュリは微笑んで語り始めた。

「5年前、私は恋をした」

ちょうどその日は雨が降っていて、私は研究所を出たところだった。アルゴリズムの完成に近づいていた。

視界の悪い一本道で私は車にはねられた。

とても眩しくて、冷たかった。

雨が当たる音がすごく大きく聞こえた。

その時、彼と出会ったの。

次に目を覚ますと、病院にいて手当てされていた。

最初、何が起こったのかわからなかった。

助けてくれた人は外の受付前で寝ていた。

まだ高校生だった。

露木光。

ハンドボール部だったんですって。

人一人軽々と持ち上げそうな、背の高い子だった。

それから、私たちは連絡をとるようになった。
研究者になって、恋をするなんて思いもしなかった。
胸が熱くなって、心が踊って、世界が美しく見えた。
幸せだった。

でも事件は起きた。

あの日、この場所で待ち合わせをしていたの。

でも彼は来れなかったの。

何故だかはわからないけれど、夜になっても来なかった。

そして帰ろうとした時、異変に気付いた。

ログアウトができないことに。

自分のメインフロアに行くと、自分が端末機の前で死んでいた。

頭から血を流して。

これほどの恐怖はなかった。

自分の死に顔を見るなんて。

二度と現実世界には戻れないなんて。

私はまだ生きているのに！

アイコンは一定時間を超えると電波を失い、感知されなくなってし

まうの。

私はその日から、電腦世界の亡霊になった。

もちろん彼が探しにきて、隣にいても気付いてはくれない。

どんなに触れても感触さえない。

突然一人ぼっちになって、ずっと泣いた。

どれだけ寂しい5年間を送ったか！

でもつい最近、彼は私のメッセージを見つけてくれた。

私を書いた暗号を見つけてくれた。

でも彼には、解き方がわからなかった。

だからゲームをつくった。

暗号を解いてもらうため。

でもそれだけじゃなかった。

彼は人を殺し始めた。

やめてほしくて叫んだけれど、私の声は届かなくて、何もできなくて。

でも彼が捕まるのは嫌でしようがなくて。涙が止まらなくて。

雨が降った。

「会いたい……………！」

ジュリは仮面の下で泣いていた。

アルニカがフルートを消し、膝をついた。

肩がひくひくと動き、すすり泣く声が出た。

「ジュリさん、会いに行こう」

ジュリが顔を上げた。

ふざけた仮面だが、不思議と悲しげに見えた。

「彼の家に行こう」

「私、彼には見えないのよ？」

「大丈夫」

アルニカは強気な笑みを浮かべた。

「私のパートナーが向かってる。私たちも行きましょう」

午後10時24分。

アルニカはジュリを連れて葵通りに入った。

露木光。

どこかで聞いたな。

そしてハツとレストランを思い出す。

電子警察らと黄緑頭の青年の間を割った筋肉質バリバリの青年だ。

自己紹介もして、誕生日まで言っていた。

いつだったかなんて忘れたが。

とにかく彼のことだ。

会いに行かなくて。

ジュリが、消えてしまうその前に。

愛する彼のところへ。

と思った瞬間だった。

答えは。

「その答えは……！」

ソノ答エハ？

第四章 1：アルゴリズム（前書き）

今日はクイズつきです。

簡単かもしれませんがどうぞ、お楽しみください

第四楽章 1：アルゴリズム

第一問：ふくろうつのおなかにあるいろは？

はい、楽勝。

第二問：クラリネットこわしちゃった、のうたで一つだけ出る音は？

……あ、楽勝。

第三問：朝は4つ、昼は2つ、夜は3つ、これは？

うわ、楽勝。

第四問：冥王星が太陽系からはずされたのは何年？

はい、楽勝。

第五問：首都花柳の旧名は？

はい、楽勝。

第六問：ギリシャ神話のアルテミス、別名は何の女神？

簡単、楽勝。

第七問：ここから四問前の答えは？

え?! ……ら、楽勝。

とこのように続いたオンラインクイズ。

クロは難しい問題を全て解き、最後の問題に直面していた。

第24 1問：ソノ答工八

仲間外レヲ探セ

クロが初めて問題の前で止まった。

おそらくこれが秋元珠理の暗号。

ヒントは仲間外れ。

つまり今あまり使われない簡単なアルゴリズム。

なぜかけか？

違う。

これは……………。

「やはり……………解けないのか？」

「あ？お前が犯人だな？」

露木がタイピングを音声化していた。

集中しているクロにとっては邪魔者でしかないが。

これが誰にも解かれず、人も殺した問題。

「解けないなら……………」

クロがイライラして歯を食い縛った。

「黙ってる！！」

露木のタイピングが止まった。

「俺が解いてやるから黙って見てろ！次喋ったらバグらせるぞ」

クロは考えた。

ひたすら頭を回転させ、あらゆる知識を引っ張りだした。

そしてひらめいた。

その時、露木の部屋に生徒会の芦屋と風紀委員の安西が入ってきた。

「露木光！あなたを殺人容疑で逮捕しま」

「いいからマジで黙ってる！」

芦屋はパソコンを覗いた。

「黒猫？不正アイコンじゃない」

クロは一切視線をそらさずに怒鳴った。

「そいつの逮捕も延長！俺が解くまで待ってる！」

クロは問題を解きはじめた。

* * *

午後10時41分。

アルニカは正直、迷っていた。

ジュリの仮面はウィルスそのものだった。

真っ黒に染まった物体からは、ジユリは見当たらない。

亡霊アイコンであるために、取り込まれてしまったのだろうか。

戦ったほうが良いのか？それとも救うために尽力したほうが良いのか？アルニカは必死に考えていた。

戦ったら、死んでしまうのだろうか。

首を横に振った。

「ジユリさん助けないと！絶対連れてくんだから！」

大きな銀の音叉を出し、精一杯震わせた。

ウイルスに向かって叩きつけると、まるで液体のように黒いウイルスが飛び散った。

その一滴一滴が刃のように尖り、アルニカを目掛けて飛んできた。

音叉だけでは庇いきれず、いくつか切り傷を受けた。

流れるほどではないが、地味に痛い。

「クロちゃんきつと問題解いてるだろうし……」

ウイルスに詳しくはないアルニカは少し距離を置いた。

どうすれば？

そう考えていた時、黒いウイルスからジユリの金髪がちらと見えた。ハツとした。

まだ中に在る！

「頑張れば……できるかも」

アルニカはまた音叉を精一杯震わせた。

黒いウイルスのど真ん中に音叉を突き刺した。

黒い液体が飛び散り、奥にジユリが見えた。

真っ白な肌に蒼い瞳、そこから流れる大粒の涙、アルニカは手を伸ばした。

「ジユリさん！手を……！」

尖った黒い液体がアルニカを突き刺す。

目を瞑ったが、アルニカはジユリを何度も呼んだ。

うまく届かない手をさらに伸ばす。

そして遂に彼女の小さな手をつかんだ。

ぐつと強くつかみ、引き上げようとした。

しかし、ウィルスの引き込む力も強く、アルニカさえ引き込みそうだった。

「……退けよこのバカ野郎!!」

アルニカが叫んだ一瞬、ウィルスが大きく飛び散った。

一気に引き上げられたジュリは、アルニカと一緒に地面に叩きつけられた。

アルニカはすぐにジュリを起こし、一つに集まるウィルスを見上げた。

「アルニカ! きっともう時間が無いわ!」

アルニカは驚愕した。

ジュリの体が透けはじめていたからだ。

彼女の後ろにある景色がうつすらと見えた。

しかし、まだ触れることはできないようだ。

アルニカはジュリに背を向け、屈んだ。

「乗って!」

「でも」

「早く!」

涙でぼろぼろのジュリは真っ白な袖で顔を拭った。

素早くアルニカの背に乗ると、彼女はすぐに走り出した。

後ろには黒い液体ウィルスが追いかけてきているからだ。

地面を鋭く突き刺してきた。

それを避けながらアルニカは走り抜けていく。

クロが残した足跡を見つけ、ひたすら走った。

急げ。

走れ!

* * *

午後10時53分。

クロは電腦上にたくさんの方角リズムを浮かべていた。

露木や芦屋達にはちんぷんかんぷんなアルファベットの列や数字の列、全てをクロはパズルでも解くかのように動かし、呟いていた。そして一つの答えを導きだした。

「答えは“J”」

誰も予想しなかった答えに啞然する三人に対し、問題はすっと溶けるように消えた。

露木が震えながら言った。

「正………解………？」

クロが鼻で笑った。

「楽勝」

苦戦してたくせに。

芦屋が心の奥底で呟いた。

クロはふと今までの道を振り返った。

アルニカが来ない。

そろそろ来てもいい頃なのに。

何をしているんだ？

何かあったのか？

さらに逮捕は延長された。

* * *

午後10時55分。

アルニカはひたすら走っていた。

しかし、大問題に直面していた。

この黒いウィルスゲームファイルに侵入させるのは危険なのであ

る。

中にはクロがいるからだ。

アルニカはファイルの入口でジユリを下ろし、音叉を構えた。

「行つて」

「駄目よ！アルニカが死んでしまう！」

「会いに行くんでしょ？！早く！」

そう叫んだ瞬間、黒いウイルスの真上から大量の水が落ちてきた。

アルニカは咄嗟にジユリを背中で庇った。

五感ネットワークのため、背中に冷たさが伝わった。

水を被ったウイルスは大きな声で唸った。

アルニカの目の前に青い花びらが小さく舞った。

「大丈夫？アルニカ」

アルニカはその時、あり得ないものに出会ってしまった。

水色の髪と瞳、胸には青い布を巻き、その足は魚の鱗がきらめいた。

「……人魚」

それ以上言葉は出なかった。

美しい人魚が宙に浮いていたのだから。

人魚はクスクスと笑って電脳空をふわりと遊いだ。

その人魚の周りには青い花びらがいくつも舞っていた。

「この水で浄化したからもう心配無いわ。さあ、行きなさいアルニカ」

アルニカは何が何だかわからなかったが、もう一度ジユリをおぶつ

た。

「あ、ありがとう！あなたは……」

「ウィンディーネ。一応生徒会よ」

「げ」

アルニカは一步退いたが、ファイルに入る前に振り返った。

「ウィンディーネ！」

さらにウイルスを浄化しようとしていたウィンディーネが手を止め

た。

「ありがとう！」

ウィンディーネが微笑むと、アルニカはファイルに突っ込んだ。問題の扉は全て開かれ、クロが解いたことを知る。少しホツとする。

ジュリがその顔を見て微笑んだ。

「そのパートナーさんが好きなの？」

アルニカが顔を真っ赤にした。

少しスピードが落ちたが、また元に戻った。

「違う違う！そんなんじゃない！」

「大丈夫、きつといつかその人にピーンとくる時が来るから」

アルニカはジュリをちらと見て微笑んでいるのを見た。

「ピーンと？」

「そ、ピーンと　それが恋のはじまり」

アルニカは口をへの字にして首を振った。

「覚えとこ！ジュリさん、まだ大丈夫？」

「ええ……」

少し弱々しくなった声は、アルニカのスピードをさらに上げさせた。長い道を走り続け、ついに黒くて小さな影を見つけた。

「クロちゃん！！」

「アルニカ！」

午後11時03分。

やっと合流したアルニカはジュリを下ろした。

ウイルスに刺されて血を流すアルニカに一瞬慌てるも、クロはジュリを案内した。

現実世界の画面が大きく映されていた。

そこには露木光、芦屋千代、安西潔子がいた。

芦屋を見てギクツとするアルニカ。

バレないよね？

しかしそんなことを考えているような暇はないのだ。

ジュリは画面に手をついた。

涙をぼろぼろと流しながら。

一方、現実世界の露木にはパソコン画面に異変があった。アルニカとクロしか見えないのだ。

「……見えない」

これほどのショックはなかった。

亡霊アイコンはやはり見えないのだろうか。

ジュリが泣きながら歯を食い縛る。

「光さん……」

少し考えていたアルニカはひらめいた。

ジュリの肩を叩き、右手を出した。

クロが首をかしげた。

「ジュリさん、私の手をつかんで」

何で、とジュリが聞くとアルニカはまた強気な笑みを浮かべた。

クロは無性に嫌な予感がした。

「私に憑依しなさい」

全員が絶句する一言だった。

第四章 1：アルゴリズム（後書き）

* 答え合わせ*

1

くろ

2

高いド

3

人間

4

2010年

5

東京

6

月の女神

7

人間

クロ：と答えはこのようになる。

最後の問題は次回に回すからな！

アルニカ：私、全くわからなかった。

クロ：あなたのその頭じゃ……ゴボツ！！

「クロが踏まれる」

アルニカ：どんな頭かしら？きつちり説明してもらいましょうか？

クロ：ひいひいっ！ごめんなさいでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8769q/>

アルニカ交響曲

2011年10月13日13時50分発行